
ライスMと味噌汁で

MAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライスMと味噌汁で

【Zコード】

N30771

【作者名】

MAS

【あらすじ】

高校一年生の悠木奏音（男）がある日、学食でお嬢様の迷惑に巻き込まれてしまう。それをきっかけに、平和だった奏音の周りがかしくなっていき……。奏音の駆け抜けの一ヶ月のお話。

2010年6月6日、修正いたしました。以前のものの続きは第6話の途中からです。

プロローグ

突然だが俺は一人で学食に来ている。小遣いに余裕ができたから、今日は奮発してラーメンを頼もうと思つ。

何で一人で来たのかと言つと、別に友達がいないわけじゃない。いつも一緒に食べている周を連れてくるとラーメンを奪われかねない。せつかくのラーメンだ。誰にもやつてなるものか！

学食のおばちゃんに挨拶すると何も言わずにいつものライスマと味噌汁を準備している。

「おばちゃん、今日はラーメンを」

「もつと早く言いなさい。もう準備しちゃつたじゃないの！」

挨拶だけで準備するなよ！ とは、思つたが心に留めておいた。だつて兵糧攻めなんてやられたら大変だからな。

「はいよ、ラーメン」

おばちゃんは面倒臭そうに渡してくれる。今、指をわざと入れたよね？

おばちゃんの妨害を乗り越えてあいている席に座つた。この時間は混んでいるので、席に座るのにも一苦労だ。

「なんですか？」このメニューは安っぽいですわ！」

後ろで文句を言つている奴を振り返つて見てみると、そこには漆黒でつやのある髪の長い女子が一人の女子を連れて座つていた。二人のショートカットの女子たちは鏡を見ているかのようじ顔をしている。

周りの娘たちも十分可愛いが、中でも長い髪の女子は格別だ。その娘を見惚れているであろう男子の中には、彼女連れの奴までいる。まあ、顔だけならかなりいいとは思うが、性格があれじゃあね。

「ん、んぐ。まずい！ こんなのが食べられませんわ！」

そんなこと言つたらおばちゃんの逆鱗に触れちまつせ。ほり、3、2、1……。え、何もない？ おばちゃんを見てみると、ひつひつを睨

みながら拳を壁にぶつけている。怖！

「やべ、せっかくのラーメンが伸びびまつ」

「こんなのことを見にしたせいでラーメンをまくしたくないからな！ さっそく、いただき……。」

まちやん。

「ラーメンの中に何かが落ちた……、これは消しゴム？」

どこからどう見ても有名な某消しゴム。なんで？

消しゴムが飛んできた方を見ると、さつきのお嬢様気取りの女がいる。

「何してくれんだよ、三ヶ月ぶりのラーメンだつたんだぞ！」

消しゴムには大量の消しカスが付着してたらしく、水面に浮いている。これじゃあ、もう食えない。

「そんな安っぽいものでそんなに怒らなくともいいじゃないですか？」

「俺にとつては豪勢なんだよ！ 弁償しろ！」

俺たちが騒いでいるので、周りの奴らが食いながら見ている。見せもんじゅねえぞ、ゴロー！

「あいにく、お金は持ち歩いてませんわ」

「じゃあ、どうやってお前が食つてるの買つたんだよ！」

「知りませんわ！ 気分を害されました。ミキさん、マキさん行きますわよ」

その女は取り巻きの一人を連れて行ってしまった。

そこに残された、俺と消しゴム入りラーメン。

「気分を害されたのはどっちだよ！」

プロローグ（後書き）

この作品は以前に短編として書いたものです。

面白いと感じていただけるかわかりませんが読んで感想を書いていただけると幸いです。

つたく、ちひかはえらい田にあつたぜ。あの後、食べ物を粗末にするなつておばちゃんに怒られたしな！ なんで俺がそんな田に会わなきやならんのだ！

まあ、今日の授業も終わつたし帰るか。今日は見たい番組はないけど、ぼーっとテレビでも見るぜ。

お？ 前にいるの周じやね？ ちよつと、ちよつかいでも出してから帰るか。

「おい、周。 んぐ！」

突然後ろから押さえつけられて、口にハンカチをあてられた。ぐぐ、息できん。力も強すぎ！ 抵抗できん。なんか俺引きずられるし……。意識も……、もう……わうと……。

「ん、誰か読んだか？」

反応鈍すぎだろ！

「おーい奏音なんだる。じじじじじじじじじじじじよー！ 出でこない？ なーんだ、気のせいか」

待つて……くれ、俺ならここに……。助けて……。

「ん。こ、ここは？」

気付いたらそこは豪華な食堂だった。天井からはシャンデリアが吊るしてあり、床にはシックなじゅうたん。テレビの中でしか見たことがないような金持ちのパーティーホールみたいな部屋だ。

「こには、池宮城邸の食堂です。」

後ろから凜とした声がしたので振り返つてみると……、振り返れねー！ 椅子に縛り付けられてる。

「何のつもりだ！ 僕なんか誘拐しても、うちの親共は一円たりとも出さないぞ！」

言つてて自分で悲しくなつてきた。

「貴方は悠木奏音、男、16歳。宮城学園高校一年、特進科の一組に所属。前回の期末テストの学年順位は5位。三人家族で兄弟はない。父親は保険会社のサラリーマンで年収は……万円、転職一回。貴方のお小遣いは三千円。学食ではいつもライスMと味噌汁を注文。趣味は……」

「もういいよ！ どこからそんなに調べたんだよ！」

「マキさん情報収集技術はすごいでしょう！」

声の持ち主が俺の視界に移動してきた。こいつどこかで……って、忘れるはずがねえ！ 昼の消しゴム女じゃねえか！

「そういうえば、自己紹介がまだでしたね。私は池富城紅葉いけみやしろ くれはです、覚えておきなさい！」

紅葉と名乗ったこの女は、長い手入れのいきどどいた柔らかい髪を手ですいた。

お前の名前なんてどうでもいいんだよ！

「てめえ、なんで俺を誘拐した！」

消しゴム女は不思議そうな顔をする。どう考へても誘拐したんだろ！

「ただ食事に招待しただけです！」

どうしたら、薬で眠らした後引きずつてくるのが食事に招待になるんだよ！

「私は昼のことが悪かつたと思い、せめてもの償いのために招待したんですねの」

もう疲れた、テンション高いまま維持するのは大変なんだぞ。

「はあ～、そうかよ。悪いと思つてゐなうこのロープをほどいてくれ

「そうですね。ミキさん、マキさんほどいてください」

紅葉がパンパンつと手をたたく。

「はつ」

突然両脇に一人が現れた。こいつらは……、昼の取り巻き一人か。一瞬でロープをほどいた二人は一つの間にか消えていた。

「さて、食事にしましょつか」

昨日は本当にひびいていたぜ。あの後、食事になつたんだが、空気が重くて……。あの女ときたら食事のときは何もしゃべらなかつたし、俺が話しかけると食事中だから話すなどと？ 周りにはスーツを着た人達が並んでるし……。もつ何を食べたか覚えていない。俺なんかじや一生出会えない様な豪華な食事だつたんだけどなあ。あ～、もつたいねえ！

「おー、奏音！ てめえ昨日何やつてたんだよー。」

いつの間にか学校に着いていたらしい。なぜか周が怒つている。「お前、帰りに声かけただろ！ それで振り返つてもいないし。かなり探したんだぞ！」

こいつあの後、俺を探してたのかよ。

「誘拐されたんだよ！ ほんとつ、迷惑なお嬢様もいたもんだけ」「誘拐？ お嬢様？」

不思議そうに俺の言葉を繰り返す。馬鹿に見えるからそういうのはやめとけや！ まあ、口に出しては言わないよ。そういうとこ直したら周のキャラが壊れちまうしな！

「そつなんだよ、無理やり連れてかれて食事に招待だぞ！ 頭がおかしいとしか思えないね！」

「お嬢様ってどんな娘だつた？」

こいつよつほど『お嬢様』といつ言葉が気になつてるらしく。

「まんまお嬢様だな。確か変な名前で……、えつと……。ああ、そうだそうだ！ 『紅葉』とかつて言つてたな、変な名前……だろ？」

なぜか、俺が『紅葉』の名前を出した瞬間に周の表情が凍つた。いや、周だけじゃない、クラス全員が凍然としている。

「おまつ、マジで『池宮城紅葉』と話したのかよー。それに食事だとおー！」

「ん？ なんだ、あいつ有名なのか？」

まあ、あんな目立つ奴なら有名でもおかしくないけどなー。

「知らないのか！あの池富城財閥の『ご令嬢じゃないか！』の学
校関係者で知らん奴なんていないぞ！」

「……、マジで？なんでそんな奴がこの学園にいるんだよー。」

確かに家はそこら辺の金持ちってレベルじゃなかつたが。

「この学園だつてあの財閥の物だら？高校の名前を思い出してみ
ろや」

クラスメイト達も、俺が紅茶と食事をしたと知つて好き勝手騒い
でいる。いいなーとか、あの人俺らが話しても無視するんだぜとか、
逆玉の輿じゃんとか。つて、最後のねえぞ！俺はあんなわがまま
な奴と一緒にたりたくはないからな！もつとおしとやかな娘が好
きなんだよ！

「はいはい、てめーら黙れよー」

そこに教師が入つてきた。やい教師！そんな言葉づかいでいい
のかよ！貴方、まだうら若き乙女ですよね？……、ギリギリね。
「えーと、いない奴いたら返事しろよー。よし、全員いるな」

いつも通りそう言って教室を出て行こうとする。あいつ、生徒に
欠席つけたことないだろ！

その時、教室の戸がピシャンとでかい音を立てて開いた。硝子割
れるからー

そこにいたのは怒り狂つたおっさんだつた。……、誰だよ！

「池富城財閥の会長じゃないか！」

へー、池富城財閥ノ会長サンナンデスカ。……、ナンノヨウデシ
ヨウカネ？

「俺の娘をたぶらかしたのは何処のどいつだあ！」
やつぱり……。娘が娘なら親も親だな。

「お前だろ！」

「早く行けよ！」

貴方達、薄情だね。

周りの反応を見て会長様が俺を連れていく。いや、俺も抵抗しな

かつたわけじゃないんですよ？」の人、力ありますぎ……。てか、昨日もこんなことあつたよ？

「何なさるんですか！」

見なおしたよ！ 教え子が連れていかれそうになつてゐるのを助けようなんて。これからは敬意をこめて教師Aと呼ぼつ！ 実は名前覚えてないんだよね～。後で周に聞いと～。

「ぐびになりたくなればここを通せ～！」

「どうぞどうぞ」

「おい！ ためらひもなく俺を差し出しあがつた！ そう言つてる間に会長様は俺を引きずつていぐ。ひ、引きずらないでえ～。誰か助けてえ～。

さて、私は黒塗りの高級車（運転手つき）に押し込まれたんですが、会長様はなかなか口を開かない。

運転手が出発前に一言言つたのが最後だ。もう十分前かな……。会長様は何処を見つめるでもなくぼーっと前を見ていぐ。

「……」

「今なんか言つたか？ 小声過ぎてわからねえ！ さつきあんなに叫んでたじやねえかよ！」

「紅葉はなあ……、昔から素直で……、笑顔を振りまいてくれるし……、本当にいい娘なんだ……」

「そうかあ？ あんなにわがままな奴が？」

「それなのに！ それなのにお前ときたら、紅葉が強く断らなかつたのをいいことに、食事に無理やり連れてつただと～！」

会長様は顔を真つ赤にして、怒りで肩を震わせながら睨みつけてくる。

「つて、おい！ 僕が無理やり連れてつた？ いつそんなことあつただよ！」

「紅葉をお前の毒牙に掛けるわけにはいかんのだ！」
「勝手に話を進めるなー！」

「会長さん、俺の話を聞いてください…」

「言い逃れするつもりか？紅葉とは遊びだつたところのつか…」

「えー！ なんでそんなに誤解してんの…」

「そんなことないです！ 俺、紅葉さんのこと別に何とも思つてしません！」

「あんな迷惑なやつ、興味ないから…」

「なんだと。お前、紅茶を弄んでおいて何とも思つてしませんだあ…」

「ヤバッ、失言つたよ！」

「俺は娘のためなら人一人を物理的に、社会的に、精神的に殺すことをだつていとわない。覚えておきなさい…」

「脅しきたよ！」

「さて、君はこれからどうする…」

「ここでお腹が減つたとか冗談を言つて俺が魚のえさになりそうだから、自肅しましょ。」

「これからは、紅葉さんとは一切関わりを持ちません…」

「本当だな？」

「会長様の口が吊りあがつてゐるんだけど…」

「ほ、本当です！」

「じゃあ、これから一度でも紅葉と話したら消えてもらひからな…」

「いこな…」

「有無を言わせない気迫がある。」

「は、はい…」

「そうか、なら安心だ。では君はここに降りたまえ…」

「えー！ 俺ここがわからないんだけど…」

「早くしたまえ！」

最終的に運転手につまみ出された俺を置いて走り去つていった。

ハハハ、ヤト帰ツテコレタワ。ここに止まなことばつかだよ。

厄年ではなかつたはずだけど…。

「ただいま」

「奏音！ こんな時間までどこで何してたんだい！」

「はずもなかつた。」

「いろいろ大変だんだよ！ 飯は？」

マイマザーは自分の腹をポンポンと叩いた。

「喰つちまつたのかよ！」

「昨日も遅く帰つてきて、飯はいらぬとか言つたのは何処のどつだい？」

確かに昨日のあの女のせいで遅かつたけか。あの親子め！ とこ

とん俺に迷惑掛けやがつて！

「仕方ないだろ！ 無理やり連れて行かれたんだから！ なんか喰うもんねえの？」

「ないね！」

言い切りやがつたよ！ 仕方ない、台所でなんか探すか。

「奏音、何やつてんだい！」

「なんか喰うもの探してんだよ！」

「あんたがなんも出してくれないからだろ！」

「お前に喰わせるものなんてないね！ 台所から出てきなー。」

台所にも居ちゃいけないのかよ！

しゃーね、もう寝るか！

「台所に来たついでに皿洗つてきなー。」

ひでえ。

今日の朝食は食パン一枚（六枚切り）とコーヒー一杯（インスタント）。育ち盛りの俺には全然足りないが仕方ない。家では母は絶対だ！

「あー、腹減つた」

口に出して言うと空腹も加速する気がする。

「おはよー。奏音ちゃん」

後ろから俺の頭を突き飛ばしながらやつてきたのは瑞穂みずほだ。こいつは俺に追いつくために走ってきたのだろう。肩で息をしているためにトレードマークのポーテールがふわふわと揺れている。

「何すんだよ！」

「久しぶりに一緒に行けるのがうれしくて！」

俺に向けてくる満面の笑み。こいつは眞にこの笑みを振りまくから勘違いする奴が後を絶たないのだ。

そういうや最近一緒に学校へ行つてなかつたな。学校でも話さない

し。別にどうでもいいが。

「昨日はどうなつたの？」

会長様による誘拐のことを言つているらしい。

「開放してもらつのが大変だつたよ！」

そんなん、話をしている俺の隣に一台の黒塗りの高級車が止まった。

見覚えあるぞ！まさか！

降りてきたのは従者二人を連れた紅葉お嬢様。ここに女の娘が四人いるが、彼女の硝子のような透明な肌は誰も真似できないだろう。そして、今の俺には紅葉お嬢様の姿を眺めている余裕などない。

ヤバい！ こいつと関わると消される！

「待ちなさい！」

無視、無視。

「行くぞ、瑞穂！」

「で、でも。この人奏音ちゃんに話があるみたいだよ？」「

察してくれー、瑞穂！ 俺は拒否してゐるのわからないか！

「どうして私を無視しますの！」

「お前と話すと消されるんだよー！」

あー、反応しちまつたよ。死亡確定！ もういい！

「で、何の用だよ！」

反応しちまつたなら仕方がない。話を聞いてやるか！

「昨日お父様に招待されたそうですね」

「招待？ 誘拐の間違いだろ！ てめーら親子は誘拐ばっかりしゃがつて！」

普通に招待できないのか！

「お父様をバカにしましたわね。覚悟しなさい。」

何をだよ！

「ミキさん、マキさんやつてしまいなさい。」

「うつ」

一瞬意識が遠のいた。見るとミキと見られるほう（よく似ている）ので自信はない）がスタンガンを持つている。

「天の裁きです！」

「何が『天の裁き』だ！ ふざけやがつて！

「勝手なこと言つてんじゃねえ！」

「やめなよ、奏音ちゃん！」

「なんで止めるんだよ！ いや、何を止めるんだよ！

「あなたはこいつの何ですか？」

「あつ、はじめて衣川瑞穂きぬかわみずほです。奏音ちゃんの幼馴染みくわんだよ。」

「なに自己紹介してんだよ！」

「幼馴染？ こんなとの付き合わないことをお勧めしますわ！」

「ひでえ、お前は俺の何を知つてんだよ！」

「ん~、私の友達は私が決めるから気にしてくれなくていいよ。」

「ふん！」

紅葉お嬢様は怒つて先に行つてしまつた。まあ、先に行つてくれて助かつたが……。

つてか、俺はどつなるの？

朝から疲れたよ！ 授業始まるまで寝るかな。

「おーい、奏音！ 紅葉お嬢様と何話してたんだよ？」

「周のせいで睡眠を妨げられたじゃねえかよ！ タイミングの悪い奴め！」

「なんで知つてるんだよ！」

ほんの十分前の事だぞ！ いへり紅茶が注皿を集めてると言つて
も早すぎだろ！

「いや、前にいたから」

見てたのかよ！

「見てたならわかるだろ！ あいつの勝手さを！」

「まあ、逆玉の輿狙つてるんだからそれくらい我慢しこよ」

「狙つてねえよ！ いつ俺がそんな素振りをしたんだよ！」

「狙つてないって言いたいんだろ？ じゃあ、なんで何回も話すの？ お父さんとも会つたし」

「こいつ、俺の言いたいことわかつてんじゃねえかよ！」

「別に会いたくてあつたわけじゃない！ 見てただろ無理やり連れ
ていかれるのを」

「いつまでそんな」と言つてんだよ。もうばれてるぜ！ 観念しろ
よ！」

「なぜ、觀念せこやならんのだ！」

「あんな奴、逆玉の輿狙つても割に合わん」

「お前そんな」と言つてると夜道で後ろから刺されるぞ！」

紅葉を狙つてるやつ多いんだから、と周は続ける。

「知らん」

もう周を無視して寝ようとするが、担任である教師Aではなく学
年主任が入ってきた。寝れなかつたじやねえかよ！

「悠木君、後で職員室に来るよう」

なんか呼び出しがられるような事したか？

周がほら教師にも狙われてる！ みたいな顔をしてくる。うざい！

職員室に入るとやつきの学年主任がたばこを吹かしながら、手招
きした。こんなところでたばこなんて吸つていいのかよ！

「悠木君、君は最近池宮城さんと迷惑をかけてるやつですね？」

「迷惑を被つてるのは俺のほうです」

「そんなことはどうでもいいんです！」

言い切りやがったよ！

「重要なのはあの池富城さんが怒っているということです。これ以上何かやつたら退学になりますよ？ 謝つてきなさい！」

「嫌だね！」

「なんかこの教師泣いてるんだけど！」

「お願いだから、俺も首になってしまふんだよ！ 家族を養っていくなくちゃいけないんだからさー。お前が謝ればそれで丸く収まるんだよ！」

泣き落しかよ！

「お前は私たち家族に路頭に迷えと言つのかー！」

「俺は悪くない！」

「いいから、行くぞ！」

教師に無理やり連れていかれる。もう嫌だあ！

今俺は一年二組、つまり紅葉お嬢様のクラスにいる。

紅葉がふんぞり返つて椅子に座つていて、その一歩後ろの左右に

ミキとマキが立つていて。

紅葉の小川のようにきらきらと光る脣は横一直線に閉じられていて、

水晶のような瞳は俺たちを真直ぐ見つめている。

「このたびは御迷惑をおかけしました！」

教師が一生徒である紅葉に深々と頭を下げているが、俺は下げる気はない！

「お前も謝れ！」

「痛い！ 痛い！」

この教師ときたら、俺の髪をおもいつきりつかんで鉛直下向きに

投げ下しやがった！

ガツッ！

俺の頭は教師の手を離れた後、床に衝突した。

痛すぎる……。

教師が生徒の頭を地面に叩きつけていいのかよ！

「本当に申し訳ないませんでした！」

「仕方がないですね、これからはこんなことがないように教育しておきなわーー！」

紅葉の言葉を聞いた教師はフーと息を吐いた。安心したのだろう。ダメ教師め！

「はい、ありがとうございます！」

俺たちは何度も紅葉に頭を下げ教室を出た。

「……、なんで私が小娘に頭を下げないとならんこんだよ」そりや、そう思つだらうな。でも、俺に聞こえるよつて聞わなくともいいんじやないか？

「てめーのせいだからなー！」

「の教師怖！ 紅葉遣いも悪いし。

「最近奏音ちゃん、池富城さんとよく話すよね？」

今日は珍しく瑞穂と一緒に帰路だ。

「別に話したくて話してゐわけじやないし」

「そりなんだー」

なんか上の空だな。このひとときの瑞穂はヤバいんだよー。絶対何か言いだすぞ！

「今日家に来ない？」

ほら来た。何年幼馴染やつてると呪つてゐるんだよー。

「なぜ？」

「お父さんが奏音ちゃんに会つたがつてゐるんだよー。瑞穂の父さんかあー。

「あんま、会いたくないな」

「奏音ちゃん、お父さんに好かれてるもんねー。確かにそうなんだるうが……。

「でも、なんで急に？」

「池富城さんとのことを話したら……」

「また、死亡確定ですか？」

「絶対に行かん！」

一
え

「行つたら俺がどうなるか、想像できるだろ！」

「うわっ！」

何時からいたんだよ！

「ああ、我が息子よ。その辺のことを詳しく教えてくれないかな?」

無理やり連れてかれるの何度目だよ!!

俺は瑞穂父に連れて行かれ、瑞穂の家にいる。昔は通つて瑞穂と遊んでいたが、最近は来ていない。

トレーナーがトランジスタなくないでねえ=

端德父其庵之女量之真刊於

瑞穂父は俺とは違ひ真剣な表情で言ってくる。どうせやくなつてから何をなよ！

「瑞穂を好きにしていいからほかの女には色目を使うなと！」

「男は色皿を傷つけてやれはしない」と、
掩、あ二つの書類が二つ、全部は四つが二つ。

「じゃあ、なんで瑞穂がため息ばかりついていたんだ？」

はあ？ それがなんで俺に関係があるんだよ！

「昨日家でため息ばかりついていたんだよ！」瑞穂の友達に聞いて、メルの前で最も地雷感をもつている「おつづじやなーかー

瑞穂の友達に聞くなよ！

「で、君はどっちが好きなんだ？」

なんでもみんな、そつちの方向にいくかな。
本人たちはそんなこと
考えもしないのに……。

そのとき、瑞穂父の背後に一つの影が見えた。つっても、誰かはすぐわかるんだけどね。

ガツツン！

瑞穂父は後頭部を激しく殴打された。

きやー、殺人よー！

後ろに立っていた瑞穂は息を上げ、右手には自由の女神型のライターが握られている。

あれつて結構硬いんだよねえ。（体験者談）

「ふう、やつと追い付いた」

瑞穂父の速さは自然界最速なのではないだろうか？

「お父さんの言つことなんて気にしなくていいからね！」

瑞穂の引きつった笑顔、久しぶりにみたなあ。

「ほらもう帰つて帰つて！」

追い出されたよ！

瑞穂の父さん大丈夫だったかな？ まあ、明日にでも聞いておこう。

さてと、今日は早い時間に開放されたから、繁華街の方にでも行ってみるか！ そういうえば、まだ今週の漫画雑誌立ち読みしてねえよ！

じゃあ、まず始めは本屋かな。

今週も漫画家さん、夢をありがとうー いやあー、面白かったね！ つらい現実を忘れさせてくれるよ。

思いのほか時間がつぶれたなあ。そろそろ、帰るか！ ん？ あれは周と穂乃香ちゃんじゃね？

周もそろそろ認めちやえよ！ 僕だったら穂乃香ちゃんは紅葉の次くらいにじめんだけだね。

ん、最近奏音と一緒に帰らんくなつたな。奴の周りは忙しいからな。別に帰りたいわけじゃないが。

「叔父さん！」

「叔父さん呼ぶな！」

反射的に振り返りながら叫んでしまつた。後ろからはショートカットで線の細い女の子が髪を揺らしながら走つてくる。

「え、なんで？」

「俺とお前は同じ年だろ！」

同じ年の女の子から叔父さんと呼ばれる俺の気持ちになつて見やがれ！

「でも、叔父さんなのは事実だよ？」

突然だが、皆さん状況が理解できないと思うので説明しよう。俺、泉周には同じ年の姪、泉穂乃香いずみほのかがいる。年の離れた兄の子供が生まれた年に母親が俺を産んだからだ！ 俺の両親頑張りすぎだろ？ 「叔父さん、誰に話してんの？ 頭大丈夫？」

「叔父さんヤメイ！」

『え』と駄々をこねている子供のような顔をしながら見上げてくる。

「でも、私は周君の頭がおかしくたつて好きだからね！」

なぜか、こいつは俺の事が好きらしい。それも、ライクでなくラブだ。でも俺は妹的な奴としか思えない。まあ、好いてくれるのは俺としてもうれしいんだが。でも、でもだな……、

「そろそろストーカーするのやめてくれない？」

そう、こいつのストーカー癖はどうにかしてほしい！

「ストーカーはひどいよ！」

「じゃあ、洗濯機の中の俺の服のにおい嗅いだり、俺が入つてるときに風呂場に入つてこようとしたり、俺の予定を全部手帳に書いて

俺より把握してるのはストーカーって言わないんだな?」

最近ではパソコンを使って俺の行動をショミレーションしたりもするらしい。

「私はただ周君分が欲しかつただけだよ!」

周君分ってなんだよ! ブドウ糖にでも変わるのか!

ちなみにこいつは俺とは別の家に住んでいたが、最近親父に無理言って俺の家で居候をしている。いや、親父は喜んでいたが……。こいつのせいで俺は彼女ができたことがない。好きな子に告白しても一股はいけないよって断られるんだぜ。奏音はしてゐのに!「私はどこまでも周君に着いて行くから!」

「おもいっきり、ストーカーじゃん! てか、俺らは二親等なんだから結婚とかできないんだけど?」

「いとこなら結婚できるんですけどね。」

「それでも私は構わない!」

「俺は構うの! 結婚したいの!」

「私ど?」

「お前とじゅねえ!」

また、新しい朝がやつてきた。昨日は遅くまでゲームをやつてから眠いぜ！ 最近のゲームはすごいなー！ 早く帰つて続きをやりたい！

今日は、なんか車が多いな。てか、ここはすれ違いもできないような狭い道だぞ？ こんなとこ、走んなやー！

そう思つていたら、昨日に引き続き隣に黒塗りの高級車が止まつた。

そこから降りてくるのは会長様！ 顔は怒りで一昨日会つた時と同じ人とは思えないほど歪んでいる。

はは。俺、死んだな。

「私は、一昨日に紅葉と関わつたら消えてもらつと言つたよな？」

「ここで知らないと言つても、知つてると言つても終わりじゃないか！」

「どうなんだ！」

「は、はい！」

「そうだよな、言つたよな？ では、約束通り消えてもらおうか！」

俺はこれからどうなるのだろう？ コンクリ詰めにされて東京湾にでも沈められるのだろうか？ それとも、どつかの軍の外国人部隊にでも売り飛ばされるのだろうか？

「消えてもらう前に一つ聞いておこう。なぜ、命の危機を知りながら紅葉と関わつたんだ？」

「どう答えるよ？ ここでもまく答えれば救われるかもー。う

「ん、これだ！」

「紅葉さんのためなら命が惜しくなかつたからですー。」

「どうだ！」

会長の肩が震えだした。

やばつー！ また失言だつたか？

「ハハハ」

えー、笑いだしたよ！ 怒りのあまり可笑しなったのか？ 今から走つて逃げれば助かるだろ？ つか？ 相手は車だし、狭い道を抜けて行けばなんとかなるんじゃないだろ？ つか？

「そうと決まれば速いに越したことはない！ よし！」

「俺は君みたいな熱い男は嫌いじゃない」

「な、何？ 何とかなったの？」

「よかろう。紅葉と仲良くやりなさい。ただし！ 紅葉を泣かしたら本当に消すからな？ いいな？」

「は、はい！」

「会長様、お時間が」

運転手の人とはまた別の、そのまんま執事といった感じの人人が車から降りてきた。

「わかつた、今行く」

「では、失礼しよう。フハハハハ！」

笑いながら走り去つて行つた。

親公認になつたのか？

命の危機を何とかかいくぐつた俺は、4限目が終わり次第全力疾走しているクラスメイトに混ざるだけの体力もなく、とぼとぼと学食をを目指した。急がないのはいつものことだがな。

購買部で好みのパンを買おうとしたら、走つたぐらいじゃ足りないかも知れないけど、一人学食で食べようと思つたら開いている席は意外とあるもんだ。

ヤベツ！ 周忘れてきた。まあ、いいか。どうせ一緒に行つても二つなんて開いてる席ないし。

それに周ときたら、女の子にいつも弁当作つてもらつてるんだぜ！ もちろん穂乃香ちゃんのだが。奴は穂乃香ちゃんの弁当を食べるのが恥ずかしいらしく、昼は学食で食べて、弁当は早弁か遅弁？ する。昼飯代がもつたいないとか思わないのかね？

こんなことを考えていたら、何が違和感がした。なんだろう？
周りに廊下を歩いている生徒は昼休みなのに一人もいなく、足音も
俺の一つしか聞こえない。何かおかしい？ よーく見てみると、俺
の影が大きいことに気付いた。というか、一人の影がくっついてい
るような？

「旦那様を言いくるめたそうだな？」

ヒツイイ！ 俺の耳元から声が聞こえた。俺は驚いて五歩ダッシュ
ユした後振り返る。そこにいたのは、腕を組んだマキだつた。
こいつ、気配を消して歩幅を合わせて足音を俺のものに隠しながら
背後をついてきたらしい。

「もつと、普通に出てこいや！」

「私がお前の刺客だつたら死んだたな」

「そんな奴、いるかよ！」

スパイ映画の見すぎだ！

「どうかな？ 旦那さまなら送つてきてもおかしくないぞ？」

やべえ、マジで刺客を送られそうだもんな。

「旦那様を言いくるめたならそれで安心か？」

「勝手に勘違いしただけだよ！」

まあ、あの勘違いがなかつたら今頃どうなつていたかわからんが
……。

「旦那様は言いくるめられても、私たちは無理だからな！」

「だから、俺。お嬢様に興味ないって！」

「池富城財閥の財産にしか興味がないのか？ 最低な男だな！」

激しく勘違いしてますよね？ もちろん俺だつて金は欲しいが、
結婚をそういう理由ではしたくない！

「そうじやねえよ！」

「じゃあ、お前は紅葉様のためにどこまでできるんだ？」

「何もできねえよ！」

「なんで、俺があいつに何かしてやんなきやいかんのだ！」

「ほう。見所があるじゃないか！ 自分が何もできないちつぽけな

存在と理解しながらも、紅葉様を求めるんだな
プラスに解釈しそうだろ？！

「 そりゃそりゃ。旦那様が認めたのも納得がいったよ。紅葉様を幸
せにして差し上げてくれ！」

そう言つと、目頭を押さえながら去つて行つた。そんなに感動す
ることだったのか？

なんか周りはおもいつきり勘違にしているけど、お嬢様と会話す
らまともにしたことないんだけど？

今日はもう授業が終わり放課後だ。私は街にあるオープンカフェに直行した。

学園には小学校のように寄り道してはいけないなんて決まりはないんだけど、制服でいると歩いている人の目が気になる。私って自己意識過剰？

なぜオープンカフェに来ているかといつて、穂乃香ちゃんに悩みを聞いてもらおうと思つて……。

悩みとはもちろん奏音ちゃんの事。最近、池富城さんといろいろあって大変そだから、池富城さんと同じクラスの穂乃香ちゃんに相談する。

穂乃香ちゃんなら、今の状況の打開策を見つけてくれるかもしれない。

でも、穂乃香ちゃんに相談するのは間違いかなあ～って思つ今日この頃。他に相談する人もいないんだけどね。

「瑞希ちゃん。ごめん、待つた？」

穂乃香ちゃん、やつと来たよ。

「私も今来たところだよ」

多分、周の事を追いかけていたのだろう。

「で、相談つて言つてたけどやっぱり奏音君の事？」

私つてこうと最初に奏音ちゃんの事が出てくるの？

「そう」

「だよね～！」

穂乃香ちゃんの目が輝いているよー。私の悩みを楽しんでるでしょ！

「最近池富城さんとの噂聞くし。あれつてどいままで本当なの？」

「知らない！」

私には関係ないもん！

「瑞希ちゃんのお父さんも黙つてないんじゃないの？」

「そりゃ！ それが問題なの！」

昨日のあの後、私はお父さんの手当りをお母さんに任せ、私は

部屋に籠つた。

だつて、あんな無神経な人にかかわりたくないなかつたんだもん。
「瑞希ちゃんのお父さんって私に通じるところがあるよね」
自分でわかつてたんだ……。

「それで、瑞希ちゃんはどうしたいの？」

「わ、私？ 私は……、今のままの関係でいたいな」
今の関係を壊そうとは思えない。

「池宮城さんに取られてもいいの？」

「それは嫌だよ！」

「なら、自分から行かなくちやー、後から後悔しても遅いよー。」
でも穂乃香ちゃんみたいにはできないよ。

「でもー」

「私がうまく手をまわしてあげるからー」
心配だなー。

第2話 後編

やつと休みが来たぜ！ 今週は長かった……。かなり面倒事に巻き込まれたからな。

でも、週末は奴らと会つこともないだらう。家でゆつくりするぜ！

「奏音！ 奏音いないのかい！」

母親が俺を探しているみたいだ。嫌な予感しかしない。今のうちにつつからないように外に出よう！

「奏音！ ここにいたのかい。呼んでるんだから返事しなさい！」

やべつ！ 見つかつた！

「暇なら買い物に行つてきな！」

面倒くさいなあ～！

「いやや、今から勉強しようと思つて」

「あんたが勉強なんてするはずがないよ！」

ひどつ！ 俺だつてときどき、たまに、稀に勉強するときもあるはずだと思わなくもないこともないんだけど……。

「ほら、ここに買つものは全部書いてあるから買つてきな！」

近くのスーパーの広告に何個かマーカーでがつけてある。えつと……、紙しかくれないの？

「金がないと買えないだろ！」

「あら、お金が欲しかつたのかい。それならもつと早く言ひな！ つたぐ、面倒だね！」

まるでいつもは渡してないのにみたいに言つなよ！ 忘れてただけだろ！

それで、俺は何を買つてくれればいいんだ？ えつと、千葉産大根レサイズ一本98円！ メキシコ産かぼちゃ1／4カット148円！ 大分産ピーマン200㌘88円！ 山梨県・他国内産ナス2本88円！ 国産若鳥手羽120㌘88円！ お一人様一つ限りか。

これで何を作るんだろう？

つて、これタイムセールじゃん！ あそこのスーパーのタイムセールはおばちゃん達が怖いから嫌なんだよ。やべつ、後十分で始まるし！

「母さん、金まだ？」「

「つるさいね！ もつと早く言わないあんたが悪いんでしょ！」「

ええー、そんな馬鹿な！

「ほり、お金だよ。早く行つてきな！」「

そう言つて渡されたのは五百円硬貨一枚。果してこれで足りるだろ？ いや、足りない！ 足りるわけないだろー！ でも、もう金をもらつてる時間なんてない！ もうおうとしたとじろでまたグタグタ言われるだけだ！

残りはもう八分！ 残された時間は少ない！ スーパーまで信号に止まらなければ自転車で六分といったところ。信号に止まつたらOUTです！

俺は全力疾走する。車も抜いてるぜー！
つおー！

やつと辿り着いたぜ！ ヤベ、もう始まつてるよー。
つおりやー！

頑張つておばさん達の中に手を伸ばす。

まずは大根！ あともう少し。そこだあ！

その瞬間、横からやつてきた手に俺の狙つていた大根はいとも簡単に持つていかれた。

ならば、次はかぼちゃだあー！

しかし、またあともう少しといつてひで取られてしまつ。

今度こそは……。

最終的に俺は母に頼まれたものを一つも取れなかつた。
すべては俺が取ろうとしているのをわざわざ奪つていぐ男のせいだ！

そいつは身長が高く、世間一般ではイケメンと言われる部類の顔をしていた。年齢的には俺と同じくらい。

文句の一つくらい言つてやる」と思つたが、タイムセールが終つた時には見当たらなかつたので言えなかつた。

はー、絶対に怒られるなあ。

店の外に出ると、例の男がおばちゃん達に囲まれてゐる。

おばちゃんにも人気あんのかよ。

何をやつてゐるのかと見てみると、奴ときたらさつきのタイムセールの品をおばちゃん達に配つてゐるじゃないか！

「てめえ、いらぬなら俺によこせやー…」

「嫌だね！」

それだけいふとやつまたおばけやん達と話し始める。なんなんだよ、ここはー！

何も買えずに家に戻つてきた俺に對して、母親は全く怒りもしなかつた。

それどういふか、

「多分買えないと思つてたよ」

とまで言つ始末。じゃあ、買いに行かせるなよ！

「そつそつ、使わなかつた千円そこにおいておきなー…」

「つちよー！ 五百円しかもらつてないんですけどー！」

「そつだつたかい？ じゃあ、千円おいてきなー！」

人の話聞け！ つてか、それはカツアゲですか？ 息子からカツアゲしますか？

俺は何も言わずに五百円を置いてその場を離脱した。

はー、もう疲れた。おばちゃん達はいつもあんな戦いをしてるのかよ！ 男にはとても無理だな。

せつかくの休日だったのに休めなかつたし。もういいや。寝よ。

プルルルル、プルルルル。

このタイミングで電話ですか？ 周だつたら無視しよう。
携帯の液晶を見てみると、見覚えのない番号だつた。

間違い電話か何かだろう。放つておけば勝手に切れるつしょ。

プルルルル、プルルルル。

そのうち、切れるだろう。

プルルルル、プルルルル！

もう少し待てば……。

プルルルル、プルルルル！

だあー！ うるさいな、早く切れや！

「はい、もしもし！ どちら様で？ 間違い電話だつたら怒るよー。」

「えーと。君はあれだろ？ 私がわかるか？」

わかるわけねえーだろ！ それに、あれつてなんだよー！

「誰だよ！ オレオレ詐欺か？ ああー？」

「お前は～ゆ、ゆゆつ、悠木……、かかかつ、奏音だよな？」

「お前は～ゆ、ゆゆつ、悠木……、かかかつ、奏音だよな？」

「オレオレ詐欺ではないようだ。

「そうだが、お前は誰だよー！」

「わ、私はマキだ」

マキつて言うと昨日のおもいつきり勘違いした女だよな？

「何の用だよ？」

「明日、午前十時に駅前の噴水のところに会う！」

「どうせ、面倒ごとだろ！」

「明日は用事があるんだが」

「何の用があるんだ？」

「家でゆつくりしていよつかと……」

チツ！

舌打ちが聞こえたんですけど！

「聞いた私が馬鹿だつたよ！ 明日は遅れたら容赦しないからなー。」

ガッシャン！

切れだよ！ いつも通り強制ですか？

深い眠りの中にいた俺は突然現実世界に呼び戻された。

グボツ！

腹が痛い。何か思いつきり殴られたみたいだ。いつもならこんなことはない。俺の家族は俺が寝坊していても誰も起こさとしないからだ。

完全に覚醒していない意識の俺は田を開けることで、覚醒できると思っていた。

田を開けるとそこに待っていたのは、朝のまぶしい日差しと俺の腹を踏みつけているマキの姿が……。

ああ、まだ俺は夢の中にいるんだ。昨日こいつから電話があったから気になっていて、夢にまで出てきたんだな。

まだ、夢を見ているのならいつそのこと今からもう一度寝てしまおう。夢の中で寝るなんてなかなかできる体験じゃないしな。

先ほどの衝撃も和らぎ睡魔が俺を迎えてきた。まぶたが次第に閉じて行く。やよなら、夢の中のマキよ。

「寝るなあー！」

「ぐはつ！」

俺は再び現実世界に引き戻された。腹の上にあつた足がまた振り下ろされたらしい。

俺だつて、これが夢じゃないことぐらいわかってるさ！ でも、でもだな。寝ざめてすぐにこんな風景が広がつていたら現実逃避の一つくらいいしたくもなるだろ！

「早く起きろ！」

俺は包まつっていた布団をはぎ取られ、ベットから突き落とされた。いくらなんでもひどすぎませんか？

「約束は十時からだろ？ まだ六時じゃないか！」

約束の駅前の噴水までは、俺の家から歩いて十五分ほどとのところにある。九時に起きたつて間に合つだろ？

「男なら早く行って待っているのが当たり前だろ？ 」「

俺だつてその通りだと思うが、それだつて限度があるだろつ！

「俺に何時間待てと？ てか、なんでお前俺の部屋にいるんだよ！」

「お前の母親に入れてもらつた。お前を起こしてくれと頼まれたんだ

だ

「何やつてんだよ！ 俺の知り合いが来たならまず俺を起こしに来いよ！」

「ああ、早くしろー 出かけるわー！」

結局、俺は十時まで三時間待たされた。だが、まだ来ない。誰がつて思うだろ？ もうマキはいるんだから。

「誰か一緒に行くのか？」

「はあ？ 何を言つている？ 昨日言つただろっ！」

「聞いてねえよー！」

「そつだつたか？」

「昨日の事くらい覚えてろや！」

「今日はお嬢様とのデートだ」

「はあーー！」

「なんで勝手にデートなんか仕組んでんだよー 今日は一回あのわがままお嬢様と一緒になのか？」

せつかくの日曜日だというのに早朝から叩き起しられて、お嬢様の面倒をみて……。全く休めもしないんだな。

「もう十時じゃないか！」

「お嬢様は多忙なんだ！ 我慢しろー！」

「はいはー！」

まあ、ちょっとくらい遅れたつていいけどさ。

さて、十一時を回りました。無言で立つていて俺たち一人を通り過ぎていく人々が不審がつてゐるようだ。

「さすがに遅いなあ。私は様子を見てくるからお前はここで待つていろー！」

そう言い残して、マキは人混みの中に消えていった。

そして現在の時刻は午後八時。おもいつきり待つまづかを喰らつた。

空からはポツリポツリと雨粒が降ってきた。ここではびしょ濡れになつてしまつので、この噴水が見える店の軒先に避難した。いつまで待たせるんだよ！ こうなつたらとことん待つてやるぜ！

さて、今日は月曜日。新しい一週間の始まりだ。

でも俺は今ベットの中で寝てゐる。別にまだ早朝だからとかいうオチはない。

昨日待ちぼうけを喰らつた俺は風邪をひき寝込んでしまつたのだ。定番だな……。

軟弱な奴とか言われても仕方がないのかもしねないが、十一時間以上待つた俺の忍耐力は評価に値すると自負している。

でもまあ、土日に体を休めることができなかつたからひづこいと言えばいいのかもしねない。

退屈で仕方がないが。

今、家にいるのは俺一人だ。母親は買い物がてら近所のおばさんと世間話を少々。あと三時間は帰つてこないだろ。

昼飯は米はあるからお粥でも作れとのこと。俺、病人なんですか？ 少しくらい氣を使ってくださつてもよろしいのではないでしょうか？

まあ、自分で飯を作るのは面倒くさいので作らない方向で。別に作れないわけじやないですよ？

ピーポーン！

玄関の呼び鈴の音がした。

誰だよ！ 母親はいないし、俺が出るしかないか。
がちやー！

えー、開いちゃつたよ！俺まだ玄関まで行つてないんですけど
？母親なら呼び鈴は鳴らさないし。

泥棒ですか？

母め、ちゃんと鍵かけてけや！

やべえ、足音が俺の部屋に向かつてくる。

これはもう、中学の修学旅行で貰つた木刀で応戦するしかないなー。

がちやー！ キイー！

扉が開いた。今だ！

「おりやーー！」

「きやあー！」

泥棒は驚き尻もちをついた。

きやあ？ 隨分かわいい声を出す泥棒だな。

よく見てみるとそこにいたのは頭を抱え、震えている瑞希だつた。

「何勝手に入つてきてんだよ！ 泥棒かと思つたぞー！」

「だつて、奏音ちゃんが心配だつたから」

「そつかよ」

「そついいえば、ここつは昔から気になつてゐることがあると、後先

考へず直線に突き進む奴だつたな。

「お昼は食べたの？」

「食べてねえ」

「おばさん作つてくれなかつたの？」

「こつ、まだ俺の母親の性格を理解していないうらしい。俺と知り合つて十何年にもなるのに。俺の家にもかなり来たのにな。

「外で世間話してゐよ」

「そつなんだ、じゃあ私が作つてあげるよー」

「悪いな」

瑞穂の料理は母のよりも断然おいしいから、素直にうれしい。まあ、こんなこと言つたら飯を作つてもうえなくなるから言わないが……。母様、いつも食事を作つてくださつていいこと感謝していますよー

「はい、できたよ」

飯は俺が心の中で母親の機嫌を取つていた間にできていた。機嫌を取るのには結構時間がかかるらしい。

「玉子粥だよ」

「ありがとう。うん！ つまいな」

ツルルルルルル！

今度は電話が鳴り始めた。

「私が出てくる！」

そう言つと瑞穂は食卓の横に置いてある電話の受話器を上げた。

「もしもし、悠木ですが……。はい、はい。……はい、……はい」

ある程度話していたかと思つと、受話器を俺の方へ突き出してきた。

「奏音ちゃん、池富城さんだよ！」

瑞希がなぜか不機嫌に見えた。

「はい、代わりました。奏音です」

「紅葉です。昨日は申し訳ありませんでしたわ。私を待つていて、風邪をひいたんでしょう？」

受話器から聞こえてきた紅葉の声はおしとやかでとても学園で会つた時と同一人物とは思えない。

「確かにそうだが……。いや、そんなことはないぞ！」

「そう」

紅葉は明らかに納得していない様子。俺が『確かにそうだ』とか言つてしまつたんだから当然か。失言だな。

「それで、昨日のお詫びに風邪が治り次第埋め合わせをしたいのですが？」

「気にしなくてもいいぞ？」

俺も強制的につぶやかれた約束だ。紅葉の方だつて似たよつなものだらう。

「私がしたいんです。させてくださいー」

「わかった。いいよ」

紅葉の気迫に押されてついOKを出してしまった。ところで、紅葉がしたいのは埋め合させなのか？俺とのデートなのか？まあ、前者に決まっているか。でも、無理作りされた約束にまで責任を持とうとするのはすごいな。

「それでは、また決まり次第連絡しますわ」

俺が受話器を下ろすと頬を膨らました瑞希の姿が田に入ってきた。

「この幼稚園児だよ！」

「昨日、池富城さんとのデートの予定だつたんだってね？」

「まあ、そうだつたな」

別に隠すような事でもないだろう。

「私が心配してきてあげたのに……。ばつかみたい！奏音ちゃんは池富城さんに看病してもらえばいいんだよー。ふん」

瑞穂は扉を思いつきり閉めるとそのまま帰つていった。

何だつたんだ？

今日は奏音が学校を休んだらしい。

どう考へても私のせいだよな？ 電話でもかけてやればよかつた。まあ、体力もありそうだしそんなに心配しなくてもいいだひつ。明日にでも謝つておくか。

「マキちゃん。マキちゃん」

私の親友である穂乃香ちゃんがやつてきた。

「どうしたの？」

「この前薦めた小説は読んだ？」

えつと、穂乃香ちゃんが薦めてくれた小説つて言つと……、ああ、あれだね。

「えつと、あのネット小説？」

「そうそう！」

「じめん、まだなんだ」

まだ読んでないけど恋愛小説だつてことはわかる。だつて、穂乃香ちゃんは恋愛小説読まないから。

私はファンタジーとかも好きだけど、穂乃香ちゃんとは話が合わないので最近は恋愛小説ばかりを読んで、その内容をよく一人で話している。

「そつかー、あの話は面白いよー 主人公の娘と幼馴染の純愛がいいよ」

「純愛ものなんだ。久しぶりだね。最近はドロドロしたのにハマつてたんじゃないの？」

私は最初、重いのは読みたくないと思つていたけど、薦められて読んでみると面白く穂乃香ちゃんのお勧めをほとんど読破してしまつた。

「そつなんだけど、私の一番好きな作家さんの新作だからー 前から楽しみにしてたんだ！」

「そりいえば、穂乃香ちゃんは悠木の知り合いだつたよね？」

前に穂乃香ちゃんの思い人の親友が悠木だと聞いたことがある。

「そりだよ。それが、どうしたの？……。あ、そりか！ 池宮城さんと奏音君はどこまでいったの？ 池宮城さんのお父さんが奏音君と話すために学園まで来たんだよね？」

「悠木は旦那様に認められたよ。でも、旦那様がこのまま何もしないとも思えないけど……」

旦那様はそういうお方だ。自分の好きな者にはわざと試練を与えよつとする。

「親公認になつたんだ……」

そういうと穂乃香ちゃんは険しい表情を見せた。

「もしかして穂乃香ちゃん、悠木の事が……」

「あはは、それはないよ。私には周君がいるもん！ でも約束が……」

そういうえば、穂乃香ちゃんには好きな人がいたね。犯罪的なまでにアタックしてゐるって噂で聞いたことがある。普段はそんなことしそうにはみえないんだけどね。

「そりだつたね。でも、悠木ときたら旦那様に認めてもらつたのにお嬢様に全然会いに来ないんだよ？ だから私が仲を取り持とうとして……」

「それで、奏音君は学園を休んだんだね？」

「うん。でも、今回は失敗しただけで次回は成功させるからー。」

今日朝起きてみると、昨日の風邪が嘘のよつに治つていた。昨日の瑞穂の卵粥のおかげだろうか？

つまかったもんな。怒つて帰つてしまつたみたいだつたから、瑞希の手料理はしばらく食べれないだろう。

そういえば、瑞希はなぜ怒つて帰つてしまつたんだろう？ お礼を言つてなかつたからか？

まあ、今日会つたら言つておこう。

そう思つて学園に来たのだがなかなか時間が取れず、昼休みになつてしまつた。

今日はパンの気分だな。

「周、今日はパンにしようぜ！」

「パンか、今からだとまともなの残つてないだろ？」

購買部のパンは競争率が高く、チャイムが鳴つたと同時にダッシュしても欲しいものが手に入るかわからないくらいだ。

「大丈夫だよ。人気のあるのは取れないだろうが、結構いろいろ残つてるから。それに奥の手もあるしな」

「そうか。じゃあ、そうしよう」

ほとんど使うことはないが、購買部には裏の入手ルートがある。知つている人は少ないが、今も存在するはずだ。

購買部、そこは学園の中にある最強最悪の戦場の名前だ。そこでは、性別、学年など関係なく戦闘を繰り広げている。

ここで勝利を挙げたものは午後の平穏を約束され、敗北したもののは飢餓に苦しむ。

そこに情け容赦などなく、誰一人他人を気遣う余裕などない。学食も人がごつた返しているのだが、ここは比べ物にならない。俺たちはこの地獄絵図を目の当たりにして言葉を失つた。

「購買つてこんなにひどかつたか？」

「俺らが来てた時はここまでではなかつたよ。最近、新作のパンを販売するようにしたら人が激増したらしい」「こんなことなら、学食にしつくんだつたな。

「どうする？」

「今からじやあ、学食に行つたつて席はとれないぞ」「俺らはこの戦場で敗北と今にも突きつけられよつとしている時、そいつは現れた。

まあ、裏ルートはなるべく使いたくなかつたし。

「悠木、何をしてるんだ？」

「お前は、マキ……じゃな」ミキだな

マキとは雰囲気が少し異なつてゐる。

「ほつ、私たちの区別がつくのか。それで？ 見たといひパンを買いたいみたいだな」

「お前もパンを買いに来たのか？ 池富城とマキとで弁当じやなかつたか？」

前に紅葉と三人で弁当を食べてゐるのを見たことがある。

「そうだな。だが、パンを買いに来たんだ」

「足りないのか？ そんなに食べるようには見えないが……」

ミキはマキと同じでそんなに大きくない紅葉より、一回り小さいほどの小柄な女だ。弁当プラスパンなんて想像できない。

「そんなに食うのに小さいんだな」

そう言つた瞬間、周はミキに睨まれた。ミキは体が小さいことを気にしているらしい。口にしなくてよかつたよ。

「私は運動をしてるからな。ある程度エネルギーが必要なんだ」「何をやつてるんだ？」

ミキが何かの部活に入つてゐるなんて聞いたことがない。

「武術を少しな。お嬢様の護衛として日々鍛錬をしているんだ。ここでパンを買うことはいいトレーニングになる」

「それで、どうやってこの状態でパンを買うんだ？」

ミキと話しかんでいたが人は一向に減っていない。

「私を甘く見てるだろ？ 私にかかるべきなことは余裕だ。そりだ、お前の分もついに買つてきちゃう。なにがいい？」

「総菜パンかな。三つ頼む」

「いいだろ？ そこで待つていろ！」

そう行つた直後ミキは人々に消えていった。

「俺の分はー！」

隣で叫ぶ周。自業自得だな。

昼飯はミキのおかげでかなりいいものが食えた。中には人気の焼きそばパンなどあの時間には存在していないものまで。

もしかしたらミキも裏ルートを使つたのかもしれない。それだったら、悪いことをしたな。

もちろん周は昼飯なし。分けてくれーと叫んでいたが、穂乃香ちゃんの手作り弁当を早弁したんだからいいだろということで、無視した。

そして放課後。ミキに呼び出され下駄箱のところに出向いた。

そこにいたのはミキ、マキ、そして紅葉だ。

「よう。今日の昼は助かったぜミキ！」

「それはよかつた。嫌いなものじやなかつたみたいだな」

あそこは総菜パンはどれもおいしい。よほどの嫌いなものが挟んでいない限り、誰もが全部好きだろう。

「ああ、うまかつたぜ。それで、あの入気の総菜パンはどうやって手に入れたんだ？ あの時間にはもうなかつただろう？」

「それは企業秘密だよ」

やつぱり裏ルートを使ったのか。まあこいつなら大丈夫だろ？ が、その内何かしてやらんとな。

「ミキ、そろそろ本題に行つていい？」

今まで黙つていたマキが口を開いた。

「うん。わるいわるい」

「それで本題なんだが……」

「いつらからの話なんていい予感がしない。また、振り回されることになるだろ。」

「お嬢様がこの前の埋め合わせをしたいと申されたんだ」

「ミキの横にいる紅葉が頷く。

「気にしなくてもいいのに。お前だって、急に予定が入ったんだろ？」

「貴様、お嬢様に向かって『お前』だと、命が惜しくないと見えるー。」

「ミキとマキが怒りをあらわにしている。

「じゃあ、俺はなんて呼べばいいんだ？」

「お嬢様か紅葉様だらうな」

俺は紅葉の家臣じやないんだけど。

「なら、紅葉で」

俺が『様』とかつけても似合わんからな。

「貴様！」

「それで構いません」

今にも噛みついてきたらしなミキ、マキを押さえて紅葉が許可してくれた。

「ですが！」

まだ、納得できなこらしこ。当たり前といえど当たり前かもしないが。

「今はそれより本題です。こんなことをしていたら時間がなくなってしまいますわ」

「はー。」

紅葉の鶴の一聲でミキ、マキはおとなしくなった。

「それで紅葉。埋め合わせはしなくてもいいぞ？」

「そうはいきません！ 私は高貴なる池宮城の娘。約束を破つてそのままなどとはできません！」

さすがに池宮城財閥の『令嬢ともなると、譲れないのもがあるら

しい。

「まあ、紅葉がいいならいいけどな。で、どうするんだ？」
「では、食事に行きません事？ そうすぐ私は夕御飯の時間ですの
で」

「飯と言えば、最初のときも飯だつたな。今度はあんな気まずい食
事じゃないといいが……。」

「それなら、俺が場所を決めていいか？」

「はい、構いませんよ？ 和食でもフレンチでもイタリアンでも、
なんでもかまいません」

俺はそんな高そうなところ知らないがな。

「なら、俺がいつも周と行くとこにしよう」

「お前、まさかお嬢様を庶民が行くよつなどこに連れていぐの
はないだろうな？」

マキが小声で言つてきた。多分お前の想像通りだと思つぞ？
「私はどこでもかまいませんよ？ この前の埋め合わせなのですか
ら。ところで何を食べますの？」

「たぶん、紅葉は食べたことがないだろつな

マキとミキは気付いたらしく。もう止めよつとまじてこないが、
正気かと視線を送つてくる。

「何事も経験だ。もう食べることはないだろつし、庶民の食べ物を
人生で一度くらい食べておいても損はしないんじゃないか？」

俺が紅葉たちを連れていったのは有名な某バンバーガーのチー
ン店。少し奮発して高い方へ行つた。

高い方と聞いて何個か思いつく方がいるかもしれないがそれは想
像にお任せします。

紅葉とマキを席に座らせ、ミキとハンバーガーを買いにいく。

ちなみに代金は俺が四人分俺が出す。今月の小遣いが飛んでしま
うが、ここはケチつてはいけないとこだらう。

「お嬢様が、学食のご飯を食べてまづいとおっしゃつておられたの

を忘れたのか？」

隣にいるミキが口を開いてきた。

「そうだな。でも、俺は紅葉の口に合つようなどころには行かないし、背伸びしても仕方がないかなって」

「お嬢様は、池宮城グループで作られた最高級の食品しか普段食べられないんだ。お屋敷には専属のコックもいるしな。そんな、お嬢様にハンバーガーとは……。飽きられても知らないぞ？」

こいつらは、俺と紅葉をくつつけようとしているんだから、俺と紅葉がうまくいくように言つてくれてるのか？

ハンバーガーを持つていくと借りてきた猫になつている紅葉が目に入ってきた。どちらかと言えば、猫と言うより猫の置物だ。何世代にもわたつて完成させられたであろう、白く一点の墨りもない肌。絹糸を思わせるサラサラとした長い髪。そして、見つめていると吸い込まれそうになる澄んだ瞳。そのすべてを自然が作り出せるだろうか？

俺は紅葉にできるだけ自然に話題を振つた。

「なんで、ハンバーガーショップで緊張してるんだよ？」

「私は普段こんなに騒がしく、他人のいふところで食事をしませんから」

「そうなのか」

普段食べるときは執事が周りで見ついて、パーティーとかもあるだろうから、そういうのには慣れてると思つていたな。

「私は普段、ミキとマキとで食べますし、パーティーでは料理を手に取りませんもの」

「それなら、学園の学食はどうなんだ？ 普通に食べているようこ見えたが？」

最初に会つた時は今みたいには緊張していなかつた。周りの迷惑を顧みず文句を言つっていた気がする。

「学園はもう慣れましたもの。でも、最初の内はあんなところ入るうとは思えませんでしたわ」

そんな会話をしながら、紅葉はハンバーガーを見た。

「これははどうやつていただきますの？ フォークもナイフも見当たりませんけれど…」

「これはな、こつやつて手で持つてそのまま食べるんだ」

紅茶は田を丸くして驚いている。

「手で食べるのには中東のそういう文化のお国だけだと思つていましたわ」

紅葉は庶民の事をまるつきり知らないらしい。まあ、あの学園なら金持ちだけと付き合つてやつてけるしな。

「さあ、食べてみな」

そう言つと紅葉は頷きバンバーガーを正面に構え深呼吸して始めた。

はむつ！

紅葉が小さな口を精一杯開いて食べようとするが、全部入りそろには到底思えない。小さく整つた手でバンバーガーをローズマリーの花弁のような淡い赤色をした口へ持つていく。そんな何気ない動作一つとっても様になつていて。

仕方なく上半分をまず食べることにしたようだ。

「あら？ おいしいですわ！ こんなもの初めていただきました」「気に入つてくれてみたいでよかつたよ」

実は紅葉達に買ったのは最近クラスの女子がおいしいと話していたもので、俺が食べているものより150円ほど高い。

「お前たちは食べないのか？」

まだ、ミキとマキが口をつけていなかつた。

「いや、いただく」

食べた始めた二人は食べ慣れた様子で紅葉のよつと苦労する」ともなく、やはり小さい口で少しづつ食べていく。

「お前らは食べたことがあるのか？」

「私たちの食生活は多分お前のものと変わらないと思つぞ」

いくら池富城の家臣でもそんなにいい生活はしてないんだな。

「同じ家庭の中でも、良家出身でいいものばかり食べている方もいらっしゃるじゃんけどな」

相槌をしながら紅葉を見てみるとハンバーガーが崩れかけていた。

「紅葉、中身が落ちるぞ」

「食べているとどうしても崩れてしまつて」

確かに、紅葉が食べているハンバーガーは崩れやすそうな形をしている。

「ミキ、マキの食べ方を参考にして食べてみるよ。ほら、口の周りにソースがついてるぞ」

紙ナフキンを使い紅葉の口元をふきとつてやる。紙ナフキン越しに触れた紅葉の唇はマシユマロのように柔らかく、それでなおかつ張りがあり俺の指を強く押し返してきた。

「なつ！ 何をするんですか。それくらい自分でできますわ！」

紅葉は顔を真っ赤にしている。ミキ、マキも顔が少し赤くなっている気がする。

「ひいひいた女の子らしい行動をされると、俺もどうしていいか分からなくなつてくる。瑞希が相手だったらこんなことはないだろうが……。」

「悪い、気遣いが足りなかつたな」

「いえ、気にしてませんわ」

紅葉はそう言つてはいるが、顔の紅潮は一向に治らない。

なんか俺まで恥ずかしくなつてきた。

「私はもうこれでいいですわ」

紅葉のハンバーガーを見てみると、半分も減つてなかつた。

「遠慮しなくてもいいんだぞ？ それとも、やつぱり口に合わなかつたか？」

「そんなことはありません。私はいつもこれくらいしかいただきませんから」

女の子ってそれだけで足りるのか？ 俺は一セットだけじゃ足りないくらいだからな。

「マキももういいのか？」じゃあ、ミキ食ひやねよ。」

「私はそんなに食べないぞ！」

「お前はかなり食うだろ？！」

「昼休みも弁当とパンを食べてたからな。ワンセットだけじゃ足りないだろ。」

「私は昼は食べるが、夜はそんなに食べないんだ。太るからな」

「お前は少しくらい多く食べて身長伸ばせよ」

「奏音、ミキは身長は気にしてませんからそういうふうに書つてはいけませんよ」

紅葉が口を紙ナフキンで拭いた後、そつとつぶやいた。てか、紅葉に名前呼ばれたの初めてじゃね？

「いつも残してるのか？」

「三人ともそれしか食べないなら、かなり少ない量で済んでしまうだろう。」

「量は調節してもらいますが、食べられないときは捨てさせていただいてますわ」

「いいもん食つてんだろ？ もつたいないなあ」

最初の食事会の事はあまり覚えていないが、かなりいいものを食べさせてもらつたのか？

「もつたいないのですか？ お金を払つて買つているのですから、食べ残してもいいのではないでしょうが？」

「そんなこと言える奴、なかなかいな」

同じ日本にも生活に苦しんでいる人も今日は多いんだから。

「学園の半分以上の生徒は言つていると思つぞ？」

確かにあの学園は金持が多いからな。

「じゃあ、そろそろ店を出よ。ここで話し込むのも、庶民の若者がよくやることだが紅葉にはまだ早そうだしな」

紅葉は少しこの雰囲気に慣れたみたいだが、まだ緊張が残つているように見える。

かたづけをして店を出ると、店の前には黒塗りの高級車が止まつ

ていた。

「ここまでか……」

最初はどうなる事かと思ったが、以外に楽しむことができた。楽しい時間が終わるのは何度も体験しても慣れることがない。

「お嬢様、お迎えに上がりました」

正装をしてる初老の執事が車の扉を開ける。

「今日は楽しかったですわ、それではまた機会がありましたらお願ひしますわね」

そう言って紅葉が車に乗り込んでいく。最後に紅葉が見せた笑顔は純粋で、どこまでもかわいくて……。俺はこの一瞬の為に今日一日を頑張ってきたのだ、とそう思えた。

「じゃあな」

「今日はありがとな」

ミキとマキも紅葉に続いた。

三人が乗り込むと執事は扉を閉め、俺に一礼すると助席に乗り込んだ。

俺は紅葉達の乗った車が見えなくなるまで見送り、帰宅する」とにした。

「つまつま！」

霸気まとうた掛け声とともに、ミキが俺に向かってボールを投げてきた。日々鍛錬していると自分で言っているだけあって、彼女の投げるボールはそこらの男子が投げるものよりも数段速く、重みがある。

普通ならこうやって俺を一直線に目指してきたボールを受け止めるのが男なのかもしれないが、俺はミキのボールを受け止めるほどの自信がないのでうまくかわすよつこしている。

「ぐはっ」

俺の後ろで頑張つて受け止めようとした男子が、俺の代わりに餌食になつてしまつたらしい。これでもう五人目だらうか……。

さかのぼること十五分。今日の体育の授業は三組と合同かつ男女合同でドッジボールをすることになつた。このメンバーの担当教師は四人なのだが、授業をするのが面倒くさかつたのであらう。一番下つ端である一組女子担当の教師一人に押しつけて自分たちは教官室で話し込んでいる。

それが今回の出来事の真相だ。

「チームは一組対三組でいいな」

一番下つ端と言つても体育教師であることには変わりがない。一々反抗しようなどという生徒は余程の馬鹿でもない限りいない。すんなりとチーム分けが終わり、さっそくゲームを始める事になつた。

相手には当たり前だが紅葉およびミキ、マキがいる。

紅葉はかわすことすら難しい。だから、紅葉を狙つたボールはすべてミキが取り狙つた相手に報復を与えている。

紅葉を狙うとか度胸あるな……。あの会長に知れたらどうなるかわからないというのに。

「だあー！」

「ぐぼつ」

また一人餌食になつたか。男でもミキのボールを取るのは至難の技だ。

それだけのリスクがあつても紅葉を狙いたいという男子が後を絶たないのは、それだけ紅葉に魅力があるということだろうか。

普段紅葉は周りの学生たちを会話すらしないので、男子共はこの機会を使って話すきつかけを作りたいのだろう。「ごめん。痛くなかつた？」とか言つてな！

俺はそんなこと興味がなかつたので、自分のところに来たボールのみをしつかりと避けて、あとはぼーとしていた。

いつの間にか敵味方共に人数が半分以下になつていて、特にこちらのチームは男子が少なくなつていて、嘆かわしい。

「悠木、お前は私のボールを何度もかわすんじゃない！」

声のした方に目を向けてみると、ミキが怒氣を張らせていて、俺は氣付かぬうちにミキのボールを何度もかわしていたらしい。でも、ドッヂボールでボールをかわされたからつて怒るなよ！ そういうゲームだろ？

「喰らえ！」

ミキは今まで力をセーブしていたのか、今までより速い球が俺を襲つてくる。

「喰らえって言われて素直にくらう奴がいるかよ！ いくら速くても、しつかりと見ればかわせないボールじゃない！ がはつ！」

俺の後ろにいた男子が餌食になつてしまつた。

「こいつ」

ミキは俺を当てられなくて、地団駄を踏んでいる。

そんな俺たちを見てミキの後ろで微笑んでいる紅葉とマキ。

「いけー、いけー！」

こいつらもかなり楽しんでるし。

一組の仲間たちまでも悪乗りして、ミキにボールをバスしてやがる！

「悠木なんてやつちまえ！」

これつて俺をいたぶるゲームでしたつけ？

「ぶーつー！」

顔面にミキの渾身のボールを受けた俺はその場に倒れこんだ。女子は顔面なしだといつに、男子はありなので俺は当たつたことになる。

「よしー！」

ミキはガツツポーズをした後、紅葉とミキとハイタッチをしている。

「よくやつた！」

「悠木なんてこれくらいこれなきゃ、割に合わないだろ」「いい気味だぜ」

「つおーい、君たち同じチームだよね？ ひどくない？ 結局、このかなり盛り上がったゲーム（俺にとつては最悪のゲーム）は、俺以外に八人の犠牲者を出して幕を閉じた。

朝学園に行くとクラスの雰囲気がいつもと違っている。何故か皆席を立つて騒いでいるではないか。

「瑞穂、おはよ。この状態はなんだ？」

皆の輪の中に入つていなかつた、瑞穂に挨拶ついでに聞いてみると、「そこそこ。机が一つ増えてたんだって。転校生が来るんじやないかつて皆話してるよ」

「お前はあの輪に入らなくてよかつたのか？」

いつも瑞穂と仲良くしている娘も輪の中に入つてゐるため、瑞穂は一人になつてゐるのだ。輪の中に入つて話してくれればいいと思つが。

「穂乃香ちゃんの宿題がまだ終わつてないから」

そう言つて恋愛小説を俺に見せてくる。また穂乃香ちゃんに薦められたな。彼女はいろいろな人に本を薦めているらしい。

「今日中に読んで返そつと思つてるから」

ハードカバーのその本はまだ半分くらいあるよつだ。瑞希つてそんなに本読むの速かつたか？

「まあ、頑張つてくれ」

それ以上続ける会話内容もなかつたし、瑞希も田を本に戾したので俺は席に着いた。

「奏音、転校生だつてよー」

「そつらじしこな」

今度は周が輪の中から飛び出して俺のところに来た。

「なんだよ、そつけないぞ！ あ～、そうか。嫁さんが決まっている奏音君には、興味のない話だったね」

嫌味つたらしいな！

「お前は穂乃香ちゃんがいるだろ！ それに女子だつて決まつたわけじゃないんじやないのか？」

「絶対に女子だね！ それも絶品の！」

「どうしてそんなことわかるんだよ？」

職員室に見に行つた奴でもいたのか？

「見た奴はいないが、俺のアンテナは美少女のオーラを感じた！」

周はワックスでツンツンにしている髪の毛を指差している。

「へー、それつて触手だつたんだな」

「ちげーし！ 触手じやねえーし！」

まあ、冗談は置いておいて。

「あつちの女子は男子だつて言つてるみたいだが？」

「ちよ、おまつ！ 親友の言ひ方」とじやなくて、あいつの言ひ方とを信じるのかよ…

「別にどつちも信憑性はないんだる？ それに親友とか言つなよ、虫唾が走る」

腕をさするジェスチャーをすると、周が泣きそうになつてこる。

「俺のハートは今、ズタズタになつたぞ！ どうしてくれるんだー…」

「はいはい。すみませんでしたね」

「こいつはこいつなると面倒だからな、放つておくのが一番。

「彼女ができると、友達付き合いが悪くなると言つが本当なんだな

……」

周は遠い目をしながら自分の席に帰つていった。

することもなくなつたので、席についてぼーっとクラスを眺めている。ほとんどの奴らはまだ転校生の事で騒いでいるが、さつきよりは減つたようだ。

まあ周がさつきの女子と転校生の性別について言つてゐるのを、

周りの奴らが騒ぎ立てていいだけみたいだが。

今度は瑞希を見てみると、さつきの恋愛小説を集中して読んでいる。瑞希はポニー・テールの活発な女子という見た目なので、本を読むのは意外なのかもしれない。前にあいつの部屋に行つたときに恋愛小説だけで本棚三つ使つているのを見たが、そんな瑞希の部屋は誰にも想像できないだろう。

瑞希自身は、穂乃香ちゃんに比べたらまだまだよ！ とか言つていた。そんなこと言つたら、穂乃香ちゃんの部屋は本だけでいっぱいにならないだろうか？ 甚だ疑問である。

今度、周にでも聞いてみるか。

もうHRの時間になつた。しかし教師はまだ来ない。転校生がいると何かとやることが多いのだろう。さつきからずつと瑞希を見ていたのだが（別に好きだから見ていたわけではございません、だけは言つておきたい）、かなり面白かつた。瑞希は気付いていないが、面白い場面になると頬笑み、悲しい場面になると目じりをハンカチで拭ぐ。瑞希を見ているだけで、今どんな場面かが理解できるのだ。

でも見ていて思つたが、そんなに場面の変化が激しい本なのか？ 数十ページで面白い場面と悲しい場面を一回は行き来していだぞ？

なんだかんだで、待つこと十分。やつと教師Aがやつてきた。

「おい、席着けよ！ 欠席にするぞ！」

えつと、だんだんレベル上がつてませんか？

「ここの雰囲気だとお前らも知つてていると思つが、今日転校生が来た

「いえーい！」

「美少女！ 美少女！」

「イケメン！ イケメン！」

クラスが異様な雰囲気を醸し出している。

「てめーら黙れや！」

ドスのきいた声で、生徒を黙らす教師A（女）。クラスは一瞬で呼吸音一つしなくなつた。

「はい、転校生君入つてきなさい！」

ガラガラつと音がした後入ってきたのは男だつた。
あいつ、どこかで見たぞ？

「やつたー！ イケメンよ！」

勝負は女子の勝利になつたよつた。周はもう興味がなくなつたと見えて寝始めた。

「今回転校してきた、河原林玲央かわはらばやしれおだ。以後よろしく」

「河原林つていうと、池富城、花山院と並ながぶ財閥の？」

「そうだな。私は河原林の時期会長だ！」

なんというか、気の早い奴。

「つてことは、この学園には一つの財閥の御曹司と御令嬢がいることになるの？」

「……？ そうだな、この先どうなるかはわからないが。さて教師よ、私はどこに座ればいいのかね？」

教師Aに対しても大きな顔をするが、彼女は何も言わない。権力の犬め！

「後ろの席が空いているから座りなさい

「わかった」

玲央は席に向かつて歩き出しだが、俺の席の前で止まつた。

「君はこの前の。このクラスだつたのだな」

「どこかで、会つたか？」

確かにあつた気がするがどこだつたかな？

「このクラスはこの学園で一番頭がいいクラスと聞いたが、君がいるなら大したことなかつたみたいだね」

「知り合いだつけ？ んー、人違いじゃないかい？」

こんな印象に残る奴覚えてないはずがないだろう。

「お前は悠木奏音だろう。私を忘れたと言うのか？ あんなにも邪魔をしてやつたのに！」

邪魔？ 邪魔なんかされたか？ されたなら余程小さい邪魔だつたんだな。

「土曜日にスーパーで邪魔をしてやつたじやないか！」

「あーあーあー、あの時の。そういえば、おばちゃんに大人気の野郎がいたな」

「やつと思い出したか！ 私は紅葉さんがいるからこの学園に転校してきたのだ。お前は紅葉さんとお付き合いをしているらしいな？ 立場をわきまえないか！ 私が彼女を幸せにするのだから！」

「はいはい、もう勝手にして。

放課後になつた。今日一日玲央に付きまとわれた俺はもうクタクタだ。

奴ときたら休み時間になると俺のところにやつてきてしまは、自分の自慢をずつとしている。その上、トイレにまでついてきやがつた。

「お前は何がしたいんだよ！」

「私の目的はお前を紅葉さんと別れさせることだ。だから、お前に私の素晴らしさを教えて敵わないと思わせることで別れさせようとしてるのではないか！」

別にお前の素晴らしさとか知りたくないし。

「お前は誰に俺と紅葉が付き合つてていると聞いたんだよ？」

「誰つて？ 池宮城の会長に聞いたんだ。あの人は俺がせつかく婚姻を申し込んでやつたのに、紅葉さんには付き合つてている人がいるから無理だとか言いなさる。自分の立場をわかつてないんじゃないか？」

やつぱり会長かよ！ ってか、こいつはなんで会長を下に見てるんだ？

「立場つてどういうことだよ？」

「あまり公表してはいけないことだけだ、今池宮城は傾いているのだ。私の力を貸してやる代わりに紅葉さんをくれと言つているのに断る？ どうしたらそんな考えができるんだろうな

あれだけの規模の池宮城が傾いている？ それが本当だったら、この国は大変ことになるぞ！ 少なくとも数十万人規模で仕事を失う人が出てくるだろ？

「私が池宮城を吸収して世界最大の財閥を作り上げるのだよ！ できた暁には、お前を雇つてやらないこともないぞ？」

「別に雇つてほしくないし」

「なんでこいつの下で働くねばならんのだ！」

「後から後悔しても遅いからな！ それで？ 紅葉さんを私に渡してくれる気になつたか？」

「本人に聞いてみる。それでいいって言われたならいいんじゃないか？」

俺ら付き合つてないしな。

「そうかそうか。紅葉さんが私を認めないわけがない！ これで池宮城も私のものだな！」

一緒にいて恥ずかしいほど大声で笑い始める玲央。こんな奴に付き合つ理由もないし、さっさと帰ろう。

鞄を持つて何も言わずに教室を出ようとすると、玲央が俺の前に回り込んで静止を求めてきた。

「待て待て。私の話はまだ終わつてないぞ！」

「こいつ、まだ続けるつもりかよ！」

「お前のすごさはわかつたから、もう帰つていー？」

「だめだ！ 今から私の仕事での功績を教えてやる。心して聞け！」

「聞きたくねえーし！」

「あつ！」

タイミングの悪いことに紅葉達が教室から出てきたところに鉢合わせした。

「これはこれは、紅葉さん。今日もいつもながらお綺麗で！」

「ありがとうございます。奏音、この方はお友達ですか？」

「違う。付きまとわれてるだけだ！」

「紅葉さん、私ですよ！ 以前に何度もお会いしましたよ」

玲央はそう言うが、紅葉は首をかしげる。紅葉が首をかしげたときに髪がサラサラと流れ、フローラルなスズランの香りが漂つてきた。

「紅葉のような金持ちになれば、香水とかシャンプーとかはすぐいいもの使つてるんだろうな。」

「」の方は河原林の御曹司ですよ

「どうしても思い出せない紅葉に、耳打ちして教えるマキ。結構金持ちは会う機会があるんじやないのか？覚えておけよ！」

「河原林様は、別の学園に通われていたのではありませんでした事？」

さつきまでとは違い、少し緊張した様子で玲央に言つた。

「紅葉さんに会いたくなりましてね、私は転校してきたのですよ。そうそう。貴方のお父様からお聞きしたのですが、紅葉さんはこいつと付き合つているのですか？」

「」といつと言つたところで俺を指差す。

「私と奏音が？ そうなのですか、奏音？」

紅葉の頭の上に？が何個も浮かんでいる。

「俺に聞くなよ！」

「もしかして二人は付き合つていないのでですか？ なら、話は早い。」

紅葉さんは今日から私の婚約者です」

「えつ！ なぜ私が貴方の婚約者にならなければなりませんの？」

紅葉の当たり前の疑問を玲央は理解できないようだ。

「私が紅葉さんと結婚したいからですよ」

「紅葉はどうしたいんだ？」

困り果てて、俺の方を見てきた紅葉の気持ちを聞いてみる。

「私はまだ学生ですし、貴方の事もよく知りません。急に婚約者と言われても……」

「私なら貴方を幸せにできますよ」

ミキ、マキは俺に目で合図を送つてくる。助け船を出せといつことだらうか？ 仕方ない、今回くらいは助けてやらんとな。

「俺は紅葉と付き合っていないことは言つてないぞ！　今は俺がいるんだからそういうこと言つのはやめてくれないか？」

付き合つているとも言つてないが……。

「何を今さら！　君たちが付き合つているようにはとても見えないぞ！」

何をもつて付き合つてゐるよつに見えないと言つてゐるのかわからぬが、当たつてゐるのは紅葉の事が好きだからできる技だらうか？

「じゃあ、どうしたら信用してくれるんだよ？」

「そうだな……、ではデート風景でも見せてもおつりじゃないか」

そんな理由で俺は紅葉との一度目のデートをすることになつた。さて、今回はどうしようか？　紅葉が喜ばないよつなところに行つたら、紅葉の事がわかつていなつて玲央に言われてしまつかもしれない。

「紅葉は行きたいところはあるか？」

「いいえ、特にありませんわ。秦音に任せます」

「はい、来た！」一番困る返し！　俺に紅葉が喜ぶことなんてわからぬぞ！

「早く行き先を決めないか！　紅葉さんを待たせるんじゃない！」

「こいつはうざいなあ。ん、よし。決めた！」

「じゃあ、買い物に行かないか？　最近何か欲しいものはない？」

「そうですね」

「お嬢様が欲しいものがあれば、すぐに用意しますから買い物に行く必要なんてありませんよ」

紅葉ほどのお嬢様になると、買い物すら自分でしたことがないのか。

「じゃあ、洋服を見に行かないか？　紅葉がどうこう服が好きなんか興味あるし」

「でも私、あまり買い物したことがありませんのでよくわかりません」

んわ

「気にしなくていいってー、とりあえず、じつにいい店があるから行こ」

俺は歩き出そうとして、ふと思つた。俺が紅葉の彼氏なら紅葉の手を握つて歩いたほうがいいのだろうか？

紅葉の方を見てみると歩き出さない俺を不思議そうに見てきた。

「どうしましたの？」

「手を繋いごうか……」

言つていて恥ずかしくなってきた。紅葉も恥ずかしかつたのだろう。うつむき無言でうなずくと手を差し出してきた。

紅葉の手は赤ちゃんの肌のように柔らかく、ずっと握つていて思つてしまつ。

しかし、紅葉の手を握つたのは失敗だと気付いた。手を繋いでいるということはそれだけ距離が近くなることを意味する。紅葉の髪からはスズランのいい香りはするし、美術館に飾られていてもおかしくないであろう石造のように整つた美しい顔は近くにあるし、その上紅葉の呼吸音まで聞こえてくる。

俺の速くなつた鼓動が手を握つていることで紅葉にばれていないか、顔が赤くなつているかばれていなかが心配で仕方がなかつた。紅葉を連れて行つたブティックは、前に瑞穂と穂乃香ちゃんに連れてかれた店だ。ここら辺では一番お洒落で若者に人気がある店らしい。

俺たち一人のすぐ後ろにミキ、マキが、その後方三メートルに玲央がいる。玲央は何も言わずに俺たちをずっと見てくる。すごく気になるんですけど！

店に入るとそこには色とりどりのかわいい洋服が並んでいる。

「紅葉は普段どういつた服を着ているんだ？」

「私の普段の洋服ですか？ お屋敷ではだいたいワンピース、パーティならドレスです」

何というかイメージ通りだな。紅葉のドレス姿はかなり様になつ

ているだろう。一度お目にかかりたいものだ。

「ならワンピースを見てみよう。紅葉が着ているのはやつぱりレースがたくさん付いたようなやつなのか？」

「いいえ、そういうものはパーティのドレスで着ますので、普段のワンピースはシンプルなものですね」

紅葉の話を聞きながらワンピースを眺めていると、紅葉に似合いそうな薄いオレンジ色の落ち着いたワンピースが目に付いた。

「これなんて、似合つんじゃないか？」

「私にこのよだな大人らしい洋服が似合いますか？」

紅葉は少しこの服を着ることに自信がないらしい。紅葉ならどんな服を着ても似合つと思うのだけれどな。

「とりあえず試着してこいよ」

俺がそう薦めると紅葉はミキ、マキを連れて着替えに行つた。

「これで納得したか？」

後ろで腕を組んでいる玲央に話しかけてみる。

「確かに恋人らしかつたが、お前紅葉さんの事をあまり知らなそうだな？ 本当に恋人なのか？」

紅葉と初めて会つてからまだ一週間もたつてないんだから仕方がないだろ！

「まだ、付き合い始めて間もないからな。これからいろいろ知つていくんだよ！」

友達としてだけどな！

「なに！ では私がもう少し早くこちらの学園に来ていれば、紅葉さんはすぐに私のものになつたのか！」

「そうかもしけないな」

お前みたいのとは付き合いたいとは思わないだろ！けどな。

そんな事を話しているうちにミキが呼びに来た。紅葉が着替え終わつたらしい。

試着室から先ほどの服を着た紅葉が出てきた瞬間、周りの空気が変わった気がした。紅葉がそこにいるだけで周りの空気が澄んでい

くような錯覚を覚えたのだ。紅葉の透き通つた白い肌とワンピースの淡いオレンジ色の組み合わせがとても美しかつた。確かにこの服は紅葉に似合つだらうと思つて薦めたが、ここまで似合つとは思つてもいなくて、紅葉を見た瞬間言葉を失つてしまつた。隣にいた玲央も同じのようだ。

「似合つておりませんか？」

何も言わない俺たちを見て不安に思つたのだらう。紅葉が心配そうな顔をして尋ねてきた。

「いや、とつても似合つてゐよ。あまりに似合つすぎてゐから言葉を失つてしまつたんだ」

「そんな！」「冗談は止してください」

別に冗談で言つたつもりは全くないのだけれど……。

「紅葉はその服は気に入つたか？」

「はい。すごく感じのいい服で気に行つたのですけれど、私には似合わないのではないかと……」

「そんなことはない。とつても良く似合つてゐる」

なんか、本当の恋人みたいだな。

「そうですか……」

俺たちはミキ、マキに促されさつきにたとこひに戻つてきた。その間も玲央は何も話さない。

「おい、玲央！　どうしたんだ！」

「私の事を呼び捨てにするな！」

やつと反応があつたか。

「どうしたんだ？」

「紅葉さんが美しすぎて我を失つていたよ」

確かに美しかつたがそこまでとは、おぼっちゃまは耐性がないのかな？

そこに紅葉がワンピースから制服に着替えて戻つてきた。

「そのワンピースは買つのか？」

「はい、奏音に褒めていたので購入したいと思つています」

そのときミキ、マキ、玲央の三人からの視線を感じた。俺に買つてか！ そんな金ねえよと言いたいところだがここで玲央に指摘されたら今までやつてきたのが水の泡になつてしまつ。ここはやむを得ないか……。

「俺がプレゼントするよ」

「いいのですか？」

確か財布の中に隠し財産の諭吉さんがあつたはず！ えつと、いくらだ？ なつ！ 一万四千円だと！ あつたかな……。

財布の中を確認すると小銭を合わせれば足りそうだった。結局財布の中に残つたのは二十二円。足りたのが奇跡だった。玲ジのお姉さんには苦笑されたが。

「ありがとうございます、大切にしますわ」

「どういたしまして。さて、玲央。これで満足したか？」

「呼び捨てにするなど言つているだろう！ 紅葉さんとお前が恋人だと認めざるおえないな。でも、私はまだ諦めないぞ！ いつか紅葉さんをこの手に！」

じつじつと玲央は何時からあつたのかわからないが、黒塗りの高级車に乗つて消えていった。

今日の午前中は何事もなく終わつた。まあ、相変わらず玲央はうざかつたが……。

昼休みになると、ミキ、マキに呼び出された。

「なんなんだよ、まだ飯食つてないんだぞ！ それに紅葉を置いてきていいのかよ！」

「お嬢様の事は問題ない。信頼できる方に頼んできたからな。それよりもそんなに腹が減つてているのか？ 一応弁当をお前の用意したんだが、これでは足りないかもしけんな」

そう言つてミキが出してきた重箱のような弁当箱。すみません、足ります。いえ、多すぎです。

「どうしたらこのサイズの弁当を一人で食べられるんだよー。」

「男子はたくさん食べるんだろ？ 料理長に頼んだら」ねぐらいな
いと足らないって言うから」

「ちなみにその料理長さんは男性？」

「女性だ」

「男もそんなに食べないって教えてあげて！
本題に入つていいか？」

「マキはが少しひらだつてこるように感じた。

「早く入つてくれ。そして早く帰してくれ」

「そんなに早く帰りたいならこの弁当はいらないな？」

ミキが残酷に言い放つ。

「欲しいです。弁当欲しいです。何時まででもいいにりますから！」

「じゃあ、一生いろ！ それで本題なんだが、玲央はどうしてる？」

ミキとマキは自分たちの弁当を開いた。

「玲央？ 玲央がどうしたんだ？ 奴は昨日とかわらんが？」

昼休み入つてすぐに俺のところに来るものだから、奴を巻くのが
大変だった。

「昨日の捨て台詞が気になつてな。何かやつてくれるんじゃないかと
……」

「特に何も考えてないんじゃないか？ そんな素振りはなかつたぞ
？」

「それにどんな方法があるつて言つんだ？ 親にでも頼むのか？」

「何時どんなことをしてくるかわからないからな。旦那様も言つて
いたぞ、河原林は花山院とは違い注意してもし足りないと」

「そうだ、今までどれだけ池宮城の傘下の会社を狙われたことか…

…」

あの滅茶苦茶の会長にそう言わせるのだから、河原林は相当なも
のなのだろう。

「何かやつてくるとしても、じつじつと言つんだ？」

「奴がやつてくることなんて検討もつかない。

「とりあえず、奴が何か不自然な行動をしたらすぐに我々に知らせ

てくれ！」

「何かができるわけではないが知っているだけで違うかもしれないからな」

「この真剣な雰囲気の中では心配しそうだとは言えなかつた。でも、奴も紅葉の気持ちを無視してまではやらないんじやないか？」

玲央が本当に紅葉の事が好きなら紅葉の気持ちは無視できないだろう。

「奴の言動からお嬢様の事を思つてているようだを感じたか？」

「……まあ、何も起きないわ」

そんなはずはない。

「そんな話はやめて飯にしようぜ。何が入つてんのかなつて！」

弁当の中を見て驚かずにはいられなかつた。ミキ達の弁当の中身は普通だつたので、この重箱弁当も中身は普通だと思つていたのだ。しかし、中から出でてきたのはデパートのおせち料理よりも豪華な料理の数々！ 金粉とか振つてあるし！

「どうしたんだよ、この弁当！」

「だから、料理長がこれくらいの量が必要だつて言つから」

「そうじやねえ。何なんだよ、この料理は！」

「こんな質素じや嫌だつたのか？ 屋敷の料理を食べたことあるからつてそんなに口は肥えないだろ」

そういう意味でもない。こいつらはわざとやつてるんだろうか？

「なんでこんなに豪華なんだよ！ お前らの弁当と違いすぎだろ！」

「料理長がお嬢様の彼氏ならこいつたものに慣れておかないといけないからつて言つて作つてくれたんだ。感謝しきをされても、キレられる理由なんてないと思つぞ？」

彼氏じゃないつてお前ら知つてるだろ！ 弁当の量と一緒に料理長に教えるよ！

「俺が言いたいのはなんでお前らとそんなに違つのかつてことだよ」

「それは私たちはただの使用人で、お前はお嬢様の彼氏だからだろ

？」

「一人して何当たり前の事を聞くんだという顔をしている。

「わかったよ。じゃあ、この弁当缶で食べないか？俺一人じゃ食べれないからさー。」

ミキ、マキは顔を真っ赤にして俺が望むならと口を出してくれた。なんで顔を赤らめるんだよと思ったがその理由はすぐに明らかになる。

ミキ、マキが俺の弁当のおかずを取つて一人して俺に向かって突き出してくるではないか！

「お前ら何がしたいんだよー。」

そう聞きながらもやろうとしていることなどわかっている。

「男と女、それに弁当ときたらやることは決まっているだろ？？こっちも恥ずかしいんだ。早く食べてくれないか？それとも言わないどだめなのか？」

「だめとかそういうことじゃなくて、根本的に間違ってるだろ！俺たちそういう関係じゃないよね！」

「あーん」

周囲の視線が刺さる。女の子二人に何をさせたんだといった感じだろう。別に俺が望んだ事じゃないよね？

両側から箸を突き出され、俺に逃げ場はない。俺は諦めて口を開けようと、一つの異なるおかずが同時に放り込まれた。味が混ざつてよくわからないんですけど！

「おいしいか？」

「おいしかったよ」

俺がそう言つとミキ達は愁眉を開く。でも、この料理つて料理長が作つたんだよね？お前らが気にしなくとも……。

俺はそんな恥ずかしい昼食をなんとか食べきつた。あの重箱弁当を食べきれたことに自分でも驚いている。

「ふう、何とか食べきつたな。おいしかつたって調理長に伝えてくれ！」

「わかった。それでは玲央のことは頼んだぞ！」

昼休みに玲央のことをミキ達に頼まれたが、特に気にする必要がなかつたらしい。俺が教室に戻るとすぐに寄つてきて、いつもながら自慢話を始めた。

よくもまあそんなに自慢することがあるなー

奴の自慢話を聞かなくてもいい授業中がこんなにも嬉しく感じたのは、生まれて初めてであろう。

「奏音君、最近大変そうだね。噂を聞くよ」

何の前触れもなく、現れたのは穂乃香ちゃんだった。栗色をしたショートカットの髪は紅葉の様に見惚れるほどではないにしろ、すごく似合つていてかわいいという印象を受ける。周にあれだけのアタックをしていなければ、告白を受ける機会も多いだろう。本人がいいのなら何も言つことはないんだけどな。

「周のところに行かずに、俺のところに来るなんて珍しいな」
穂乃香ちゃんは俺らのクラスに来たら、ずっと周にべつたりしている。結構よくやつてくるので、周と穂乃香ちゃんの仲は知れ渡っている。

「今日はちょっと、奏音君に用事があるの。明日つて開いてる？一緒に遊びに行かない？」

「なんで俺なんだ？ 穂乃香ちゃんには周がいるだろう。あいつもあれで穂乃香ちゃんの事を気にしてるんだから、他の男と遊びに行つたりしたら泣くぞ？」

泣くまではいかないかもしねないが……。

「いいの！ 今は周君の事は置いておいても、周君との時間はいつもしつかりと取つてるから」

しつこすぎるくらいに付きまとつてるからな！

「ん？ 奏音、どうしたんだ？ 穂乃香も來たのか」
教室に入ってきた周が俺たちのところにやってきた。

「それがな、穂乃香ちゃんが明日遊びに行かないかつて俺を誘うん

だよ。俺は周と行けって言つてるんだけど……」

「別に穂乃香が奏音と行きたいなら行ってくればいいだろ？。別に俺の事を心配する必要はない！」

そう言つて教室の前の方を見た周の顔には動搖の色が見えた。平然と振る舞ついても、動搖していることがばれただぞ。

「ごめんね。今度絶対に埋め合わせはするから！」

「別に気にしてないし……」

気にしてる様にしか見えませんけど！

「じゃあ、明日の午前十時に駅前の噴水のところに集合ね！」

また、あの噴水ですか？ いくらこの街の一番の待ち合せスポットだからって、週一で待ち合せするのはどうよ？

「あそこは嫌なの？ それなら、家にまで迎えに行つてもいいけど？」

「すみません。それは勘弁してください」

「じゃあ、噴水に集合ね！」

穂乃香は周に一度抱きついてからクラスを出て行った。見てるこっちが恥ずかしくなるからそう言つのは公衆の場でやらないで！

周も恥ずかしかったみたいで真っ赤な顔をしている。周りの男子は目を真っ赤にして周を睨みつけていた……。

俺は今、駅前の噴水のところに来ている。時間は八時半。集合時間まではあと一時間半ある。前の待ち合せのとき、マキに男は早く行くのもだつて言われたからな。穂乃香ちゃんはまだ来るはずはないが、待つてているのは悪いことではないだろ？

そして当たり前のように十一時半。集合時間を一時間過ぎた。なぜ、俺は待ちぼうけをいつも喰らうのだろうか？

ブルルル！

携帯が鳴り始めた、相手は穂乃香ちゃんだ。用事ができて来れな

いとかそういう、た内容だろ？

「もしもし？」

「もしもし。奏音君、何やつてるの？」

「穂乃香ちゃんを待つてゐに決まつてゐだろ？！」

「自分から呼び出しておいて待つてゐるのに、何やつてるのではないだろ？」

「奏音君、待つてゐのはいいんだけど、もう少し周りに気を配つたら？」

「何の事を言つてゐるんだ？ とりあえず来ててくれないかな？」

「だ～か～ら～、奏音君は後ろを見てよ！」

「後ろ？ 後ろに何があるつて言つんだ？」

「振り返つてみるとそこには噴水が……、つて当たり前だろ？！ 噴水の前で待ち合わせなんだから！」

「後ろには噴水しかないぞ！」

「そうじゃなくて、噴水の向こいつを見てよ！」

「噴水の向こいつだと？ 何があるつていうんだよ！」

仕方なく言われた通り見てみると、そこには心細そつて駅の時計を見ている一人の少女がいた。ポニーテールの彼女は化粧によつて大人らしく見え、長いまつ毛が心細そつとしている顔をより一層寂しそうに感じさせてならなかつた。

「はあ」

彼女はグロスの塗られた潤いのある柔らかそうな唇を開きため息をした。彼女のはいた息はグレーの空に昇つていぐ……。

「あれは……」

「気付いた？ ずっと待つてたんだからね！ 謝つてね！」

「そう言つと、穂乃香ちゃんは電話を突然切る。はあー、そういうことかよ！」

「待たせたな、瑞希」

瑞希は俺の顔を見るとさつきまでの一人寂しそうな表情を一変させ、ぱつと花が咲いたように笑顔を見せてくれた。

「穂乃香ちゃんからビームまで聞いてるんだ？」

穂乃香ちゃんの事だ、何も知らずに呼んだに違いない。

「今日、奏音ちゃんがここに来るから一緒に楽しんで来てって言わ
れて……」

俺が思つたより情報を渡されているようだ。つむじま、これは
瑞希からしたら完全に俺の遅刻になるのでは？

「今日は俺が遅刻しちまつたからな、どこか行きたいところはある
か？ 瑞希の行きたいところだったらどこにでも連れていやらる
！」

「行きたいところ？ ん~、急に言われても……」

瑞希は何か意見を絞りだそうとしているのだらう。真っ白い空に
目を向けながら片手を頬に当てながら考えている。

「ん？ そういえば、瑞希の誕生日はもうすぐじゃなかつたか？

「瑞希、誕生日って来週じゃなかつたっけ？」

「えっ！ そうだけど、覚えてたんだ……」

「何年もおめでとうすら言わなかつたからな、そう思われてい
ても仕方がない。俺だって何かしてやりたいとは思わなかつたこと
もなかつたんだぞ？」

「よし！ じゃあ、ちょっと早いが瑞希の誕生日プレゼントを買
に行こー！」

「ええー！ そんないいよ！ 悪いよ！」

「気にするなよ。それで何か欲しいものはあるか？」

瑞希はあわて驚き、真剣に考えだしたがなかなか欲しいものが見
当たらないらしい。

「そんな無理に欲しいものを見つけなくともいいけどな」

「……奏音ちゃん……」

「ん？」

小さな声で呼ばれた。

「奏音ちゃんが……」

俺が何なんだ？

「……奏音ちゃんと遊びに行く時間が欲しい……な

「なんだ、そんなことでいいのか？ ジャあ今日は思いつたり遊びま

うー」

「うんー」

少し雲の残る青空の下、俺はかなり久しぶりに瑞希と遊び」とことなつた。

遊ぶと言つても俺たちはもう高校二年生。昔みたいに公園で遊ぶわけにはいかない。とりあえずウインンドウショッピングでもしよう。どこに行こうか？ どうせ瑞希に振つても意見なんて帰つてこないだろうし、勝手に決めてしまおう！ と言つことで、俺はまず昼飯に行くことにした。

「そろそろ腹の減る時間だらう？ 何か食べたいものはあるか？」

「えーと、そ、うだなー」

今日の瑞希はどこか変だ。いつもは俺と一緒にいるときはこんなに優柔不斷じやないのに……。見た目だつて化粧はしてるし、着飾つているし。いつもの活発な雰囲気の瑞希とは全然違つていて。何と言えばいいのだろう、何かいつもより女の子らしく瑞希がそこにいる。

瑞希がこんなんじやあ、俺もどうせつけて接していいかわからなくなつてしまつ。

「特に無いのか？ それなら俺が決めるぞ？」

「じゃあ、お願ひしようかな」

お願いされてしまつた。さて、どうしよう。ここで選択を誤ると、この先がきつくなつてしまつ。今日は始まつたばかりだし、冷静な判断が必要だ。

「じゃあ、あそこのオープンカフェに行こう」

あそこはいいみたいだし、無難なところだらう。と考えて行つたのだが、それは間違いだつたみたいだ……。何故か自分たちの座つた席の周りはカップルばかりだった。瑞希は相変わらず口数

が少ないし、どこを見たらいいかわからないし、かなり気まずい。周りから見たら俺たちもカツプルに見えてしまっているのだろうか？

「奏音ちゃん、何を注文するの？」

「お？ 瑞希から話しかけてきた、と思つたらそこにはウエーテン

スが立つていた。いやいや、言つたのは瑞希だけだね。

「瑞希は何にするか決めたのか？」

「うん、私はこれにしようと思つて」

指差したのはサンドウイッチ。じゃあ、俺も軽めのを頼まないといけないな。

しかし、メニューを見ていて面白いのが目に付いた。

『チョコレートチャーハン』

いろいろ突っ込みたいことはあるが、なぜオープンカフェにチャーハン？ チョコレートを入れたからいいのだろうか？ 需要はあるのだろうか？ やばい、チョコレートチャーハンの事しか考えられないなってきたぞ！

「じゃあ、チョコレートチャーハンで！」

言つてしまつた。ウエーテンレスだつて本当に？ 聞き間違えじゃない？ つて顔をしている。おい、そつちが出しているメニューだろ！ そんなに驚くなよ！

ウエーテンレスは三回確認した後、やつと離れて行つた。

「奏音ちゃんつて昔からそういうよくわからないもの食べるよね？」
「なんか興味が湧くじゃないか。今食べないと一生食べれないかもしねないしなー。」

そして持つてこられたチョコレートチャーハンを見て俺は驚愕した。チョコレートチャーハン、それは普通のチャーハンの上にドロドロのチョコレートがあんかけの様にかかっている。

これを俺に食べると？ 見ただけで心が折れてしまつた……。瑞希も乾いた笑いをしている。

恐る恐る一口食べてみる。塩コショウの聞いたチャーハンに、甘つたるいチョコレートが絶妙で……、そんなわけはなかつた。チャ

一ハンの塩気がチョコレートの甘さを強調していくかなりくびこーー。
食べ物で遊んだとしか思えないぞーー。

「瑞希、一口食べてみないか？」

「丁重にお断りさせていただきます」

「どうしよう、瑞希も食いたくないと言つてゐし、でも残すのはいけないと思つじ。とりあえず飲み物で流しこもつとしてみるが、ドロドロのチョコレートがなかなかそれを許してはくれない。

半分くらい食べ終わった時点で、瑞希はサンドウイッチを食べきつていた。もう、食べたくない。俺は残つていた水を一気に飲み干して、瑞希に行くぞと告げた。

伝票はもちろん俺が取り、レジに向かつた。最近出費が激しくてあんまり出したくないんだけど、ここは仕方ない。俺は貯めていたお年玉を切り崩し、会計を済ませた。

「いくらだつたの？ 自分の分は出すよ？」

瑞希はそう言つてくるがここは払わせるわけにはいかない！

「いいよ、気にするな。それよりも今からどうしようか？」

聞いて気付いた。これは今日の瑞希には聞いては行けなかつたこと。なぜ、俺はそれがわかつていて何度も聞いてしまうのだらう？

「とりあえず、歩きながら決めようよ」

瑞希から意見が帰つてきた。これはきっとチョコレートチャーハンの力だな。あれは無駄じゃなかつたんだ！

俺たちは瑞希の提案通り、とりあえず街を歩いて見ることにした。これは俺が最初に考えていたウインドウショッピングと同じなのでは？ 困つた時のウインドウショッピングか……。

いつも歩いている街なのに、いつも歩いて歩くとともに新鮮に感じる。ショーケースに映る、雲ひとつない青空の下にいる俺たちは楽しそうに笑つてゐる。普段は目にもとまらなかつたお店の中に、少し古ぼけたアクセサリーショップがあつた。

「ここの店知つてるか？」

「知らない、こんなお店あつたんだ」

よく街に出て友達と遊んでいる瑞希が知らないのだ。最近できたのか、それとも異次元に迷い込んでしまったのか……。

「入つてみようぜ」

入つて見ると薄暗い店内には所狭しとアクセサリーが飾つてある。俺たち以外のお客さんはいなく、腰の曲がったおばあさんがレジに座っていた。おばあさんはいらっしゃいも言わずにずっと俺たちの方を見ている。

店の雰囲気はあまりいいとは思えないが、アクセサリーはかなりいいのが揃っていると感じた。瑞希もこの雰囲気など気にも留めず、いろいろと手に取っている。

「奏音ちゃん、これなんてどうかな？」

瑞希は銀色の落ち着いた感じのイヤリングを耳に当てている。今日の瑞希にはぴったりだと思う。

「いいんじゃないか？ 似合つと思つた」

「そう？ ジャあ、買おうかな」

瑞希は何かを探し始めた。

「どうしたんだ？」

「えっと、値札が見当たらなくて……」

そう言われてみれば、この店の商品には値札が全くない。

「これいくらですか？」

瑞希がレジにこるおばあさんのところまで行つて、聞いた。

「一万一千円だよ」

ぎりぎり聞こえるくらいの小さな声でそう言った。

「一万一千かあ、ちょっと高いけど欲しいな」

いや、高すぎではありませんか？ ほつたぐりだろー。

「あつ、今一万円しかないや。買えないな」

「俺が出そうか？」

「ご飯も払つてもらつたしでござりえないよ

確かに俺の財布は悲鳴を上げてこる。

「じゃあ、値切らう。このイヤリング一万円になりませんか？」

「ならん…」

さつあはあんなに迷々言っていたの」「今せつあつと迷つてきた。

「うん、今度来るからこゝよ」

瑞希はそう言つたが、かなり名残惜しそうに店を出るまでイヤリングを見ていた……。

オレンジ色の空に辺り一面が包まれた。

「今日は一日ありがと」

「そんな、お礼を言われるような」とは何もしてないぞ?」

「今日は久しぶりに奏音ちゃんといられて嬉しかったから幸せそうな瑞希の笑顔を見て、俺まで幸せな気分になつてきた。

「そうそう、忘れてた。」これ誕生日プレゼントな

「これは?」

「開けてみな」

小さな包みを俺から受け取り、そつと開いた。

「あつ、さつきのイヤリングだ! こつ買つたの?」

「瑞希が他の見てる間にこつそりとな」

「でも、これ一万一千円もしたんだよ? もらえないよ」

包みなおし、返そうとしてくる。

「いいんだよ、それに返してもらつてもどうしようもない」

「ホントにいいの?」

「今までの数年分の誕生日プレゼントだと思つてもうつてくれ

「わかつた。ありがとう!」

瑞希は金色の空の下で今日一番の笑顔を見せてくれた。

私は集合時間より一時間前に駅前の噴水が一望できる喫茶店に来ている。しかし、私が来る前から奏音君が待っていた。まずはプラス一かな。

三十分後。瑞希ちゃんも噴水へやつてきた。一人とも噴水のところに来たというのに、二人は噴水を挟んで待っている。そのため、お互い一向に気付かない！何やってるのよ、あの二人！

奏音くんは数分ごとに時計を見てるし、瑞希ちゃんはぼーっと空を見上げている。

そして、集合時間から一時間たつた。最初にしごれを切らしたのは私だ！どうして一人とも気付かないし、何の行動も起こさないの？

携帯で奏音君に連絡を取る。

「もしもし？」

「もしもし。奏音君、何やってるの？」

「一時間以上前から待つてもこれでは何の意味もないよ！」

「穂乃香ちゃんを待つてるに決まってるだろつ！」

「奏音君、待つてるのはいいんだけど、もう少し周りに気を配ったら？」

時計しか見てなかつたら、來てもわからないじゃない！

「何の事を言つているんだ？ とりあえず来てくれないかな？」

「だ～か～ら～、奏音君は後ろを見てよ！」

奏音君は振り返つて噴水を見る。

「後ろには噴水しかないぞ！」

「当たり前でしょう！ あなたは噴水の前で待つてるんだから！」

「そうじゃなくて、噴水の向こうを見てよ！」

「これでやつと奏音君は瑞希ちゃんに気付いたみたい！」

「あれは……」

「気付いた？ ずっと待つてたんだからね！ 謝つてね！」

それだけ伝えると、電話を切った。

奏音君は電話が切れたのを確認すると、瑞希ちゃんのところに行つて何かを言った。その一言で瑞希ちゃんの顔がさつきまでと打つて変わり、笑顔になつた。ん~、ここからじやわからないよ。

しばらく一人で話しているので、近くに寄つてみる。

「瑞希、誕生日つて来週じやなかつたっけ？」

「えつ！ そうだけど、覚えてたんだ……」

「えー！ 忘れてたの？」奏音君、それはひどいよ！

「よし！ ジャあ、ちょっと早いが瑞希の誕生日プレゼントを買つに行こう！」

それは私もついていかないと！

奏音君と瑞希ちゃんが歩き出したので、私もいつやつついていこうとすると肩を叩かれた。

「何ですか！」

こんな街中で話しかけてくる人なんてろくな人ではない。第一印象が大事だからと、少し怒つたような顔をして振り返るとそこには周君がいた。

「しゅ、周君！ なんでここにー！」

こんなところで周君に会うことになるとは思いもしなかつた。家ではいつも周君の顔を見るけど、外で見るとまた違つた印象を受ける。

「別にいたつていいだろ！ 穂乃香は奏音達を後をつけるのか？」

周君の指をさした先には小さくなつていく奏音君達！ 待つて、

見失つちゃう！

「ごめんね、周君！ 今は忙しいから、また家に帰つたらねー！」

「お前に付きまとわれる事の面倒くささは俺が一番知つてゐるからな。とりあえず、今日はやめてられよ」

そう言つと周君は少し強引に「つづつした大きな手で、私の手を掴んで引っ張つて行く。そんないいよ、周君！ 私の楽し

みんなの
にい

。

第4話

瑞希を家まで送り届けた後、自分も家に帰ろうと歩いていると電話がかかってきた。この番号はマキが以前にかけてきた番号。今度は何だつて言うんだ？

「もしもし？」

電話に出るとやはりマキの声が聞こえた。

「今日のデートは楽しかったのか？」

なぜ知っている？ そのことを知っているのは俺と瑞希、周に穂乃香ちゃんくらいしか知らないはずなのに。

「プレゼントは喜んでくれたか？」

「なんでプレゼントしたことまで知ってるんだよ…」
つい三十分前の出来事だぞ！

「いや、前にいたから」

「デジャブですよ。前にもこんなことあつたぞ！」

「お前つけてたのか？」

穂乃香ちゃんとミキはグルだったのか？

「まあ、そんなことはいいじゃないか！」

「よくねえーしー！」

「そういう事で、明日は一田空けておけよ。じゃーな

「どういう事だよ。おいー 待てやー！」

「ブーブーブー。」

電話は既に切れていた。時間も場所も内容も聞いてないけどいいのか？

「お嬢様、じちらです」

誰かの話しが聞こえる。

「じこが奏音の部屋ですか」

「こんな狭くて汚いところにお嬢様をお連れするのが心苦しいので

すが

勝手なこと言つていいじゃねえよ！

「奏音、寝てますね。こうして見るとかわいいかもしません」「かわいいですか？ お嬢様、こんな奴にそんな言葉は似合わないと思いますよ」

「それにしても、お嬢様を待たせるなんてこいつはー。今すぐ叩き起こしますー！」

次の瞬間、腹に衝撃が走った。

「ぐはっ！ 何すんだよ！ ……、お前にひいで何してんの？」
まず、紅葉が20cmの距離で俺の顔を覗き込んでくるのが目にに入る。この距離で見ても、一点の曇りもない白い肌や透き通った瞳、サラサラとした髪は美しく、シトラスのいい香りに包まれる。俺は何も考へることができなくなり、紅葉と見つめあうまま固まってしまった。

「おいー！」
がはっ！

もう一度腹に衝撃が走り、顔を上げたせいで危うく紅葉に当たりそうになってしまった。

「お嬢様にそれ以上近づくな！」

俺に馬乗りになつているミキが怒つて、俺の腹をサンドバックの様にぽこぽこ殴つてくる。痛い痛いから！ それに、紅葉に近づくなつてこの状況じゃ無理だろ！ 先に紅葉をどけろよー。

「マキも何か言つてやれよー！」

ミキはそう言つがマキは部屋の隅でうずくまつてこる。

「どうしたんだ？ 調子でも悪いのか？」

「まだ、この漫画最新刊読んでなかつたから

俺がこの前買つてきた漫画を読んでいた。その漫画の良さが分かることは、結構趣味が合つのか？

「どうあえず……、紅葉とミキはどうしてくれないか？」

少し名残惜しい氣もする。

「仕方ありませんわね。ミキも降りてあげて」「はい」

ミキは最後に一発殴つてから俺から降りた。

「それで、今日は何の用なんだ?」「

「お嬢様が河原林様にお屋敷に招待されたんだ。だから、お前も連れて行こうということだ」

それ、別に俺は関係ないよね? 俺は行かなくてもいいと思つけど?」

「俺は呼ばれてないんだよね?」「

「お前みたいな庶民が呼ばれるわけがないだろ?」

「じゃあ、勝手に行つてきてくれ。俺は寝る!」

もう一度布団に籠るのとすると、ミキの飛び蹴りが腹にヒットした。ぐつ! これは効く。

「お前は、お嬢様があいつのところに行くのが心配じゃないのか? 「心配? あーあー、心配ね。心配だよ。でも、お前らがいれば大丈夫だろ? その蹴りなら男にだつてひけはとらないって」「わかりました。では、私たちだけで行つてまいります」

紅葉は子犬のような潤んだ瞳で俺に熱視線を送つてくるし、ミキは俺を睨みつけてくる。マキはとくにまだ漫画を読みふけっている。最初の内は無視していたが、五分以上もそのまま固まっているので仕方なく俺が折れた。

「分かつた、行けばいいんだろ。行けば!」

「そうですか、奏音? 無理に行かなくてもいいんですよ?」「

どの口で言つか!」

「いいよ、行くよ。じゃあ、着替えるから部屋を出てつてくれ」

「わかりました。ではミキを置いていきますから、着替えてくださいね」

ミキを置いていく? どうこうことだ?

「ほり、手伝つてやるからこっちに来い」

「はあー! 自分でできるからはよ出てけやー!」

「いつらは何を考えてるんだ？」

「一人で着替えってできますの？」

紅葉は俺が着替えを一人でできないと思っていたのではなく、着替えという行為そのものが一人ではできないものだと思つていたらしい。お前はどこまでお嬢様なんだよ！」

「出来るんだよ、いいから出てつくれ！」

紅葉達が出て行つたのを確認してからため息をつく。今日は大変な一日になりそうだ。

紅葉の黒塗りの高級車に乗つて一時間。さつきから右側はずつと高い塀が続いている。

「もしかして、ここが玲央の家なのか？」

「そうですね、前に一度お父様に連れられて来たことがありますの」
こんなにでかい土地は家としていらんだろ！

「池富城邸ほどではないけどな」

紅葉の家の方がでかいのかよ！ でも前行つたときはそんな風にはおもえなかつたけど？

「お前は離れにしか行つたことがなかつたよな？ 本館はあんなものではないぞ」

えー！ 百部屋以上あつてあれで離れですか？

その後も壁づたいに車で走つて行くと、巨大な白い門が現れた。運転手が門のところに立つていた人に話しかけると、ゆっくりと門が開きました車を走らせた。門をくぐつても中にはまだまだ道が続いている。周りは森になつていて、庭園になつていて、駐車場になつていてりする。ここはどこのテーマパークですか？ こんなに駐車場はいらんでしょ！

そうしていりのうちにせつと屋敷が見えてきた。屋敷の門の前に車をつけて車から降りると、スーツのかなり似合つている、いかにも執事と言つて感じの人気が立つていた。執事は紅葉を見ると一礼する。「こりつしゃいませ。長旅御苦労さまです。中でおぼつかなが待

つてあります。案内させていただきます

「そう言つと、また一礼して門を開けて中へ歩いていく。紅葉達がその後ろをついていくので、俺も続いた。中に入ると赤じゅうたんで埋め尽くされた床があり、高い天井からはシャンデリアが吊るしてある。屋敷は西洋の古城を思わせる造りで、こんなものが日本にあり、なおかつ住居として使われていることが信じられなかつた。シンデレラがガラスの靴を落としそうな階段を上り、それからしばらく歩くと突き当たりに他より一回り大きい扉が現れた。

「いらっしゃがおぼつかやまの部屋でござります」

扉が開くとそこに広がつていたのは体育館くらいのかなり広い部屋だつた。その部屋の真ん中辺に装飾のたくさん付いた椅子があり、玲央はそこに腰かけている。

「やあ、いらっしゃい。紅葉さんとそのお付きの方々。ん？　奏音、お前みたいな庶民は呼んだ覚えがないぞ？」

呼ばれた覚えもねえよ。

「『めんなさい。どこで聞いたのかわからないのだけれども、奏音が自分と行くと言に出してしまいました』

「おい！　いつ、俺がそんなこと言つたんだよ！」

「紅葉さんは気にしなくてもいいんですよ。悪いのは全部奏音なんですから！　さあ、奏音！　自分が紅葉さんに迷惑をかけているとわかつただろう？　わざと帰つて行つたらどうだ？」

「帰つていいのか？　じゃあ、送つてくれよ！」

早く帰つて睡眠の続きをせねば！

「は？　何を言つてゐる？　お前のよつな庶民を乗せる車など河原林にはないぞ。早く帰りたまえ！」

あの距離を歩いて帰れと言つのか！　今日中には家に着けないだろ！

「奏音はさぞうしてもこの様に立派は河原林邸を見てみたかったのでしょうか？　河原林様、奏音も一緒にいてもよろしいでしょ？」

「いやいや、別に見たくもありませんし。」

「紅葉さんがそう言われるのなら仕方がありませんが……。奏音、少しでも邪魔をしたら直ぐに追い返すからなー。」

「はいはい、わかりましたよ」

「では、気を取り直して。紅葉さん」ちりへじりや」

玲央はさつき座っていた椅子とは別のテーブルに紅葉を連れて行き椅子に座るように薦める。ミキ、マキは紅葉の後ろに立っていたが、俺は紅葉の隣に座った。

「紅葉さん、紅茶はいかがですか？ それとも「コーヒー」にしますか？」

「では、紅茶でお願いします」

玲央が手を二回叩くとさつきとは別の執事が現れた。

「紅茶を頼む」

「はっ！」

その執事は扉に向かって歩いて行き、扉を出たのと同時にメイドさんがお盆にティーカップを乗せて入ってきた。メイドさんは俺たちと同じくらいの年の娘だった。

「玲央様、紅茶になります」

紅茶は玲央と紅葉の前のみに置かれる。

「俺のがないんだけど」

「お前に飲ませるような紅茶などない！」

「まあまあ、そんなこと仰いぢに。奏音としたらもう一生味わえないかもしないのですから、一度くらい飲ましてあげてもよいのではありませんこと？」

「ひどい！ お前ら庶民をいじめて愉しんだるだろー。」

「それもそうですね。こいつにも紅茶を頼む」

「かしまりました」

メイドさんは一礼して扉に向かって歩いて行き、扉をくぐったのと同時に別のメイドさんが現れた。あの扉の向こうはどうなつてるんだ？

「紅茶になります」

俺の前に紅葉を置いたメイドさんはまた扉の向こうに帰つて行った。

「それで、紅葉さん。紅葉さんの部屋はどのよつた部屋がいいのですか？」

「はい？ 私の部屋とはどうこいつとですか？」

玲央の話に紅葉はついていけないようだ。俺からしたら玲央が言わんとしてる」とはわからんでもないけど……。

「もちろん、紅葉さんが住む部屋の話ですけど。結婚したらこちりに住むのでしょうか？」

やっぱりな。玲央の脳内では紅葉と結婚することになつてゐるんだな。

「しかし私は奏音と付き合つてこますし、河原林様と結婚する予定もないのですが……」

「ふふふ。今はこんな奴と付き合つてもいいですが、最終的には私と結婚することになりますよ」

何を持つてそんなことを言つてこるのだろうか？ やっぱりわからん。

「まあ、紅葉さんはこの屋敷の事はわからぬでしようから、決めようがありませんよね。では、今日は屋敷案内でもしましよう！」

そう言って俺たちは河原林邸を見学することになつた。なぜ俺まで付き合わねばならんのだ！

結局屋敷内はもちろんのこと、庭園まで案内されて飯まで御馳走になりやつと家に帰してもらえたことになつた。紅葉はなんでこんな奴の家に来たのだろう？ 不思議に思つたのでマキに尋ねた。

「お嬢様だつて好きで河原林様のところに来ているわけではないぞ。お嬢様クラスのお家になると家庭の事情もいろいろあるんだ。お前とは違うんだよ」

最後のは余分だろ！

「河原林様、今日は本当にありがとうございましたわ

「こえいえ、気にしないでください。今度も招待しますのでまたいらしてください」

俺に向かつてお前は来るなよと言つて足してくる。別にもう来たくねえよ！

「はい、ではさよなら」

そう言つと車を走らして河原林邸を後にする。

「ふう、疲れましたわ」

最後に紅葉の本音を聞いてしまつた。

月曜日がやつてきた。昨日は帰つてきた後ベットで横になつていたら、もう外は明るくなつていた。夕飯のときくらい起こしてくれてもいいだろ！ 朝起きて母親にそうやつて文句を言つたのだが、「えつ？ 帰つてきたの？ むしろ帰つてこなくともいいよ」とか言つられて本当に悲しくなつてきた。

別に優しくしてくれなくともいいから、わつ少し気にしてくれてもいいのでは？

そんな愚痴をつぶやきながら通学していくと、後ろから肩を思いつきり叩かれて前のめりに倒れそつになつた。

「何すんだよ！」

後ろを振り返るとそこには、いつも以上にキラキラをした笑顔を振りまきながら挨拶してくる瑞希がいた。流石に一昨日プレゼントしたイヤリングは着けていなかつたが、なぜか今までとは違う印象を受けた。

「どうしたんだよ？ 何かいいことあつたのか？」

「そんなの決まつてるじゃん！ 一昨日は最高の誕生日祝いを貰つたからね！」

余程イヤリングが嬉しかつたらしい。でも、そんなに嬉しそうな瑞希を見ていると意地悪を言いたくなつてきた俺はひねくれているのかな？

「最高と言つのは値段の話か？ 流石に俺の懐に大打撃だつたしな

「確かに金額的にも最高だつたかもしれないけれど……。私はそういうことを言いたいんじゃなくて！」

なんか、俺まで楽しくなってきたぞ？

そんなことをやつてこる間に、この細い道を何台もの高級車が通り抜けていく。あの学園は本当に送り迎えしてもううつ奴が多いな。しかし、遠目で眺めていた俺の背筋に寒気が走った。ぶるぶるぶる。うー、寒！ まだそんな季節じゃないはずなのに……。

キイー！

俺の背後でものすゞい音がした。振り返るまでもない！ 俺の後ろギリギリのところで車が急停止したのだ。さっきの寒気はこの前ぶれだつたのか？

「おはよひびきます、奏音」

振り返ると、俺を引きそうになつた車から降りてきた紅葉がいた。「池富城さん！ 危ないじゃないですか！ もう少しで奏音ひりちゃん引かれるところだつたんだから！」

「それはありませんわ。私の運転手の運転技術を甘く見ないで下さりませんこと？」

「いくら運転がうまくても、もしまつてことがあるかもしれないじゃないですか！」

この一人は会つとこつも言つて合になつていてる気がする。一人ともこんな人に当たる性格じゃないんだけどな？ ケンカするほど仲がいいことかな？

「まあまあ、一人ともそれくらいにして。瑞希、俺にけががなかつたんだからいいじゃないか！ 紅葉はもうこんな危ないことは一度とするなよ！ そういうことで皆で学園に行こうじゃないか！」

「そういうわけにはいかないよ！ 前から言つたかったんだけど池富城さんは奏音ちゃんに迷惑をかけすぎだよ！」

「それはあなたにも言えることじやありませんこと！ 一昨日プレゼントをいただいたうですね？ 奏音に無理やりプレゼントをせたのではありませんか？」

「そ、そんなことないもん！ 奏音ちゃんは迷惑じゃなかつたよね？」

？」

「急に振つてくるなよー。ミキにマキも止めて入つてくれよー。」

結局瑞希と紅葉の言い合ひは続くし、ミキ、マキは止めて入らな
いしで学園に遅刻しそうになつてしまつた。

放課後になり、今日はもう何にも巻き込まれずに帰るぞー、と宣
言したとたん、マキに捕まつてしまつた。教室を出ようとして、誰
もいなか廊下をのぞいていた時のこと。

「おい、何やつてるんだ？ 奏音、かなり拳動不審だぞ？」

俺の努力も虚しく、マキに見つかっていたのだ。

「お前、何時からそこに？」

「そつだな、奏音が席を立つときから後ろにいたぞ」

怖えーー！ これからはまづ、後ろを確認しないといけないのかよ。

「それで、今日は頼みごとをしに来ただが……」

「お前が口を濁すなんて珍しいな。言いにくいくことなのか？」

「ここではな。だから、ちょっと着いてきてくれないか？」

字面だけ見ると謙虚そうに見えるが、マキときたらそう言いながら俺の腕を引っ張つていく。振りきれないほどの力で引っ張られて
いるわけではないが、よくわからない威圧感があり着いていくこと
しかできなかつた。

連れてこられたのは図書館のテーブルだつた。そこには紅葉とミ
キが座つてゐる。

「それで、そろそろ何故連れてきたのか教えてくれないか？」

俺が聞くと、ミキ、マキが顔を落とした。そんなに悪いことな
か？ 俺が何かしたとでも言つのか？

「言いにくいくことなのだが……、実はお嬢様はあまりお勉強がお得
意ではいらっしゃらないのだ。だから、テストも近しい意外にも勉
強のできるお前に勉強を教えてもらおうと思つ

「えつ！ なんで決定事項なんですか？ 俺の意思是は？」

「それで今日は、お嬢様に数学を教わつていただこうと思つていま
す」

「えつ！ 数学ですか？ 今日は少し気分が乗りませんね」

「今、少し焦りましたよね？」

「それなら、英語にしましょー！」

「英語はまだやらなくとも大丈夫ですか？」

「では、世界史を……」

「世界史は暗記しかすることがないでしょー？」

「おい！ やる気ねえーだろ！」

「紅葉はどれくらい勉強が苦手なんだ？」

俺はマキを手招きして呼び、紅葉に聞こえないうに聞く。

「そんな、苦手と言つほどでもないぞ？ いつも学年一位か一位といつたところだな」

「俺より頭いいんじゃねえの？ 教えられねえよ」

「俺の最高順位はこの前の5位だからな。」

「それが……、下から数えて……な」

「まじかよ」

この学園は、金持ちが多く通う学園であるため、まったく勉強せずここまで来てしまった奴らも多い。逆に英才教育で頭が異常にいいという奴らもいるから、かなり上下の差が激しい。

そんな中の下から一位？ ヤバいんじゃないの？

「進級できるのか？」

「留年になるんじゃねえの？」

「それは問題ない。お嬢様は全く授業に出席しなくても卒業できるぞ！」

「なら、勉強する必要はないんじゃないの？」

「それでも、勉強はお嬢様の将来の役に立つと思うんだ」

そこまで、紅葉の事を考へてゐるのかよ。じゃあ、俺も答えるしかないな！」

「よし！ 紅葉、始めるぞ！」

「本当にやるんですの？」

「子犬のような潤んだ瞳で見つめてくるがそんなことは無視して始める」とこした。

そしてテスト前日。一週間くらい紅葉の勉強を見たが一向に進歩が見えない。それは紅葉の頭が悪いわけでも、俺の教え方が悪いわけでもない。なぜならば、紅葉の学力は中学校で止まっているからだ。一週間ではテストにはどうにもならない。

「お前、もう少し早くから勉強を始めよつとは思わなかつたのか？」
「勉強など私には必要がありませんでしたから。会社を経営するわけでもありませんし、まして就職など考へたこともありません。私はただお父様がお決めになつた殿方と結婚して、その方についていけばいいだけですから。ですので、私は好きなことのみをやっていいのですよ」

紅葉は明るくそう言つが、俺にはその笑顔が本心からきているものであるかは分からなかつた。

「じゃあ、何でこの一週間勉強をしたんだ？」

この質問に対しても紅葉は顔を一瞬曇らせたが、すぐに元の笑顔に戻した。

「奏音が一生懸命に教えようとしてくれたからでしょうか？　自分にもよくわかりません。気まぐれだつたのかもしれませんね」

紅葉は人と話すとき、必ず相手も見るようにしていたと思う。しかし、このとき紅葉の目は俺のはるか後ろで焦点を結んでいた。どこか遠くを見つめるような紅葉の視線の先には何が見えているのだろうか？　会話はそこで途切れてしまった。

それからも勉強会は続いたのだが、俺は勉強に身が入らなかつた。紅葉に教えている内容も違つつことを言つてはいることに気付かず、マキやミキに何度も注意された。

「さて、これくらいで終わりにしましようか？　明日は本番ですし、奏音も自分の準備をした方がいいでしょ。奏音、どうしました？」

気付くと田の前には紅葉の整った顔があつた。何度かこのくらいの近い距離で見たことはあるが、何度見ても慣れる事はない。俺の顔を映し出している透き通った瞳に、ぱっちりとしたまつ毛。何物にも触れたことのないような卵肌。どれもが俺の心を煩わせるには十分すぎる代物である。

「あ、ああ……」

俺があこまいで返事を返すと、紅葉は満面の笑みを浮かべ顔を離した。

「さあ、外ももう暗くなっていますし送つて行きましょうか、奏音？」

紅葉が通学にいつも使つている車で送つてくれるところのだろう。俺は紅葉にもう少し触れ合つてみたいと思いつつも、この場から早去りたいと言つ気持ちに支配された。俺が紅葉の申し出を断ると、紅葉は残念と口に出してつぶやいた。

結局俺は紅葉達が車に乗り込むのを見送つた後、帰路に着いた。家に帰つても勉強になど集中できないとは分かつていて、この場で行動に起つせるほど俺はいなかつた。

「はい、やめつ！ テストは番号順になるように前に送つてね」

最後の英語のテストが今終わり、やつと今回のテストも終わりを告げた。テストなんてやつても無駄じゃないか！ テストなんかしあつて寸前になつて詰め込むだけで、終わつてしまえば全部忘れてしまうのが席の山だしな。テストなんて生徒が苦しむ姿が見たい陰湿な教師が作ったに違ひない！ こんなに苦労するのは、普段から勉強をしていないからだつてことはわかつていてるんだよ？ でも、そつとは分かつていてもテストもないのに勉強なんてする氣にならない。つてことは、テストは意味をなしているつてことになるのか？

「奏音ちゃん、テストはどうだった？」

瑞希が後ろの席から首を伸ばし話しかけてきた。

「一番の最後がわからなかつたな」

「そこも、分からなかつたけど五番の二個目の意味が分からなかつたの」

五番は確かに英語の諺を日本語に戻す問題だつけ？

「どんなやつだつた？」

「えつとTime flies・だよ。時間跳躍？」

「はつはつは！ 時間跳躍はないだろ！ どんな諺だよ」

俺が大笑いすると、瑞希は少し怒つたようだ。

「そんなこと言つたつて、分からなかつたんだもん！ 他の諺は直訳すれば意味が何となく取れたけど、それだけは良くわからなくて……」

「そりか？ イメージ出来ないこともないと思つたび？」

「そんな難しい諺じやないしな。

「えー、じゃあ答えは何よ？ 教えてよ！」

「さてと、テストも終わつたし遊びに行くぞ、周」

「無視しないでよー！」

瑞穂が泣きべそをかいていたかのよつな顔で言つてきたが、知らんぷりをして周と話す。

「どこかいい場所はないか？」

「悪い、奏音。今日は先客がいて無理なんだ」

周は教室の後ろの入り口を指差す。

「先客だと？ 誰だよ？ あつ！ わりい、気付かなかつたぜ」

周の指差した方を見てみると、そこには穂乃香ちゃんがいた。俺が軽くからかい気味に言つたのに、周は反応せずに穂乃香ちゃんと一緒に帰つて行つた。慣れつて怖いね。

周が立ち去つたことで、ここに残されたのは俺と頬を風船のよつに膨らましている瑞希。面倒くさくなりそうだ。

「周君、帰つちゃつたね」

「そうですね、瑞希さん」

「ここは瑞希の怒りに触れないように丁寧に扱うのが重要だ。

「それで、奏音ちゃんはどうして私を無視したのかな？」

満面の笑みを浮かべ俺を問い詰める瑞希。笑っているはずなのに、俺は一步後ずさりしてしまった。

「どうしてかな？」

瑞希は追い打ちをかけるよつて、その一步を縮める。そんなことを繰り返しているうちに、教室の隅まで来てしまった。俺にはもう後がない。ど、どうすればいいんだ！

その時ガラガラと大きな音を立てて教室のドアが開かれた。

「おい、奏音はまだいるか？」

そこにいたのはマキだった。俺はマキに気を取られている瑞希から、必死に逃げマキのところまで行く。なんていータイミングだつただろう。俺の田代の行いがいいからかな？

「どうしたんだ、そんなに慌てて？」

今来たばかりのマキには状況が理解できず、頭の上にハテナマークをいくつも浮かべている。

「なんでもない、なんでもない。それで俺に何か用か？」

「」このとき瑞希が後ろから接近してきたことに気付いていたが、平常心を喪つ。

「お嬢様が奏音に勉強を見てもうつたお礼に、一緒にどこかに行かないかってお前を誘われているのだが、用事はないか？」

ここで用事はないかと聞くところを見ると、これは俺に選択肢を提示しているわけではないらしい。もし用事がなければ強制連行だろ？ あると言つてもどんな用事か聞かれて大した用事でなければまたもや強制連行。だから、用事があると嘘をつくのも無意味だとわかつてしまう。

「ああ、何もないよ」

まあ、折角の紅葉からの誘いを断る必要はないんだけどね。

「ちょ、ちょっと待つてよ。私が奏音ちゃんを先に誘つつもりだつたのに！」

横からそんなことを言つてきたのは、疑いよつもなく瑞希だ。

「『つもつ』だったんだろう？ なら、先に約束をしたのは私だ。

残念だつたな

不敵な笑みを浮かべているマキが、紅葉を煽るよつて言つ。やめてつ！ 今の瑞希を刺激しないで！

「だつて、奏音ちゃんが私の話を聞いてくれなかつたんだもん！」

「それは奏音に嫌われているんじやないのか？」

「そ、そうなの奏音ちゃん？」

瑞希がかなり不安そうに俺を見つめてくる。俺つてそんな風に見えるか？ 確かに素気なく接することはあつたかもしれないけど、さつきだつて無視とかしたけど。

「それはないんじやないかな？」

「何で他人事みたいに話すの？」

「そう言われれば何でだろ？ 僕は瑞希の事が嫌いなのか？ いや、そんなはずはないと思つけど？」じやあ、好きなんだろ？

…？

「そんなことははどうでもいい。奏音、急いで行くぞ！ お嬢様はもう待つてらつしやるのだから…」

「私はどうなるの？」

「知らん、また今度誘えればいいだろ？」

マキにそんなことを言われ、下を向いてしまつた瑞希。なんだかかわしそうになつてきた。

「じゃあ、俺たちと一緒に行くか？」

「いいの？」

うつむいていた顔を上げ、潤んだ瞳を向けてくる。

「いいだろ、マキ？」

「だめだ、だめだ！ お嬢様に断りもなく、そんな勝手な判断はできん！」

「じゃあ、紅葉がいいつて言えばいいのか？」

それならば、今から紅葉のところに向かうのだ、一緒に行つて聞けば済む話だと思う。

「だめだ、お嬢様は奏音を誘つたのだぞ？ 他の奴を連れていくな

んてできない

「別に構いませんよ？」

マキの後ろから声がして、三人とも声のした方に視界を向けた。
そこには紅葉とミキの姿が。

「で、ですか！」

「私が構わないと言つたら構わないので。それとも私に意見するつもりですか？」

初めて見た紅葉の相手を威圧するような瞳。それが今、普段あんなに仲がいいマキに向けられている。紅葉と目を合わせたマキはぼそつと申し訳な「いません」と言つとそれから何も言わなくなってしまった。

「申し訳ありませんでした、衣川さん。もしよろしかつたら私たちと一緒に行きませんか？」

紅葉は先ほどマキに向けていた瞳とは似ても似つかぬ、こちらを心の底から安心させてくれる頬笑みで瑞希を見た。
「私なんかが着いていいて、本当にいいのですか？」

瑞希は恐る恐る紅葉に尋ねた。

「私としては、来てくださった方が嬉しいですわ」

「じゃあ、一緒に行かせてください！」

いひして五人で出かけることになった。

さて、皆で出かけることになったのはいいのだけれど、いつもながら何をしたらいいのだろう？ 普段あまり外に遊びに行かない俺

としては、今回の様に急な外出の予定が出来てもどこに行けばいいのか見当もつかない。この前瑞希と出かけた時も一人してどこに行けばいいかわからず、さまよつてたつけ。

「今日は行く場所は決まっているのか？」

「一応考へてはいるが、何か案があれば聞いてやつてもいいぞ？」

ふう、決まっているのか。じゃあ、俺が心配する必要はないな。

「いや、特にないからそこでいいよ。それでどこに行くんだ？」

「紅葉様がテスト勉強を頑張られて疲れていらっしゃるだろ？だから、甘味処に行こうと思つてる。瑞希さんもそれでいいかな？」

マキは先ほどケンカしていた瑞希に対して、ケンカしていたことが嘘かの様に親しげに聞く。マキは切り替えが早いんだな。確かにこれからずっとシンケンされても気分悪いし、いいんだけどね。こつちはそういうわけにはいかないのかな。

瑞希の方に目を向けると、マキの言葉に対して頷いただけで何も言わない。さつきまであれだけ言っていたのだ、瑞希の反応が普通だと思つ。

「や、その甘味処はここからどのくらいなんだ？」

このままでは沈黙の時が始まりそうだったので、何とか会話を続けようと再びマキに振る。

「車で二十分くらいかな。校門のところに車を止めてあるから、それに乗つて行くんだ」

「私がいつも行く甘味処です。衣川さんもきっと気に入つてくれだと思いますわ。」

紅葉は先ほど瑞希を誘つた時のままの笑顔でいる。ずっと同じ顔をしていて疲れないのだろうか？

校門まで来ると、さつきマキが行つていたようにいつも紅葉が乗つている黒塗りの高級車が止まつっていた。ミキが車の後ろの扉を開けて紅葉をエスコートする。

「紅葉様、足元にお気をつけください」

「ありがとう。でも私はそんなにそそかしいつもりはないのだけれど？」

「そんな、私は消してお嬢様がそそかしいなどは思つておりません！」

紅葉にからかわれたミキは顔をふんぶん振つてそれを否定している。

「ふふふ、冗談よ。ミキは私の事を心配して言つてくれたのですもね。感謝こそすれ、怒つたりなどはしないわ

「

紅葉は口元に手を持つていき、ふふふと上品に笑っている。それにつられて俺とマキが笑いだし、最後には瑞希も一緒になつて笑つた。

「この出来事で俺たちの雰囲気はガラツと変わつた。さつきまでのどこか暗い雰囲気はなくなり、明るく楽しい感じになつた。紅葉が天然で雰囲気を変えたとは考えずらい。多分、故意にやつて見せたのだろう。俺は改めて紅葉の「」を知つた気がした。

それから暫くして、目的地である甘味処に着いた。しかし、そこは甘味処というよりは高級料亭といったほうがあつてゐる気がする。「ここがそうなのか？」実は隣の小さなお店ですとかつて言つオチはないだろうな？」

「いいえ、ここですわ。ここはぜんざいが有名で、各界の著名人の方々もいらっしゃるのですよ」

流石は紅葉の行きつけの店といったところだらうか。俺たちの予想の斜め上をいつてゐる。

「でも、ここ。値段が張るんではないですか？」

瑞希の質問を聞き、俺はとつさに財布の中身を確認する。中には野口さんが一名。果して足りるだらうか？

「そんなこと気にしなくてもいいのですよ。ここは私が持ちますから。奏音もお財布の中を確認しなくてもいいですから」

紅葉はまたふふふといつお得意の上品な笑いをしてゐる。なんか、今日の紅葉はいつもより明るくないか？ 確かにいつも笑つたりもするけれど、今日はちょっとおかしい気がする。

「えつ！ でも、悪いですよ」

「気にしないでください、私が招待したのですから。さあ、立ち話をしないで中に入りましょ？」

紅葉の先導で店に入ると、従業員一同のお出迎えが待つてゐた。

「いらっしゃいます。池宮城様」

俺と瑞希は驚き固まつてしまつた。誰が甘味処に入るだけなのにこんなことになると思うか？ そんな俺たちをよそに、女将さんら

しき人が現れた。何故甘味処で女将さん？ とは思つたが、もうここまで来ると何があつてもおかしくない気がする。

「池富城様。いつも御贔屓にしていただきありがとうございます。」

お部屋はこぢらになります」

女将さんの言葉に俺は先ほど紅葉が言つていたこの店に来る各界の著名人の中に紅葉も入つっていたことに気付かされた。

部屋に通された俺たちは机の周りに置いてある座布団に座つた。紅葉が女将さんに人数分のぜんざいを注文すると、女将さんは部屋から出ていく。そうすると部屋には俺たち五人になつてしまつ。俺はどうすればいいのか分からず、部屋を見渡した。

部屋の中もとても豪華な造りなのだが、何よりも田に止まるのは窓の向こうに見える日本庭園だろう。石、砂、植栽を使つた庭で、かなりしっかりと手入れされている。白砂を使って水の流れを表しているのですよと紅葉に庭の説明をしてもらつていると、女将さんが五つのぜんざいを持つて現れた。

俺の前に置かれたぜんざいを見ると何故か金粉がふんだんに使われている。いつも思うのだけれど、体の中で分解することができない金をどりじて食べるのだろう？ 豪華に見えるからだろうか？

「おいしー！」

そんなことを考えているうちに、皆食べ始めていて瑞希がスプレーを片手に声を上げていた。俺も口に含んでみると、今まで食べてきたぜんざいはなんだつたんだろうと考えさせられてしまつくらいおいしかつた。こんなにおいしいなら俺も常連になりたいと思うが、悲しきかな、金銭的に無理であろう。男として悲しいけど、また今度紅葉に連れてきてもらおう。

次の日、呼び鈴によつて俺は起こされた。別に俺に用事がある人が来たわけではないだろう。今日は日曜だしまだ寝ていてもいい時間だ。再び布団に潜つた俺の耳に俺の部屋に近づいてくる足音が届く。ああ、幻聴であつたらどんなにいいだろうか。現実逃避をして

いる俺をよそに俺の部屋の扉が開いた。

「奏音、迎えに来たぞ！」

それはマキの声だつた。

「なんだ、まだ寝てるのか？ 後三秒で起きなかつたら呪き起こすからな！ さん！ にー！ いぢりー！」

「わかつた、起きるから！」

身の危険を感じた俺はとつとて上半身を起こす。すると、そこには俺に飛びかかるとしているマキの姿が……。なんでもまた強引に起こされなければならないのだろうか？ 召集は昨日あつたのだから今日ははやく帰りたいと思つたのに。

「それで、今日は何の用だ？」

無理やり起こされた俺は機嫌が悪く、ぶつきあひひつひマキに聞く。

「お嬢様が奏音をお食事に招待されたのだ。もうひるを行くみな？」

「いや、今日は一日寝るという予定が……」

「そうか。じゃあ、残念だがお嬢様には断られたと伝えておくよ」「ちよ、ちよっと待てよー。いつもは俺が何と言つても強引に連れて行くのよ、どうして今日は引き下がるんだ？」

俺は帰ろうとしているマキを慌てて止めに入る。

「用事があるのだろう？ 仕方がないじゃないか。私も暇じゃないんだ、ここを通してもらえないかな？」

「悪かった、俺が悪かったから。紅葉からの誘いなんだろう？ すぐさま支度するから待つてくれ」

しようがないなど待つことにしてくれたマキを見て、俺は安心してため息を吐いた。どうして俺はこんなに慌ててしまつたのだろう？ 今までは紅葉からの誘いもただ面倒くさいと思つていたのに。今だつて面倒くさいと思つて用事があるとか言つたのに、どうして俺は紅葉からの誘いを受けることができて、こんなにも安心しているのだろう？

「おー、向まーつとしてるんだよ。早く準備しないと置いてこぐぞ！」

そう言って部屋の外に出でてこくマキ。

「わかつた、今行くから！」

俺は急いで支度をしてマキを追いかけた。

今回の食事は紅葉の家で食べるらしい。前に紅葉の家に行つたのは結構前の気がする。本当はそんなにたつていのいのだけれど、最近はいろいろありすぎて一日が長い。充実していると言つたらそうなのかも知れないが、俺はゆつくりと休める日が恋しい。

池富城の屋敷の食堂に入るとそこには椅子に座つた紅葉と、後ろに立つてゐるミキが目に入つてきた。そこには紅葉は膝の上できれいに重ねてゐる細く長い指先、すつとまつすぐに伸びてた背中、白く透き通つたきめの細かい肌、朱くふつくらとした唇、秋に澄んだ水のような瞳、それから横に長く引かれた美しい眉で俺が来ることを待つていた。

紅葉は入つてきた俺に気付くと、誘いを受けたことへの感謝の言葉を悲しい笑顔と一緒に俺にくれた。

「今日はどうしたんだ？ 昨日も一緒に出かけてじゃないか？」「私も昨日で十分だと思つてゐたのですが、今日になつたらまだ足りないと思つてしましまして……」

何が十分で何が足りないのだろう？

「だから、食事に招待してくれたのか。そう言えば最初にあつた日にもここで食事したんだつたな。今の紅葉を見ていると、あの時の紅葉とはまるで別人だな」

俺はハハハと笑う。だつてそうだろう？ 俺はあの時ここで椅子に縛られてたんだぜ？

「恥ずかしいですわ。でも、あのときは手段を選んでいる余裕などありませんでしたので」

顔に紅葉を散らして言つ。この一文は馴熟落のつもりじゃないから、らな！

「あの時は頭の中が“じちや”“じちや”で料理の事は全然覚えてないから、

「うやつてまた食事に誘つてもうえたことは素直に嬉しいよ」「そう言つていただけると私も嬉しいですわ。前回の事を覚えてらっしゃらないという事は少し引つかかりますが」

紅葉と話し込んでいると料理が運ばれてきた。テレビでしか見たことがないような高級食材をふんだんに使つた料理が真つ白のお皿にちよこんと置いてある。いつも思うのだが、こうじう料理はどうしてこんなにも量が少ないのだろう? 値段はかなり張つているのだから量を増やしてもいいだろうに……。

「それでは足りませんか? でも大丈夫ですよ。これからまだ料理はたくさん来ますわ」

確かに紅葉の言葉通り、そのあと十種類ほどの料理がやつてきた。もちろん紅葉は食べることはできないので、一口食べただけでほとんびり下げるももらつてている。

「もつたひないな~。料理の数を減らして全部食べられる量にしたらどうだ?」

「何を言つている! お嬢様は奏音にいろいろな種類の料理を食べてもらいたかつたからこつこつ食事になさつたのだぞ!」

「いいのです、マキ。確かに食べ物を残している私は大変粗末なことをしているのですから」

紅葉は俺に掴みかかってきそつなマキをなだめるよつて言つ。

「俺が悪かったよ。紅葉は俺の事を考えてこうしてくれたんだな。ありがと」

この食事会は前回とはうつて変わつて、いい雰囲気で終えることができたと思う。このときにはもう紅葉の気持ちは固まつていて、俺の気持ちは傾いていたけれどこのときはただ楽しかつた。

次の日、学園に行くと何故か学園全体がそわそわしている気がした。俺には分からぬが何かがあつたのかもしてない。話し込んでいる生徒たちの話に聞き耳立ててみると、池宮城財閥、河原林財閥といった言葉が聞き取れた。経済で大きな事件でもあつたのだろうか？ 今日の朝のニュースでは該当するような事はやつていなかつた。不思議に思いつつ教室に入ると、俺のところに周が駆け寄つてきた。

「池宮城さんと河原林の事知つてるか？」

周はそんなことを聞いてくる。やはりあの一人に何かがあつたらしい。でも他の生徒たちは財閥の話をしていたぞ？

「いや知らないが。何かあつたのか？」

「俺も学園に来て知つたんだけど、あの二人それに池宮城さんのお付きの一人も転校したらしい。なんでも池宮城さんが河原林の奴と婚約したらしくて、河原林財閥の経営している学園に転校したとか」「は？ 何だよそれ、確かにか？ 昨日も紅葉にあつたが、そんなこと言つてなかつたぞ？ それに紅葉は前から玲央の求婚を断つていたじやないか！」

玲央の家に行つたときだつて面倒くさそうにしていたのに。

「あくまでも噂なんだが、池宮城財閥は経営が傾いていて河原林の奴が援助してやるから池宮城さんを渡せと言つたらしい。確かに前から河原林の奴が池宮城には余裕はないから、池宮城さんが落ちるのも時間の問題だとか言つていたが本当だつたとわな

「つまり、紅葉は家を助けるために嫌々玲央と結婚するつてことか？」

「そうだな、政略結婚つてやつだ。あんな奴と結婚することになつた池宮城さんに同情するよ。お前も残念だつたな。まあ、奏音には高嶺の花だつたんだよ」

「ふざけるなよ」

俺は頭に血が上り冷静に物事を考えられなくなっていた。
「や、そんなにむきになるなよ。悪かった、茶化したことは謝るか
らさ」

俺の表情が余程怖かつたのか、周は尻込みしながら謝つてきた。
「政略結婚だと? 何で紅葉が利用されなくてはならないんだよ! 何でしたくもない奴も結婚しないといけないんだよ!」

俺の中で何か黒いものが湧きあがつてくる。

「奏音落ち着けつて! 俺たちじやあどうじよつとないんだよ!」

「池富城の会長の所に文句を言つて言つてくる

俺はそのまま教室から出ていく。

「待つて、今からHR始まるんだぞ!」

俺は周の言葉を無視して池富城邸を手指した。

学園から飛び出した俺は、タクシーを拾い池富城邸を手指した。池富城邸は昨日と変わらぬままそこにあり、俺は安堵した。昨日訪れてから24時間も立つていないのでから、当たり前と言えば当たり前なのだが、そんなことすら信じられないくらい俺の周りの環境が変化してしまっているように錯覚を覚えていた。

門番に会長に用事があると伝えると、すぐに連絡を取つてくれて中に入れてもうえた。会長は門番に俺が来るかもしいと伝えていたのかもしれない。

俺はどこか社長室を思わせる部屋に通された。紅葉の父親は池富城財閥の会長なのだからこいつこういつ部屋があることは当たり前かもしれない。しかし、あの会長からはこういつたイメージは受け取れず、会長は名前だけで下の者にすべて任せているという印象を持つていた俺にはこの部屋は意外だった。

俺は体重をかけるとずつしりと沈み込むソファで座つて待つように言わされたので、大人しく待つていた。教室で沸騰した俺の頭はある程度冷めていたので、会長が出てきたら何を言つてやろうかと考

え込んでいた。

会長が現れたのはそれから十分ほどしてからだった。

「やあ、待たせてすまない。仕事のきりがなかなかつかなくてね」

「どうして、紅葉を利用したんですか！」

俺は会長が出てくるなり、すぐに言いたかったことを会長にぶつける。

「君はそんなことを言いに来たのかね？ どうして……か。決まっているだろう、池宮城財閥を守るためにだよ」

「貴方は、自分の娘よりも仕事が大事なのですか！」

「仕事は大事だよ。君はまだ働いていないから分からぬかもしれないが、とても大事なことだ」

紅葉の事を考えて、今までにあれだけ俺に危害を加えてきた人にとっては到底思えない。会長は紅葉の事を大切に思つていると感じたら俺はここに来れば何とかなると思つたのに。

「仕事のためなら、娘はどうなつても構わないと？」

「そつは言つていなさい。私だつて紅葉の事は大事に思つてゐるし、幸せになつてもらいたい」

「なら、何で！」

「君はもう少し大人にならないといけないかも知れないね。冷静になりたまえ。私だつて娘は大切だ、家族は大切なんだよ？ でもね、私は池宮城財閥の会長であり、私たち家族は池宮城財閥で働いているすべての人たちによつて生活を支えられているんだ。彼らによつて私たち家族はこんなにもいい生活をさせてもらつてゐるのだよ。

しかし、今は池宮城財閥の経営は傾いてしまつてゐる。私は池宮城財閥の会長として、私の下で働いているすべての人を守らなければならぬ。彼らにも彼らの家族と生活がある。経営が苦しくなつたからとつて簡単に放り出すわけにはいかないんだ！ そして、今回は紅葉で彼らを守ることができない。だから、私は紅葉に玲央君と結婚してもらつことにしたんだ」

会長の言つ事には筋は通つてゐると思うし、俺も働くならこんな

人の下で働きたいと思う。
でも、それでも、紅葉を犠牲にするのは
我慢ならない。

「本当にそれでいいのですか？」
「他に方法はないのですか？」

「他に方法があるとしても？ もうどうにもならないんだ。私は池富城財閥で働いてくれている人々を守らなければならないし、君みたいな子供にはどうしようもないことなのだよ。今日まで紅葉と仲良くしてくれてありがとう」

「どう思いますか？」

を得ようとした。

俺はそんな答えを聞くために質問したんじゃない！

一本当はそう思っているのですか？ なる経営者としては最高でも親としては最低ですね。紅葉と話してきます。紅葉の気持ちも知り

たいですの

俺は会長の部屋を出て、どすどすと歩き紅葉の部屋を目指した。出るときに扉を勢いよく閉めたかもしれないが、それすら覚えていなかつた。

卷之三

「勝手にさせておきなさい。今さら何もできないだろ?」
「旦那様、御をお嬢様はおれせて貰がたのですが?」

会長は平然な表情で爪がくい込むほど拳を握つて言った。

紅葉の部屋の重く大きい扉の前に立つた俺は、まず気持ちを落着けるために大きく深呼吸を一度した。先ほど会長に怒ったテンションのままで紅葉に会つてはいけないと思つたからだ。そして俺は、田の前に立ちはばかる扉に「ンンンン」と三回ノックした。

昨日と変わらない紅葉の声。俺は心の中に溢れる何かに急かされ

て、勢いよく扉を開けた。

「何の用かしら、奏音？」

紅葉は突然現れた俺に驚きもせずに、ティーカップを置きながら言った。そこにはミキとマキいなかつた。

「どうして昨日何も言つてくれなかつたんだよー。」

紅葉の元へ歩み寄つた俺は少しだきな声で言つてしまつたことに後悔した。まだ、先ほどの事を引きずつてゐるらしく。

「言つ必要もないと思いましたので。奏音はまだ授業の時間でしょう？ 早く学園に戻つたらいかがですか？」

「学園には戻らない。俺は今回の紅葉の転校も婚約も許せないから。紅葉だつて今の学園の方がいいだろ？ 親の都合で勝手に転校させられるなんて嫌だろ？ 会長にそつやつて言いに行こうぜ」

さあ、と紅葉を促すが紅葉は一向に動こうとしない。

「私は今回の一連の騒動に納得していますわ。ですので、お父様に講義する気はありません」

「俺は紅葉に転校してほしくないんだよー。」

「貴方はそんな自分のわがままを言いにここまで来たのですか？」

紅葉は細めた冷たい瞳で俺を見つめてくる。

「紅葉も同じ気持ちだと思つたんだ。だから俺は紅葉を助けるためにここまで来たんだよー。」

「激しい勘違いですね。自分の気持ちを他人にまで押し付けようとして。しかし、無駄なことです。先にお父様とお話になつたのでしょうか？ 貴方にはどうすることもできないのは分かつたはずです」

「だから、紅葉が嫌だつてことを伝えれば会長も無理やり転校させたり何てしないと思つたんだよー。」

紅葉と話せば何とかなると思つたから……。

「手がなかつたので私を味方につけようとしたのですね。でも、残念です。私はお父様のお話を納得した上で同意したのですから」「そんなはずはない！」

「もう、無駄なのですからそれくらいにしていただけませんか？」

私を連れ戻すためにここまで来られた行動力には感心しますが、そもそもどうして私をあの学園に連れ戻そうと思ったのですか？ 河原林様との婚約に反対するのですか？」

「どうして……？ そんなこと決まっているだりつ……」「

広く静かな紅葉の部屋に俺の言葉が柔らかく包まれるのを感じた。

「どうして私をあの学園に連れ戻そうと思つたのですか？ 河原林様との婚約に反対するのですか？」

確かに紅葉がどこの学園に行こうが、誰と婚約しようが家庭の事情と言われば俺には関係のない話になつてしまつのかもしれない。でも、それでも俺がここに来た理由は……、

「どうして……？ そんなこと決まつているだりつ……」

俺は一息置いて、深呼吸をする。紅葉も息を呑んでその時を待つている。

「俺は紅葉、お前の事が好きなんだ。だから、紅葉には玲央の所に行つて欲しくないんだ！」

俺は紅葉の透き通つたブラウンの瞳を、瞬きもせずに真直ぐ見つめながら言つた。紅葉は頬を桜の花弁のように染めて、目をそらした。

「か、奏音にそう言つていただけるのは嬉しいのですが、私はもう河原林様との婚約をしてしまつたのです。申し訳ありませんが諦めてください」

先ほどの照れくさそうな表情から悲しそうな表情に変えて言つ紅葉を見て、俺は我慢がならなかつた。

「紅葉が望んで玲央と婚約したのなら俺だつて諦めるぞ。でも、お前は家の為に池富城の為に婚約したんだろ？ 何か他に方法はないのか？」「

「ありませんし、私が河原林様と婚約することが最善なのです。そ

れに、奏音には私よりも良い娘がいるはずですよ」

紅葉はそう言つたが、今の俺には紅葉以外の娘なんて考えられない！

「なら、もし俺が玲央との婚約以上に良い方法を見つけてもらえば、この婚約はやめてもらえるか？」

「そんなことは無理だと思ひますが、奏音が見つけてくることができたなら、もちろんお父様には何とか破棄してもらつように動いてもらいますわよ。でも奏音、無理はなさらないでくださいね？ 河原林様と私が婚約することは前から決まつていたことですので、私も納得していますから」

紅葉が俺の心配をしてくれることが素直に嬉しい。でも、俺にはやらなければいけない時なんだ！

「ああ、紅葉には迷惑は掛けないさ！」

「私はそういうことを言つているのではなくてですね……」

まだ紅葉は何か言つていたが、俺はその言葉を聞かずに紅葉の部屋を飛び出した。トンネルの先に光が見えたような気がした。

紅葉の部屋を勢いよく俺は飛び出しだが、実を言つとまだ紅葉を取り戻す手段なんて考えもつかなかつた。だから俺は紅葉の事に詳しく、俺の見方をしてくれるのであらうミキとマキを頼ることにした。まず俺はミキとマキのいる場所を知らなかつたので、誰かに聞いてみようと歩いていた。するといつこに一人の若い男が立つていた。

「すみません。紅葉といつも一緒にいるミキとマキの居場所を知りませんか？」

ラフな格好をしていてこここの使用者といった様子でなかつたその男だが、俺は勤務時間外か何かだらうと気にせずに話しかけた。

「ああ、知つているとも。どうか、紅葉を助ける手段をあの二人に相談に行くことにしたのか。まあ、いい考えなんぢやないか？」

「えつ！」

この人は俺が今からしようとしていることを知つていたし、紅葉

のことを呼び捨てにしている。明らかに使用人ではなかつた。

「申し遅れたね。私の名前は池富城鳴海、紅葉の兄をしているものだ。それにしても奏音君とか言つたかな？ 君は果敢だね。紅葉の為にここまで行動してしまつとは。紅葉からしたら君も、玲央君も代わらないつていうのにねえ」

紅葉の兄と名乗るこの男は、口元を釣り上げて静かに笑つた。

「俺と玲央が代わらないつていうのはどういうことだ！ あいつは家を守るために嫌々玲央と婚約したんじゃないのか？」

「そうひ、だから代わらないつて言つたんだよ」

「意味が分からぬ。どういうことなんだよ…」

次第に興奮する俺に対し、この男は俺の神経を業と逆なでするよう話していく。

「じゃあ、質問しよう。君は庶民と財閥の御令嬢が偶然出会い仲良くなつていくなどといったことが、この世界で本當にあると思うのかい？ そして、その二人の関係を御令嬢の親が認めるなんてことが本当にあると思うか？」

「何が言いたい？」

「つまり、君と紅葉が出会い、ここまで来ることは仕組まれていたことさ！」

た、確かに今まで不自然なことは何度もあつたが、仕組まれていたと言うには決定的なことが足らない。

「もしそうだとしても、紅葉側のメリットがないじゃないか！ 会長の道楽で俺たちを仲良くさせたとでも言つのかよ…」

「そうだな。では、ここで一つ目の質問をしよう。君は母方の親戚に会つたことがあるかな？ 母方の名字を聞いたことがあるかな？」確かに今まで疑問に思つて母親に聞いたたら、はぐらかされたな。

私はお父さんと駆け落ちしたから、家のことは関係ないと言つてたつけ。

「ないけど……、関係ないだろ？！ 僕は悠木奏音なんだから…」

「残念ながら、そういうわけにはいかないんだよ。ではここで一つ

昔話をしよう。昔、ある由緒正しい名家に女の子が生まれた。そして、その子には歳が両手で数えられなくなる前には、もう婚約者が決まっていたんだ。しかし、その娘は屋敷で働いていた同じくらいの歳の男と恋に落ちた。すると、その二人は一緒になるために駆け落ちをした。そんなことを彼女の親は許すはずがなくて彼女を血眼になつて探した。でも、見つけ出した時には彼女は男の子を身ごもつていたんだ。そうなるとその家の者たちは、後継ぎになるその男の子だけを回収すればよかつたから、産んだらすぐに引き渡すように言ったんだ。でも、その夫婦はこの子を連れていかないでくれと泣いて頼む。流石に娘から孫を無理やり引き離すことが悪いと思ったのか、彼女の親たちは条件を出したんだ。今はお前たちが育てていいが、その子が大人になつたら家を継がせるようにとね。その話を知った私たち池富城は紅葉を君に近付けたんだよ、花山院奏音君！」

「……、花山院……？」

「花山院の名くらい君みたいに庶民として育ってきたものでも知っているだろう？ 花山院、池富城、河原林と言えばこの国の三大財閥だ。だから紅葉は河原林の御曹司である玲央君の所に行つても、花山院の御曹司である君の所に行つても代わらないと言つたのさ。結局は紅葉は池富城の為に使われてしまうんだよ！」

「そんな馬鹿な。俺が花山院の御曹司？ そんなはずはない！ だつて俺は一般家庭で普通に育てられたんだぞ！」

自分が御曹司などということは到底理解できなかつたし、何より紅葉が財産目当てで俺に近付いたとは信じたくなかった。

「だから、お前が庶民として育てられた理由は話してやつただろう？ それでも信じられないのだったら親にでも聞いてみるんだな」「嘘だ。そんなの嘘に決まってる！」

俺は真相を確かめに全力で池富城邸を後にした。

俺が家に着いた時には辺りはすっかり暗くなっていた。玄関を照らす外灯が俺の影を明確にする。玄関の扉は鍵もかけられておらず、いつも通り俺を迎えてくれる。靴を壁にぶつけるかのように勢いよく脱ぎ捨てる、俺は一直線に台所に向かつた。そこには母さんがいつも通り夕食の支度をしている姿があった。

「どうしたんだい、そんなに急いで？ 夕飯ならまだできてないよ。私の代わりに夕飯の支度をしてくれるのかい？」

「そうじゃないんだ。俺、母さんに聞きたいことがあって……」

そう言うと、母は分かりやすくがっかりした様な仕草をする。

「なんだい？ 私も暇じゃないんだ、早く言いな！」

「あのれ……、母さんつて花山院財閥の令嬢だつたつて本当？」「なつ……」

母さんは今までに見たことがないほど驚いて、持っていたお玉が手からするりと落ちた。

「あんたつ、それをどこで知つたんだい！ 他の人には話してないだろうね！」「池富城の御曹司に聞かされたんだよ！ 母さん、本当なのかよ！ 俺は花山院奏音なのかよ！」

「池富城があんたに接触していたの？ うかつだつたわ、私があの学園への進学止めていれば……」

「嘘だろ！ 嘘だと言つてくれよ！ なあ、母さん！」

俺だつてこのとき母さんが花山院の出身だという事はもう理解していた。しかし、それは紅葉が俺の家田当代で俺に近付いてきたことを意味する。だから、どうしても認めるわけにはいかなかつた。

「どうやらお迎えが来たようだね。奏音、今まで隠していくごめんなさい。でも、本当の事を知つてしまつたあんたはこれから花山院

だろう。

「どうやらお迎えが来たようだね。奏音、今まで隠していくごめんなさい。でも、本当の事を知つてしまつたあんたはこれから花山院

の御曹司として生きていかなければならぬ。あなたがもし自分の正体に気付いたら、花山院の家に引き取られる約束だつたから…。でも、あなたはどうしたい？ こんな話は親たちが勝手に決めたことであなたには受け入れたくないことだらう？ あなたが望むなら私たちが全力で守るよ」

「俺は花山院なんて行きたくないよ。どうしたらい？」

「出でこないなら勝手に上がりますよ…」

玄関の方からは野太い男の声が聞こえ、足音が近づいてきた。
「とりあえず、裏口から逃げなさい！ そうしたら何とかして父ちゃんに連絡を取りなさい！ さあ、早く行きなさい。私がここでできるだけ喰いとめるから

「わかった。行つてくる母さん」

裏口から飛び出した俺は玄関に何台もの高級車が止まっているのが目にした。これでは正面から抜けるのは無理だ。裏の家の庭を通つて逃げさせてもらおう。そう考え、ブロック塀を飛び越える俺。奴らはまだ母さんが喰いとめているらしい。俺の方にはやつて来なかつた。

通りに出た俺はさてこれからどうしたらいだらう？ 母さんは父さんに連絡を取れつて言つてたつて。携帯電話は今持つていないから、取り合えず電話がある場所に行くべきだらう。でも、周りに公衆電話がある場所なんて知らない。知つているのは学園の近くまで行かないとなり。ならどうすべきか…。知らない民家に駆け込んで貸してもらおうか？ いや、そんなこと今日のこの国では怪しまれて断られるだらう。でも、知つている近所の家だと奴らに見つかりそうだ。もつ、学園まで行くしかないのか？ いや、あるじやないか！ 近すぎず、遠すぎず、俺に電話を貸してくれる家が！
「そうだ、瑞希の家に行けばいいんだ！」

一直線に瑞希の家を目指す俺。瑞希の家は走つて三三分くらいの所にある。ここなら問題がないはずだ。

「なつ…」

俺はとっさに電信柱の影に隠れた。何故かといえば、奴らの車が前の道を横切つたからだ。奴ら、俺が逃げたことをもう知ったのか？ 次の角を曲がれば瑞希の家だ。家中に入つてしまえばもう奴らも見つけられないだろう。

俺は角に隠れながら奴らの車がないか様子をうかがつた。よし！見当たらないぞ。安全を確認した俺は瑞希の家に向かつて全力でダッシュした。もう見えてきたぞ！ いいぞ、たどりついた。そしてすぐにチャイムを鳴らす。

「どちら様ですか？」

瑞希の声が聞こえた。

「俺だ、奏音だ。少し訳があつて今追われてるんだ！ 中に入れてくれないか！」

「わ、分かつたよ。今行くから待つてつて！」

瑞希の戸惑う声が聞こえる。それはそうだろう、突然追われてるから匿つてくれなんて言つ奴が現れたんだから。俺は苦笑いしながら扉が開くのを待つた。

「奏音様、残念ながら、この家には私たちが張り込んでいました。さあ車に乗つてください」

「やめろつ！」

後ろから腕を掴まれ、俺は無理やりここにいたりの車に押し込まれた。こいつらは素早く俺を車に押し込むと、直ぐに車を出した。そう、扉が開くよりも早く……。

「奏音ちゃん？ えつと、どこに行つたの？」

扉を開いた瑞希に俺は顔を見せることはできなかつた。

車で無理やり連れて行かれた俺は不謹慎だと思いつつも、懐かしい気持ちでいっぱいだつた。ここ最近はこうやって強引に連れ回されることがな幾度となくあつたから。そんなことを繰り返していくうちに俺は紅葉の事が好きになり、この前は告白までしてしまつた。以前の俺ならば到底考えられないことだらう。環境つて人を変える

なんだなあと思つた。

こんなことをしみじみ感じることができたのは、俺を車に押し込んだ奴らが車の中では大変無礼なことをいたしましたと謝つてきて、飲み物を準備してくれるなどVIP対応をしてくれたからだ。今までのなかで一番いい対応ではないだろ？

しかし、状況を忘れてはならない。俺は無理やり連れていかれて、これからは家に返してもらえないといつのだから何とかしなくてはならない。このままでは紅葉を救うどころか、会えなくなつてしまふかも知れないのだから！

そうしていのちに、目の前に鳥居くらいの大きさの門が現れた。その門がギギギギと音を出しながら開き、巨大な和風の屋敷と屋敷までの間を埋め尽くす日本庭園が目に入ってきた。

屋敷の前に車を止めると、俺は中に通された。暫く廊下を歩かれて着いた部屋は百畳くらいの和室だつた。そこには二メートルくらい開けて、二つの座布団が向かい合わせに並べてある。俺はその一方に座られ、待つよつて言つて俺をここまで連れてきた奴は部屋を出でていった。

少しだと障子が開かれて一人の腰の折れた爺さんが入ってきて、目の前の座布団に座つた。爺さんは隣に置いてある肘掛けに体重を掛け、扇子を開いて言った。

「お主、奏音とかいつたかのう。わしは花山院家現当主、花山院源重郎じや。一応、お主の祖父に当たるかのう。聞いていると思うが、お主には花山院家の次期当主になつてもう。話は以上じや」「立ち去ろうとする爺さん。

「ちよつと待つてくれ。俺は当主何かになる気はないし、早く帰つてやらないといけないことがあるんだ！」

俺の発言を訝しく思つたようだ、

「お主の都合など聞いておらぬ。わしはお主の親と約束をしたのじや。早く連れて行け」「と、家来に告げて出でていった。

「おい、待てって！」

「さあ、奏音様。お部屋に案内します」

強引に爺さんと反対の方向に連れていかれる。

「やめろっ！俺はまだ話があるんだよ！」

爺さんの家来たちは俺の言葉に聞く耳を持たずに俺を引っ張つていった。

俺の連れていかれた部屋はこれから俺の部屋になるそうだ。そこは何十畳もある和室で高価な壷や、掛け軸などもあり俺の部屋にしていいのかと不思議に思うくらいの部屋だ。しかし、この部屋は俺を閉じ込めておくのが目的であり、部屋の外には何人もの見張りが付いている。トイレすら一人で行かしてもらえない。

俺はこんなところで軟禁されているわけにはいかない。早く紅葉の問題を何とかしないと玲央の所に嫁いでしまう。俺はどうしてもそんな姿を見たくないから、何とかして阻止しなければならない。そのためにはまず家に帰らなければならないのだが、爺さんがそれを許してはくれない。

「はあ、俺はどうすればいいんだ？ 結局、紅葉は俺の財産田当で俺に近付いてきたんだもんな。俺は紅葉の事が確かに好きだが、紅葉は俺の事を好きなわけではなかつたんだ。俺は玲央の所に行つて欲しくないと言つているけど、紅葉からしたら俺も玲央も同じなんだろうか？」

ぶつぶつとこんなことを言つている俺は、見張り達からしたらさぞかし不気味だつただろう。ひそひそと外で話しているのが聞こえてくる。そりや、こんな急激に環境を変えられたら誰だつて慣れるまでは不安定になるかもしね。そう思うなら俺を元の家に帰してくれよ！

俺は近くにあつた壷を持ち上げて、力の限り壁に叩きつけた。

パリイーン！

壷の割れる音が部屋中に響き渡つた。

「奏音様どうされましたか？」

音を聞いて、外で見張っていた奴らが一気に中に押し寄せてきた。

「はあっ、はあっ、はあっ。うるせーーー。はあっ、出でいけ！ お

前たちには関係ない！」

俺は今までぶつけたことができなかつた怒りをこいつらにあたり散らした。

「すみません。しかし、このままでは危ないです。お掃除だけさせてください。今、やらせますので！」

俺はこいつらが慌てるのを見て、逆に落ち着いていた。見張りの体制が崩れている今なら、逃げ出しができるのではないだろうか？ 俺は全力で外に走つた。

「奏音様！ 何をつ！ 奏音様が逃げられたぞ！ 捕まえろ！」

俺の見張りの中で一番偉いと思われる奴が叫んでいた。その声によつてかなりの人が集まつてきた。俺は見つからないように逃げながら外を目指した。

入口の門の所まで走つてきたが流石に門は閉じられていた。靴を履かずいで走つてきたので、白い靴下が茶色と赤で染まつていて。かなり痛むが、今はそんなことを気にしている場合ではない。俺は見張りの少ない所を見つけ塙によじ登り脱出を目指した。

しかし、こんな屋敷では警備体制が完璧で直ぐに見つかってしまう。「ここにいらつしゃつたぞ！」

人がどんどん集まつてきたが何とか塙の反対側に降りた。よし、何とか脱出できた。問題はこれからどうやって逃げるかだ。このまま歩いていたら、追手に見つかってしまうのは確実だろう。

「おい、奏音！ こっちだ」

声のする方を見るとそこにはマキとミキがいた。

「どうしてこんなところに？」

「それは後で話す。とりあえず車に乗れ！」

こいつらが準備したであらう車に乗つて何とか花山院の屋敷を後にした。

「申し訳ありません。奏音様に逃げられてしましました」

「まあよい。奴は必ず戻つてくるからな」

その時の爺さんの表情に家来たちは薄氷を踏む思いだった。

学園ではいつも通りの時が流れている。池富城さんの噂を話す人ももう少なくなってきた。奏音ちゃんは昨日学園を飛び出して以来何をしているのか分からない。夕方私の家に来たけれど、玄関のドアを開けたら奏音ちゃんの姿はなかつた。私は嫌な予感がしたので、奏音ちゃんの家に行つてみたけれど、いつもどつしりと構えている奏音ちゃんのお母さんが、寂しそうに奏音はもう帰つて来ないのよと話してくれた。どうして帰つて来ないのか、この場面に出くわしてそれを聞かないのは当事者が全く興味がない人だけだらう。私も聞かずにはいられなかつた。

私が尋ねると奏音ちゃんのお母さんは全部は教えてくれなかつたものの、大まかな内容は教えてくれた。その話によれば、奏音ちゃんはお爺さんに引き取られて、もうこちりには帰つて来ないということだつた。

「それは奏音ちゃんが望んだんですか？」

今、奏音ちゃんは池富城さんの事で頭がいっぱいのはずなのにお爺さんに引き取られるなんてそんなことを望むだらうか？

「あの子には何も知らせてなかつたのだけれど、私達夫婦と私の父との間で交わした約束だつたのよ。だからあの子からしたら、急に無理やり連れていかれたという感じで望むなんてことは全くないでしょうね」

「何でそんな勝手な約束をしたのですか？　奏音ちゃんの気持ちを考えて上げてください！」

もし、私が同じ状況になつたら嫌だ。何故、本人に話もせずにそんな大切な約束をしてしまつたのだろう？

「悪いことをしたと思っているよ。でも、仕方がなかつたんだい。私の父は頭が固くて自分の言う通りにならないと強引に何でもしてしまつ人だからね。今まであの子がここにいれただけでも譲歩して

くれてたんだよ」

もう、抵抗する」と諦めたかのような発言。お爺さんと今までに何かがあったのだろうか？

「奏音ちゃんは学園には来るんですね？」

「多分、転校すると思うよ。あの人は今の奏音を放し飼いにする気なんていだらうか？」

奏音ちゃんのお母さんの話を聞く限りだと、お爺さんにとって奏音ちゃんはとても大切なものらしい。でも、それが孫としてではなにことは理解できる。

「……今頃、奏音ちゃんはどこの何してるんだりう？」

「どうしたのや、瑞希ちゃん？」

私の席の前には周君が立っていた。周君は奏音ちゃんの親友だけれど、私と一人で話したことはほとんどない。その周君が私に話しかけてきたということは、奏音ちゃん絡みのことではないだらうか？「どうしたって何が？」

ぱーっとしていた私には周君の質問の意味が分からなかつた。

「さつきから心ここにあらずつて感じで田の焦点も定まつてないしおつぶつ何か言つてるしでどうしたんだるうと思つたんだよ。いつも役は奏音の方がいいだらうけどあいついしないしな」

私はその奏音ちゃんのことで悩んでいると周君には話した方がいいのだろうか？

「俺さ今まで奏音とつるんで来てすゞく楽しかつたし、よかつたと思つて。何か最近は俺の相手どころじゃなくなつて疎遠になつたかもしけないが俺は時々話すだけでいい友達だと実感できた。だから、昨日もそんないつも通りの感じで話してましたんだけれど、あいつ急に怒り出して帰るから俺が怒らせたんじゃないかと思つて帰りに家に謝りに行つたんだよ」

「えつ！」

周君も昨日奏音ちゃんの家に行つたの？ ジやあ、周君も知つてゐてこと？

「俺が奏音の家に行つたときにあいつの母ちゃんから聞いたんだけれど、あいつ転校するかもしれないんだってよ」

「そちらしいね……」

「知つてたのかよ。それで俺はあいつに転校なんてして欲しくない。あいつはが学園でのいい話し相手だからな」

「私だって転校してほしくなんかないよ。私にとつて奏音ちゃんは大切な人だから……。でも、私には何もできそうことはないみたい」

「そうだな、今はあいつが頑張る時だよ」

「そう言うと周君は離れていった。」

奏音ちゃん、私たち力にはなれないけれど応援してるから……。

俺はミキとマキに送つてもらって家まで帰つてこれた。家に帰つて母さんが俺を見て発した第一声は「あんた、何でここにいるの?」だった。あれだけの壮絶で感極まる別れだったのに、戻つてきたらいつも通りつてどうこうことですか?

「そういえば、瑞希ちゃんと周君が来たよ。心配してただらうから連絡してあげなさいね」

それだけ言つと母さんは台所に下がつて行つた。

「何なんだよ。拍子抜けしたぜ」

「それは私が帰つてくるつて教えたからな」

ミキが自慢げに自分の胸を張る。お前、そうこうことは俺に言つとこりうよ。

「そういえば、何でお前らあんなとこにいたんだ? そつまははぐらかされたけど、今なら教えてくれてもいいだろ?」

ミキとマキは一人で顔を見合わせて真剣な顔つきになつた。

「それはだな、奏音がお嬢様の為に駆け回つていると知つたから、何か力になれないかと思つていろいろ調べてたんだ。そうしたら、お前が連れていかれたことを知つて助けに行こうと參上したところに、お前が出てきたつてかんじだな」

助けに参上するつて俺を連ねだす方法などあつたのだろうか?

「話は変わるが、これでお嬢様を河原林様から救う方法ができたな」「何か見つかつたのか?」

俺は自分の家のことで振り回されてしまつてたが、今重要なのは紅葉を守ること……。俺にはその方法は思い浮かばなかつたが、ミキとマキに何か案があるならそれは願つてもないことだ!

「何を言つてるんだよ。お前は花山院の御曹司だつたわけだらう? なら、お前がお嬢様に婚約を申し込んで河原林様との婚約を破棄させればいいだけの話じやないか!」

ミキとマキはこれで完璧だと頷いている。

「それは俺にあの家に戻れってことだよな？ それはできる限り避けたいのだけれど、他に方法はないのか？」

「他に何もなかつたから奏音は悩んでいたのではないか？」

「もつともなことを言われ俺は何も言い返せなかつた。でも俺が花山院の御曹司として婚約を申し込むといつことは、何の解決にもなつていいのではないだろうか？ 俺は確かに紅葉のことが好きだが、玲央の様に紅葉を無理やり手に入れようとは思わない。もし、俺が婚約を申し込んだとしても紅葉からしたら結婚させられるかもしれない相手が増えただけで何も変わつていいない。むしろ、面倒事が増えるだけではないだろうか？」

「お前たちはそれでいいのかよ？ 俺が婚約を申し込んで、結局は紅葉が無理やり結婚させられることには変わらないんだぞ？」

「何度も言つが俺は紅葉のことが好きだ。しかし紅葉は俺の財産目当てで俺に近付けさせられたのだ。この方法では紅葉の為にはなつていない！」

「前にも言つたように私たちお前とお嬢様との仲を認めてるんだ。今更反対などしないぞ」

俺はミキとマキが楽観的過ぎると思わずじはいられなかつた。俺は紅葉のことを一番に考えていると想つし、ミキとマキも一番に考えていた。でも、ここにきてミキ、マキと考えがこうもずれていることを考えると本当に紅葉のことを考えているのかと疑つてしまつ。

「お前たちはどうして紅葉が望んでないことをそんなに認める」とができるんだよ！」

「私にはどうして奏音が渋つているのか理解できないね」

ミキも隣で頷いている。

「お前はお嬢様のことが好きなのだろう？ お嬢様を河原林様から救いたいのだろう？ ならなぜ、方法が見つかったのに行動しないのだ？」

「俺は玲央の様に嫌々婚約させるなんて嫌なんだよー。」

「ミキとマキが目を白黒させてる。

「だつてそうだろう？ 紅葉は最初から俺が花山院の御曹司だから近付いてさせられたんだぜ。俺と婚約することは嫌と思っていたのに決まつてるじゃないか！」

「えつと、本当にそういう思つてはいるのか？ 確かに婚約は話が早すぎり氣もするが、奏音のことは嫌がつてないと思つぞ？ 今までお嬢様は奏音と一緒にいるとあんなにも楽しそうにしていたじゃないか！」

「そうは言つても、紅葉は普段から笑顔を振りまくことは慣れている。俺といた時に楽しそうにしていたからといつても、それが本心からなのかどうかはわからない。

「奏音は気にする」となどないわ。まあ、お嬢様のところに行こう！」

「ミキとマキは俺を紅葉のところに連れて行こうと急かす。

「でも……」「お嬢様に聞いたら早いじゃないか！ 行くぞ！」

「俺はミキとマキに連れられて行くことになつたが、身の細る思いだった。

ミキとマキに連れられて池宮城邸にやつてきた。連日訪れている俺を警備員や家臣たちは横目で見ていく。ミキとマキの先導で屋敷の中を歩き、目の前に紅葉の部屋の扉が現れた。この先には紅葉がいる。俺は紅葉に尋ねるのが怖かつた。もし、今までの紅葉の態度が全て演技だつたら……。そうと、紅葉が俺のことを好きになつてゐるなどそんな都合がいいことはない。ファーストコンタクトは最悪だつたし、紅葉にとつて俺は親の言つことを聞いて近付いた人間だ。好きになる要素などどこにもないじゃないか！

「奏音、何立つたまま固まつてんだよ！」

田の前の扉を開こうとしない俺に俾れを切らしたのか、ミキが俺

の背中を勢いよく押した。

俺は突然のことだつたのでバランスを崩し、扉を開き紅葉の部屋の中に倒れ込んだ。

「誰ですか！」

突然部屋に入ってきた俺に神経をとがらせてこすらに視線を送つてきたが、それが俺だとわかると緊張を解いて近付いてきた。

「何をやつているのですか？ そこには躊躇うつなものなどないはずですか？」

顔を上げるとそこには紅葉がシャンパンカラーの透き通つた瞳を俺に据えている。ああ、どうしてこんなにも紅葉に見つめられるだけで心がざわめくのだろう。紅葉にただ振り回されていた頃には感じなかつた感覚だ。

「紅葉、君を玲央に渡さないための方法が見つかったんだ。聞いてくれないかな？」

俺が立ちあがると、紅葉は返事代わりに部屋の中に案内してくれる。紅葉は俺を腰まで沈むくらいクッションの効いたソファに座るように促し、自身も俺の前に座つた。すると直ぐに紅茶が運ばれてきて前のテーブルに置かれた。紅茶を持つてきたメイドが部屋から出るのを確認してから俺は紅葉に話しだした。

「昨日、ここに来て玲央との婚約を解消する方法を見つけてくるつて言つたよな。とても昨日のこととは思えないよ。実を言つと、方法なんてあの時何も考えてなかつたんだ。でもさ、あれからいろいろあつてその方法が見つかったんだ」

紅葉は見つかるとは思つていなかつたのだろう。本当ですかと俺に尋ねる。少し表情が柔らかくなつたかもしれない。

「でも、この方法は紅葉からしたら何の解決にもなつていないと思つ……」

「どうこつことですか？」

「紅葉は知つてはいると思うが……、俺は花山院の跡取りにさせられるらしいんだ。だから、俺と婚約して玲央との婚約を破棄すればい

いんだ。でも、紅葉からしたら相手が玲央から俺に代わるだけで何も変わらないよな」

俺の言葉を聞いた紅葉はあたふたと慌てだした。

「奏音が花山院の跡取り？ 本当ですか？ それに奏音と婚約！

そんな、私と婚約などして奏音はよろしいのですか？」

紅葉は俺が花山院の跡取りといふことを知らなかつたらしい。

「じゃあ、花山院の為に俺に近付いたんじゃないのか？」

「ええ、奏音とは偶然が重なつて会うことが多いくて御近付になれたと思うのですけれど」

「偶然ね……」

「それより、奏音は私と婚約をしてくださるのですか？」

「俺は昨日も言つた通り紅葉のことが好きだ。だから、もし紅葉がいいと言つてくれるなら俺は紅葉と付き合つていきたい。どうかな？」

？

紅葉は恥じらいながら「クンと頷く。えつと、紅葉が〇クしてくれたんだよな？」

「本当にいいのか？ 夢じゃないよな？ ありがとう、紅葉！」

俺は嬉しさのあまり紅葉をぎゅっと抱きしめた。女の子ってこんなに柔らかいのか。いい匂いもするし……。

「かつ、奏音。少し痛いです」

顔を真つ赤にしている紅葉をもつと抱きしめたくなるのを何とか抑えて、紅葉から離れた。

「ごめん。あまりにも嬉しくてさ」

「私も嬉しかつたです」

紅葉は俺の顔をもう見ていられないといった様子で俯いている。

俺は夢見心地で頬が緩むのを抑えて、もう一度紅葉を抱きしめた。

俺は紅葉とのことを会長に話に行つた。会長は終始頷くだけだった。俺が話し終わると会長は立ち上がり一言だけ言つた。

「紅葉、お前はそれでいいのかい？」

会長が紅葉を見つめる。俺も紅葉に視線を合わせると、紅葉も俺の方を見て微笑を浮かべたあと、顔を引き締め会長を見る。

「はい、お父様。私はもう決めました。これからが大変だと思いま

すが、私は奏音と一人で乗り越えていきたいのです」

「そうか……。では、私もできる限りのことはしよう。今更かもしれないが、紅葉の気持ちも考えずに婚約者を決めてしまって悪かつた」

深々と頭を下げる会長を前に娘である紅葉は慌ててている。普段、誰にも頭など下げることがないであろう池宮城財閥の会長が自らの娘に頭を下げているのだ。会長の心からの行動なのだと、この気持ちが覗えた。

「お父様、やめてください。私はお父様が謝られる理由が分かりませんわ。なぜなら私は池宮城の人間であり、池宮城財閥の為に私がすべきことだつたのですから」

俺は紅葉が今まで本当にそう思つてきたことを知つていて。それは池宮城の教育の賜物であり、支配の結果だ。会長からしたら紅葉を複雑な気持ちで見守ることしか出来なかつたのだろう。取りだしたハンカチで目尻に溜まつた涙を拭きとつている。

「大丈夫ですよ。俺が紅葉を幸せにしますから！」

「それは少し気に喰わないんだが……」

俺は会長の最後の言葉に乾いた笑いしか出なかつた。

会長には納得してもらえたが、一番の問題となるのは何と言つても婚約相手の玲央だ。話をつけるために会長、紅葉、俺の三人で河原林の屋敷に乗り込むことにした。

池宮城の会長が自分で來たといつともあって、アポイントがなくとも河原林の屋敷に入ることができた。

通された部屋には何十人も座れるだろう長机があり、その先に玲央と髪を生やした男性の一人が座つていて。玲央の隣に座つてているのは、多分玲央の父であり、河原林財閥の会長なのだろう。どつし

りと椅子に腰かけた姿がとても様になっている。

俺たち三人は玲央達と向かい合つように座られた。お互いに長机の短辺側に座つてるので、間の距離は十メートル以上あるだろう。

「今日はどういった要件でお見えになつたのですかな？」

玲央の父親の声はそれほど大きなものではなかつたが、この部屋は音響設備がしつかりしているのか、これほどの距離があるのにも関わらずはつきりと聞くことができた。もっとも、そうでなければこの様な態勢で話をしようなどとはしないだろうが。

「この度アポイントも取らずにこちらへ訪問したのは、以前からしていた玲央君と紅葉の婚約を破棄させていただくことをお願いするためです」

会長が話し始めてくれたその言葉を聞き、玲央が顔をしかめる。

「ほう、それはまた一方的なお話ですね。私たちが何か気に障ることでもいたしましたか？」

玲央とは対照的に父親は眉一つ動かさずに対応する。

「その様なことはまつたくもつてございません。この娘に結婚したい相手ができたのです。私としましてもこの娘の意思を尊重して上げたい……」

「そちらの少年がそのお相手ですか？ 私としては構いませんが」

玲央の父親がそう言いかけると玲央が少し焦つたような声を上げ父親の言葉を遮つた。

「玲央、落ち着きなさい。悪い様にはしないから」

玲央の父親は玲央を諭して落ち着かせた後、顔をこちらに向け再び話しだした。

「失礼。もし、玲央との婚約を破棄してその少年と結婚することになつたとして、貴方の財閥はどうするのですか？ 玲央との婚約の話だつて、池宮城に我々河原林が援助を行うために関係を密接にしようという目的の為のものでしょう？ 玲央との婚約を破棄したら、もちろん援助など行いませんよ？」

ここにきて玲央の父親は初めて表情を変え、不敵な笑みを浮かべた。玲央も安心しきつた顔を見せている。

「申し訳ありませんが、そちらの少年に池宮城を立ち直らせる様な力がある様には見えませんが？」

「池宮城が傾いているのは、元々私の責任です。娘達に背負わせるのではなく、私の力で立ち直らせて見せます」

「それができないと思つたから、私達に助けを求めてきたのではなかつたのですか？ そんなに池宮城を潰したいのなら私は何も言いませんけれどね。しかし、そんなに一方的に婚約破棄をなさるのでしたら慰謝料を請求できますよね？ さてさて、いくぐりぐらうにいたしましたようか？」

玲央達は池宮城が経済的に厳しいことを知つていて、慰謝料を請求してくる。こういつたものの金額は経済力によつて変わつてくるのもだから、慰謝料もとんでもない金額になることを想像することは容易い。

「今ならまだなかつたことにして構いませんよ？ 玲央は貴方の娘さんと結婚を望んでいるようですね」

「結構です。私は娘達の好きにさせることにしましたので」

「私は親切で言つているのですよ？」

玲央の父親は会長が思つた通りに動かないことに苛立ちを覚え始めているようだ。

「心使いはありがたいのですが、もう決めたことですから」

会長の言葉に玲央の父親の中で何かが切れたのだろうか？

「そうですか、なら好きにしなさい。しかし、覚えていなさい。後

から後悔してももう遅いですからね」

玲央が父親は顔を赤々とさせ、対照的に玲央は父親の言葉に顔を青ざめる。玲央にしたら父親が悪い様にはしないと言つたから大人しく聞いていたのに、父親がこう言つてしまつた以上紅葉と結婚することは絶望的だ。玲央は勝手な奴だったが、紅葉のことを好いていたことは本当のことだ。玲央に悪い気もしてしまつが、しか

し俺だつて紅葉が好きだし、譲る気など毛頭ない。

会長が失礼しますとだけ言つて立ちあがり部屋を出ようとする。

俺と紅葉はそれに置いていかれないように後を追つた。

外に出ると空は青々と晴れ渡つていたが、西方には暗雲を確認することができた。

また一步俺は紅葉に近付くことができたが、まだ解決しなければならない問題は多い。その一つに俺が飛び出してきた花山院との関係回復がある。会長は自身で池宮城を立て直すと言つていたが、流石に難しいだろう。元々、河原林の代わりに花山院が支援するようにするということで紅葉と玲央の婚約を取りやめにしもらつてのだ。会長は約束を果してくれたのだから、次に誠意を示すのは当然俺だらう。

紅葉達に車で送つてもらい花山院の屋敷の前にやつてきた。紅葉は俺のことを心配してくれて、私も一緒に行きますと言つてくれたが、それは俺の問題である。それにこの場で紅葉を連れて行つて、この人と結婚したいので援助してくださいなどと言つてもうまくいかないだらう。俺は紅葉に感謝の言葉を述べて、車を出してもらつた。紅葉を乗せた車が見えなくなるのを確認した後、屋敷の門と向き合つた。すると、中から監視カメラか何かで俺を見ていたのだろうか？ 大型のトラックで再悠々と通ることができる大きな門が野太いうなりを上げてゆっくりと開く。次第に広がつて行く俺の視界。再び見る花山院の屋敷は、その一つ一つに経てきた歴史が感じられ、どつしりとした屋敷を包む空気に押しつぶさせそうになる。

「奏音様、お帰りなさいませ」

そんな声がどこからか聞こえ、辺りを見回していると自分の正面に俺とそんなに歳の離れていないだらう和服の女性が深々と頭を下げて立つていた。俺は目を疑つた。なぜなら彼女が立つてえた方向は、俺が声を聞く前まで見ていた方向であり、まるでどこから現れたのか見当もつかなかつたからだ。

顔を上げた彼女は無機質な表情をして、心の奥深くまで見透かされそうな鋭い瞳で俺を見つめてくる。

「御館様に申しつけられてお迎えに参りました。御館様が待つてあります。」*じぢらへびづわ*「

彼女は体を反転させるとそのまま歩いて行ってしまう。俺はその後ろ姿を何も考えられずに見つめていると、彼女に促されたので慌ててついていった。

通されたのは前に爺さんと話をした部屋だった。前と違っていたのはそこには既に爺さんが煙管を蒸かして待っていたことだ。

「お主が戻つてくることは分かっていた。私の為に花山院の跡取りになることにしたのだろう？ そういえば、この前お主が出て行つたときに割つた壺だがあれば一億円もするものだつたのだぞ？ それを粉々にしてくれたからな。当分はお主に金は与えないからな」

右手に持つた煙管を灰皿に打ちつけながら、はつはつはと豪快に笑つてゐる。その様子を見るとこれは冗談のつもりで言つたのだろう。爺さんにとっては思惑通りに戻つてきて嬉しいのかもしない。「爺さん、実は頼みがあつて戻つてきたんだ。今、池宮城財閥が傾いているのを助けたいんだ」

「何故お主がそんなことをする必要がある？ 他の財閥のことなど知つたことか。お主もそんなことを気にするな」

爺さんはつまらないことを言い出すなと付け加えてくる。

「どうしても何とかしたいんだ！ 援助をしてくれないのなら、俺は爺さんの後は繼がない」

「ふん、お主がわしに交渉するのか？ 笑わせてくれる。お主はおとなしくわしの言つことを聞いていればいいのじや」

「じゃあ、どうしたら池宮城を助けてくれるんだよ」

「ここで引いてしまつたならば、紅葉は結局玲央の元へ嫁ぐことになつてしまつただろう。行動を起こしてた以上、もう後には引けない！」

「そうだな……、では池宮城の娘との関係を断つてもらおうか。もう連絡を取り合わずにわしの言つことを聞いて後を継ぐというのな

ら考えてやらないこともない」

「なつ！」

「わしがお主達のことを承知していないとでも思つていたのか？
わしを誰だと思つてゐるのじゃ？ わしはわしの直系であるお主に
この花山院を継いでもらいたいと思つてはゐる。じゃが、お主がダ
メだったときの為に既に跡取り候補は別に手配してあるのじゃ。わ
しの言つことを聞けないとここのならば今すぐこの花山院から出て
いくがよい」

勝手に連れてきておいで、今度は出で行けとここの。俺のことなど
自分の目的を達成するための一つの駒くじにしか思つていのないの
だう。そんな爺さんの下で生きてこくことなど、俺には選択でき
なかつた。

「なら、俺は爺さんの後は継がない。帰らせてもらひます」

「勝手にせい」

爺さんは煙を俺の顔に吹きかけると俺よりも早く部屋を出でていつ
た。

俺は爺さんとの話し合ひがつましいかなかつたことを報告して池
宮城邸を訪れた。俺は紅葉と一緒になるために行動をしたが結局だ
めだつた。追い詰められた俺の頭の中には両親の顔が浮かんだ。
そういうえば、俺の両親は結婚するために駆け落ちをしたのだった
な。今なら親達の気持ちがよく理解できる。

「紅葉、悪い。爺さんを説得できなかつた。爺さんときたら紅葉と
もう会わなかつたなら、池宮城を助けてやるなんて言つんだぜ？」
俺には紅葉がいないとだめだつていうのに

「そうですか……、それは残念でした……わ

紅葉の今にも消えてしまいそうな小さな声に俺は自分が大きな過
ちを犯してしまつたことを思い知つた。

俺は自分が頑張ったということを紅葉に認めてもらい、慰めてもらいたかったのかもしれない。一番不安なのは、玲央との婚約を破棄してしまったことで池富城が窮地に追い込まれた紅葉だろう。その紅葉に俺は池富城を助けることができなかつたなどと、より不安になることを深く考えずに言つてしまつた。

つまり、俺は子供だつたのだ。こんな場面で俺は自身の弱みを見せ、紅葉を精神的に追いこんでしまつてゐる。好きな人にこんなことをしている俺など男じやないと思う。ここは虚勢でも大言でも、堂々と振舞い安心させてやることが必要だつた。俺は何をやつてゐるのだろうか……。

「でもさ、俺が何か他の方法を考えるから。心配するなよ
かなり今更の気もしたが、一応言つておいた。

「ありがとうございます。でも、もういいのです。お父様の言つことを聞かずに婚約を破棄した私が間違つていたのです」

「そんな悲しいこと言つなよ。俺が玲央との婚約を反対したから行動を起こしたんだろう？ 間違つていていたというなら、婚約破棄を薦めた俺が間違つていたんだ。それにあの時、玲央よりも俺を選んでくれたことが本当に嬉しかつたんだ。それなのに、俺を選んだことを後悔するなんてそんなことはして欲しくないし、俺はさせないよ」
「いえそんな、奏音は何も悪くはありません。私が与えられた役目を放棄したことがいけなかつたのですから」

紅葉は自分が悪かつたと言い、俺は俺が悪かつたのだと言つ。傍から見ればとても滑稽な状況なのかもしけないが、俺達は至つて眞剣だ。

コンコンコン。

そんな状況の中、紅葉の部屋の扉がノックされた。なんて空気が読めない人だろうか？ いや、読めているからこそこの雰囲気を払拭しに来てくれたのかもしけない。

紅葉が入ることを許可するとゆつくりと扉が開いた。扉の向こうに立つていたのは紅葉の兄だつた。

「お兄様でしたか。どうされましたか？」

紅葉は平然を装っているが、声が少し震えていた。

「紅葉、君は玲央君との婚約を破棄したそうだね？ そそのかしたのは奏音君だね？ なんて事をしてくれたんだ。君達のせいで今池宮城は一大事さ」

言葉とは裏腹にやれやれというジェスチャーをして、軽く微笑む。この前会つた時も思つたが、この人は何を考えているか全く分からぬ。

「さて、紅葉は君が引き取つてくれることになつたのだろう？ 君は晴れて花山院の跡取りかい？」

実の妹である紅葉を物のように扱つていることが気にいらなかつたので、文句を言つたのだけれどもまともに取り合つてもらえず質問に答えるように促された。

「それが、うまくいかなくて花山院の跡取りにはなりませんでした」「はい？ 私の聞き間違いかな？ 奏音君は花山院の跡取りになれなかつたと聞こえたけれど？ もし、本当だとしたら君たち二人は勝手な恋愛」つこに私達を振り回して、池宮城を追い込んだということだよね」

「そんな言い方はないだろ？！ 倘達は真剣なんだ。結果として駄目だつたけれど、少なくとも紅葉は池宮城のことを思つているんだ」俺は紅葉の兄に声を荒げ反論したが、紅葉は俯いてごめんなさいと謝つた。紅葉は兄に強い態度に出れないらしい。確かにこんな嫌味ばかり言い続ける兄など、苦手になつても仕方がないと思う。

「では、この責任はどちらが取つてくれるのかね？ 遊びでなかつたというのなら、大人らしい対応をしてもらわないとね」

傷つき痛めている心の中に土足で踏み込んでくる俺達の目の前にいる人の皮を被つた悪魔に対し、俺は怒りを通り越して殺氣をはらむまでに至つた。

「そんなに睨まないでおくれよ。私は何も間違つたことは言つていなかつう？ それとも、まだ親に尻拭いをしてもらわないといけ

なかつたかな？」

俺達が何も言えず黙つていると、扉に体当たりでもしていたかのように執事らしき人が飛び込んできた。

「なんだね君、落ち着きがなさすぎだよ。誉れ高い池宮城の執事としてそんなことでは恥ずかしいよ」

嫌味の標的にされた執事は困惑しながらも、要件を話した。

「申し訳ありません。ですが、緊急事態なのです。先ほどから河原林が池宮城系列の会社の株を買い漁り始めました」

「M&Aかつ！ 河原林め、婚約を破棄したことへの腹癒せのつもりか。お前達のせいにこんなことになつてしまつたぞ、どうしてくれれるんだ」

突然の事態に俺や紅葉は何も言葉を発することができなかつた。河原林が最後に言つていたことはこうのことだつたのだ。

「お前たちなどどこかに行つてしまえ、邪魔だ。私は買収に対抗しなければならないのでな。さてお父様と話しあわなければ」

それだけ言つと紅葉の兄は執事を連れて、早足で紅葉の部屋を出でていつた。

紅葉は扉が閉まるのを確認するよりも前に泣き崩れてしまつた。言葉にならない泣き声を上げる紅葉を俺は慰めたが、なかなか泣き止むことはなかつた。

俺は何とか紅葉を泣き止ませると後をミキ、マキに任せた、河原林邸を目指した。こんなことになつてしまつたのは俺の責任だ。何とかしてやめさせることができなければ、紅葉に会われる顔がない。ここにやつてくるのも何度目だろうか？ 門番も直ぐに俺を認識し、連絡をとつて中に入ってくれた。

巨大な玄関の扉を開くと玲央が腕を組んで俺を見下すようにして出迎えてきた。

「どうしたんだい、奏音？ 君は私と紅葉さんとの婚約を破棄させたのだから、もうここに用はないはずだけれど？」

玲央は分かつていて俺が来た理由を聞いているのだ。俺の方が立場が弱いことが分かつていてるから、かなり俺を見下している。

「今回来たのはそれについてじゃないんだ。今河原林が池宮城の株を買つてているだろ？ それをやめてくれないか？」

俺はこれが無理なお願いだと分かつていて。だから俺は普段のノ

リではなく、真剣に深く頭を下げて頼んだ。

「そんなこと無理に決まつてているじゃないか。今は河原林を大きくする最大のチャンスなんだよ？ 俺は池宮城を吸收して、紅葉さんを嫁にするんだ！」

「そんな事しても紅葉は喜ばないぞ！」

「そんなことわかつていてさ。池宮城を吸收したら、紅葉さんは悲しまれるかもしれない。しかし、こうしなければ池宮城は救えないし、そして何より紅葉さんを救えない！」

こいつは紅葉が俺と一緒にいると不幸になると云いたいのだろう。確かに、今の俺は池宮城を救えなかつたばかりか紅葉を泣かさしてしまつた。でも、俺はもう弱さを見せない。紅葉に心配をかけさせないと心に決めたのだ。だから、俺はこんなところでは諦めない！

「玲央には悪いが紅葉は俺が幸せにする！ 池宮城も救つて見せる。だから、池宮城を買収しないでくれないか？」

「庶民のお前に何ができる？ それに私は私から紅葉さんを奪つていつたお前を許すことができない！ お前の頼みなど聞けるものか！」

玲央は冷静さを失いかけてきてる。玲央から見たら俺は好きな人を横からかすめ取つて行つた憎き奴なのだから、そんな奴から真剣に頼まれても、頭に血が上るのは当たり前かもしれない。

「そこを何とかできないか？」

「ぐどい！ 俺はお前の戯言にもう付き合ひ気はない。早くこの屋敷から出でいけ！」

玲央は警備員に俺を屋敷の外につまみ出すよつて云つと、俺は一人の大男に両腕を掴まれ外に引きずられる。

「離せ！俺はまだ玲央に用があるんだよ」

俺は玲央のところに行こうと全力で暴れるが、全然逃げられそうにない。その間に玲央は屋敷の奥に歩いていつてしまつ。

「おい、玲央。何とか言えよ！」

俺は抵抗虚しく、門の外に捨てられた。

俺にはもうどうすることもできなくなり、最後にやつてきたのはここだつた。できることならここだけにはもう来たくなかつた。ここに来る前に紅葉にお別れを言つておくべきだつただろうか？

「三度わしの前に現れたのだから、『三度目の正直』といつやつかのう？　流石にもう戻つてくることはないだろ？　とは思つておつたのじやが、何か心情の変化でもあつたのか？」

「まあ、そんなところだよ」

「先に言つておくが、わしは条件を変える気はないからな？　わしを説得するつもりだつたのなら諦めることだ」

爺さんは一昨日の屋敷を訪れた時と同じように煙管を吹かしている。三度目と同じこともあってか、俺にはもうほとんど興味を失くし、庭を見つめながら俺に話してくる。

「分かつていい。俺は爺さんの傀儡になつても構わない。紅葉に会えなくなつてもいい。だから、池富城を助けてやつてくれないか！」「頼み方がなつていいが……、まあいいだろ。その言葉、後で忘れたとは言わせないぞ？　わしとしてはそこまでして池富城を助けようとするお前の気持ちが理解できないが、約束は約束だ。その頼み今すぐに聞いてやろうではないか！　お前には今日ばかりは花山院が経営する学校に転校してもらひ。同じ学校では関係を断つなど無理だからな。いいな？」

「ありがとう……」

俺は心の底から素直にお礼を言える気持ではなかつたが、爺さんは俺の言つことを聞いてくれた。

「だから言つておるだろ？　口のきき方がなつていい！　これ

から花山院の跡取りとして生きてこゝのじゅかりさんな」とではだめじや

「あつがとつゞこました」

俺はもうじれから爺さんの言つひとを聞いて生きてこゝひとをへ承したのだ。言われたことはやるしかな。

「そじゅ。これからは厳しくやつていくからひ、覚悟しておきなさこ」

爺さんは心を落ち着けるかのように煙をゆりくつと吐く。

「お前がわしの跡取りになつてくれてわしは嬉しいだ。お前の母親があの小僧とここを出でこつたときは、どうなる事かと心配したものだ。本当によかつた、よかつた」

爺さんは前に俺が訪れたときのように豪快に声を荒げて笑う。それに対し、俺は爺さんに合わせて愛想笑いをすることしかできなかつた。

「突然ですが、家庭の事情で悠木さんは転校することになりました。

俺はクラスメイト達の前に立たれ転校することを担任に話してもらつてこる。

爺さんの配慮で俺は最後にお別れを言つたために学園に来るのとを許された。

「奏音ちゃん、そんなの聞いてなよー。じつじて話してくれなかつたの」

「そつだぞ奏音ー。俺達は親友だと想つていたのは俺だけなのかよー！」

瑞希と周の言葉に謝ることしかできなかつた。爺さんはこれから友達と会うことも許されていないのだ。ここまではこれまでが最後になつてしまつ。

俺はこの日の授業は全くもって頭に入つて来なかつた。何時間も授業はあつたのに俺は休み時間も含めてその間微動だにしなかつたらしい。

放課後になり、紅葉を迎えて行つた。先に紅葉には後で会いに行くからそれまで来ないでくれと言つていたので、紅葉は待ちくたびれていたらしい。しかし、紅葉とは誰にも邪魔されない場所でしつかりお別れを言いたかつたのだ。

「紅葉、迎えに来たぞ」

「奏音、私は貴方に話したいことがたくさんありますわ」

「俺もだ、でも場所を変えないか?」

ここは紅葉のクラスでありまだ数人ではあるが生徒達が残つている。俺も紅葉も今や有名人になつてしまつてるので、ここでは話しづらい。

俺達は学園の屋上にやつてきた。もうこの時間になると日も傾き、空をオレンジ色に染め上げている。

「紅葉。実は俺、花山院の跡取りになることに決めたんだ。だから、俺はこの学園から転校するし、もう紅葉に会うことはできないんだ。だから、俺のことは忘れてくれないか?」

「何でそんなことを勝手に決めてしまつたのですか。私は貴方のことを忘れることがなきません」

「でも、あのときは他に方法がなかつたんだ。そのおかげで池宮城は河原林に吸収されることなく、立て直しできかけているだろ?」

俺が跡取りになることを認めるに、約束どおり爺さんは池宮城を立て直すために動いてくれた。今や、池宮城は河原林の脅威から逃れ、順調に立て直している。

「確かに花山院財閥のおかげで池宮城は立ち直りつつあります。ですから、もう私達の間にはもう問題は残されてないのですよ? 家柄も私達なら問題無いではありませんか?」

「でも、これが爺さんとの約束なんだ。爺さんが約束を果してくれたのだから、俺も果さなければならぬ」

「その約束と私、どちらが大事なのでですか！」

紅葉は白く透き通つた肌を赤らめて、感情的になつていて。トパーズの様な美しい彼女の瞳は真直ぐ俺を見つめて、視線を逸らさうとしない。

「そんなこと、言つまでもない。紅葉が大事に決まつていて。でもね、もし俺が爺さんとの約束を破れば、爺さんは池宮城を援助しなくなり、池宮城は再び傾いてしまう。そうしたらまた紅葉が悲しむだらう？ 俺は紅葉に悲しんで欲しくないんだ」

「貴方と会えなくなつても私が悲しむとは思わないのですか？」

俺が今まで幾度となく魅せられたきた彼女の瞳に涙が溜まりだす。俺は彼女に近付きそつとハンカチで彼女の涙を拭きとる。

「思つたさ。だけどね、俺以外の誰かが紅葉を幸せにすることはできるかもしれないけれど、今池宮城を救うことができたのは俺だけだつた。だから、俺は紅葉を悲しませないために池宮城を救うことにしてたんだ」

「私は貴方以外の人など考えられません」

「そう言つてもらえて、俺も嬉しいよ。でも本当に仕方がなかつたんだ」

紅葉は俺の言葉を聞くと涙を流し、声を上げ泣きはじめた。

そんな紅葉を俺はそつと抱き締めて、頭を撫でた。

永遠に続いて欲しいと思う俺たち二人を置いて、次第に日は傾き辺りは暗くなつていく。

太陽は俺達を照らすことを諦め、次の人々に温もりを「えに行つてしまつた。見上げれば、星屑の海が広がつていて。

俺達は寄り添い学校の屋上にまだ座つていて。

「紅葉は泣き虫なんだね。初めて会つたときはそんな風には思わなかつたよ」

「私は貴方以外の前では泣きません」

「そつか……、紅葉の涙は俺だけが見れる特別なものなんだね」

「そうですよ、だからもつと大事に扱つて欲しかつたですわ」

紅葉はもう泣いていないが、瞳の周りは薄らと赤くなっている。

「俺は大事に扱つたつもりだつたけどな？」

「ハンカチの生地が少し痛かつたですわ」

「そうか？ それは悪かつた。もつとそつと拭いてやればよかつたな」

「そうですよ」

「一人はどちらからでもなく、笑いはじめる。

「こうやって奏音と話すのもこれで最後になつてしまつのですね。もう少し、奏音と早く出会えていれば……」

「過去のことなど考へても仕方がないさ。だから、これからのことを考えた方がいいよ」

「そうですわね。奏音は花山院の跡取りになるのですもの、これから大変ですわよ」

「そんな、脅さないでくれよ」

紅葉とこうやって楽しく話をしたのはかなり久しぶりの様な気がしてならない。ここ数日は本当に大変だつたから仕方がないかもしれないが……。

こうして二人で過ごす最後の時を迎えた俺達はそれぞれの道を歩みだした。この一本の道はもう交わることがないのだろうか……。

私は御爺様の言つことを聞いて、今まで花山院の跡取りになるべくいろいろなことを学んできた。そしてやつと花山院の代表になることが認められた。ここまで來るのにあれから十年かかった。

御爺様はやつと社交界でに私が出ることを認めてくれた。社交界に出ていなかつた私はこの世界ではあまり知られていない。噂くらいにはなつていたらしいのだが、身内以外は花山院に直系の跡取りがいるなど知らないのだ。

しかし、私が出ないからといつてこの国で最も歴史あると言つても過言ではない花山院が出ないわけにはいかない。だから、私の影武者みたいな人がずっと出ていたそうだ。だから、私の存在が認識されていないのも自然なことかもしれない。

普通なら社交界は成人になる前にデビューするのが普通らしいのだが、私はもう二十代後半。かなり歳を取つてしまつてゐる。

私のデビューがこんなにも遅いことには幾つか理由があるのだが、何と言つてもその一番の理由は……。

私は後ろ姿を見て、直ぐに誰なのか理解した。

「麗しき御婦人。私と一曲踊つてくれませんか？」

「はい。喜んで」

その女性は上品に笑うと差し出していた私の手の上に彼女の手を重ねてきた。

「久しいな、紅葉」

「お久しづりです、奏音。お元気そうでなによりです」

オレンジ色の雅やかなドレスに身を包み、楽しそうに俺と踊つてゐる。

俺達は十年の時を経て再び共に歩みだしたのだ。

ヒュローゲ（後書き）

最後まで読んでくださつて本当にありがとうございました。ここ
で『ライスMと味噌汁で』はとりあえず終わりになります。この世
界観でもう一作ぐらい書きたいと思いますがいつになるやら……。
最近は更新していなくてすみませんでした。

この小説は実質、私の初作品なのでうまく書けてはいなかつたと
思います。文章も稚拙で、書いていて何故もつとしつかりとした文
章が書けないものかと思いました。内容も筋が通つていないとこ
が多々あります。

次に書くときはもう少しいい作品を作り上げたいと思います。で
すので、もし私の次回作を見かけたなら読んでくださつたら幸いで
す。

ある日の放課後

俺は紅葉達と学食でお茶をしている。

「紅葉は本当に上品に食べるよな」

「それは池富城のお嬢様として恥ずかしく無いよう振舞いを教えられましたから」

「でもや、俺達が最初に会つたときは紅葉がそんなに上品とは思わなかつたぜ。そういうえば、紅葉と最初に会つたのはここだったよな」

「そう言つと、彼女は頬を赤らめて恥ずかしがる。

「た、確かにあの時の私は品がありませんでした。この学園に馴染んでいなくて、変に強がつていたのかもしれません」

「一年以上通つて馴染んでなかつたのかよ！」

「そうだよな。紅葉が消しゴムを投げるなんて信じられないぜ」

「えつ！ 私その様なことしていませんよ？ するはずがないではありませんか」

「じゃあ、品が無かつたつてどういうことだよ？」

紅葉は先程よりも顔をより赤くした。

「私、大きな声を上げてしましました。今思い出しても恥ずかしいですわ」

「じゃあ、俺のラーメンを食べれなくしたのは誰だよー。」

俺はミキとマキをジト目で見ると、彼女達は全力で首を横に振る。そんなに振つたら取れてしまわないだろうか。

「私は奏音のことを当たり屋かと思つていましたわ

当たり屋つてよくそんな言葉知つてたな。

「私が五月蠅くしていたから、食事に消しゴムが入つたと文句を言つてきたのかと……。あのときはすみませんでしたわ」

「ああ、お互い様だから気にするな。それより、紅葉じゃないなら

消しゴムを入れたのは誰なんだ！」

ミキとマキは先程より大きく首を振つて否定した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077i/>

ライスMと味噌汁で

2011年3月21日22時56分発行